



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

最期の場面に最後まで立ち会ったマリアに倣う

新年あけましておめでとうございます。夜中のミサに参加してこのミサにも参加している方は、同じことを二度も聞かされておめでとうございます。初日の出も2回拝めたと思うので、おめでとうございます。

神の母聖マリアの守るべき大祝日から2018年を始めます。マリアは毎年わたしたちに模範を示してくれる方です。福音朗読と、福音書でマリアが登場するほかの場所にも触れながら、今年一年の大枠を見つけることにしましょう。

わたしの書棚には、たまにしか出番のない書物があります。ふだんは置いてあるだけですが、考えていることを確かめるために必要な書物です。その中の一冊が、「四福音書対観表」という本です。英語で”Synopsis”と呼ばれる種類の本です。2万円もしました。

簡単に言うと、四つの福音書を読み比べる本です。福音書に収められているイエスの言葉、たとえ話などを、マタイではどう書かれているか、マルコではどのようにになっているか、ルカではどうか、ヨハネにも採用されているのかと、読み比べる本です。

たいていの人は、「そんな読み比べが何の役に立つのか」と思っているでしょう。わたしもそう思いますが、たまに読み比べてわかることがあるのです。イエスの誕生にまつわる話はマタイ福音書とルカ福音書の2福音書が書き残していますが、その中で羊飼いたちが登場するのは本日の朗読に選ばれているルカ福音書だけです。一方、占星術の学者たちが登場するのはマタイ福音書だけです。

登場人物の違いは、イエスの誕生のどこを強調したいかの違いです。ルカ福音書は、野宿して暮らすしかない羊飼いやにもイエスは現れてくださったと強調していますし、マタイ福音書は諸外国にもイエスは礼拝されるお方であると強調しているわけです。両方読み比べることで、イエスの誕生の意味を重層的に読み解くことができます。

今の例でこの本の価値が分からなければ致し方ありません。先に進みます。本日の福音朗読で登場する羊飼いたちが最初に出会った尊いお方は誰でしょうか。それはイエス・キリストです。主の天使が「救い主」「主メシア」と呼ぶ尊いお方に、生まれて初めて会ったのです。

彼ら羊飼いは、羊を養いながら住まいを転々としていく人々でした。動物を飼育するという仕事は、当時は低く見られていた仕事だったでしょう。するとこの人たちが高貴な人に直接会うなどということは考えられなかったわけです。尊いお方に会うことなど想像すらしていなかった人生でしたが、思いがけずその機会を与えられました。

さらに羊飼いたちは、この素晴らしいチャンスを自分だけのものにしなかったのです。羊飼いたちは自分たちが見たことを人々に知らせました。ここでちょっと余談ですが、羊飼いたちが知らせた人々はどんな人たちだったのでしょうか。

わたしの想像ですが、同じ羊飼いや仲間とか、羊をやり取りする商売相手とか、飼っている間に羊にも水を飲ませるでしょうから、水汲み場で出会う女性たちだったのではないのでしょうか。話を聞いた人たちも、社会では高い身分でない人々だった。こうして羊飼いたちは、社会の底辺にいる人々に、広く救い主の誕生を知らせることになったわけです。

羊飼いたちにとって、幼子イエスは自分たちが親しくさせてもらった、最初で最後の尊いお方だったかもしれません。そこから一步踏み込んで、救い主イエス・キリストが最後に出会った人は誰だったのでしょうか。わたしは、マリアがその人だったのではないかと思っています。

先に話した「四福音書対観表」にもう一度戻りましょう。イエス・キリストの受難の場面はマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネすべての福音書が取り扱っていますが、イエスの十字架のそばで母とそのそばにいた愛する弟子とのやり取りを書いているのはヨハネ福音書だけです。それは当然と言えば当然です。

この二人とのやり取り、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」「見なさい。あなたの母です」と語りかけたのが、イエスの十字架上での最後の場面ではないかと思っています。ですからここで語りかけた母と愛する弟子が、イエスが最後に出会った人だと思うのです。

もちろんイエスと一緒に十字架につけられた犯罪人たちともやり取りがあります。ですがわたしは、母マリア、愛する弟子とのやり取りを最後にもっていきたいです。特に母マリアこそ、神がこの世にお遣わしになった御独り子が最初に出会い、最後に出会った人だったのです。

これは注目すべき点だと思います。わたしたちが2018年の最初の日に祝っている神の母聖マリアは、御独り子の最初の場面から最後の十字架の場面まで立ち会ったお方でした。わたしたちは一年の初めに神の母聖マリアの模範を仰ごうとしています。「マリアはイエスの最後の瞬間まで、そばを離れないお方である。」これがわたしたちに示された模範ではないのでしょうか。

言い換えると、イエスが最初に出会い、最後に出会った方マリアに倣うことが、一年の初めに求められているということです。わたしはお生まれになったイエスと最初に出会う人として心構えができているだろうか。十字架の上で救いのわざを完成されるイエスと最後に出会う人として心構えができているだろうか。これらが問われているのです。

すでに、「最初に出会う人としての心構え」は御降誕の夜半のミサで考えました。ここでは、「最後に出会う人としての心構え」を結びとして考えましょう。ひとことで言うなら、「最後までイエスのそばから離れない覚悟があるか」ということです。

今日は新成人の祝福式があります（でした）。新成人にも問いたいと思います。「あなたは、最後までイエスのそばを離れない覚悟がありますか。」この問いに「はい」と答える人が、真の意味で大人の信者なのです。



主の公現 (マタイ 2:1-12)

公に現れた。公に表した。

主の公現の主日を迎えました。今年はあとに続く「主の洗礼」が日曜日ではなく、ご公現の翌日に祝われます。主の洗礼について日曜日に学べないので残念です。その分、今週のご公現の中で学びを得て、生活の中で活かすことにしましょう。

金曜日にお見舞いした人の中で、ある年配のご婦人がしきりにわたしのことを「中田藤吉神父さまですか？」と尋ねるものですから、「そうだよ」とつい言ってしまいました。最初は「その中田神父さまじゃなくて、別の中田神父です」と懸命に説明したのですがうまく伝わらず、何度も「中田藤吉神父さまですか？」と言うものですから、説明するのがきつくなって「そうだよ」と言ってしまいました。

ここで問題にしたいのは、わたしが言った「嘘」ではなくて、「その中田神父じゃなくて」の冒頭「その」です。いったい、「その中田神父」とは「どの」「中田神父」なのでしょう。ご婦人は中田藤吉神父さまから婚姻の秘跡を授けてもらった方でした。ですからご婦人にとっては言葉では言い表せないほどの恩を受けた「中田神父」なのです。

「その」が付いた「中田神父」は、価値が何倍にも跳ね上がる神父さまです。「その」という冠詞が付いただけで、「わたしに婚姻の秘跡を授けてくださった恩人」「田平教会の恩人」「今日また、こうして見舞いに来てくださった恩人」これらの意味をすべて含ませているのです。

それは福音書でも同じことで、たかが冠詞一つなのではなく、場面によっては命を吹き込む決定的な役割を果たすこともあります。今週の福音朗読でこの決定的な役割を果たしている部分は冒頭です。「(その)イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。」

(2・1)

「そのイエス」は、「どのイエス」ですか。今日の福音の直前の段落で述べられている「イエスこそ人間を罪から救う方」ということです。福音を書き記したヨハネ、またイエスと出会い、救われた人が共通に持っている思いです。「そのイエス」が、公に現れました。あなたはどのように行動しますか？ということなのです。

与えられた朗読の中で、「星」と「拝む」が繰り返されていますが、その中で「拝む」という言葉に注目してみました。占星術の学者はこう言います「わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2・2) まず言葉で、ユダヤ人の王としてお生まれになった方を拝みたい、拝もうと想っていると表明しました。

一方ヘロデはこう言っています。「見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」(2・8)。ヘロデはもちろん本心からこう言っているではありません。見つけたら殺そうと思っています。彼は本心を偽り、隠し、公にしないのです。

ヘロデとは違って、占星術の学者は、言葉で自分たちの意思を表し

ただけではなく、態度でも表しました。「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」(2・11)

救い主が公に現れると、ヘロデは本心を隠し、占星術の学者たちは言葉でも態度でも本心を表しました。わたしたちも態度を求められています。あなたは、公に現れた救い主、公にされた神の救いの計画の前に、本心を隠しますか、それとも本心を表しますか。

もしわたしたちが、星の光によって照らし出された神の救いのしるしの前に、本心を隠してしまうなら、わたしたちはヘロデと同じグループに属することになります。反対にわたしたちが星の光によって照らし出された神の救いのしるしの前に、言葉でも態度でも本心を表すなら、わたしたちは占星術学者の仲間なのです。

わたしたちの態度次第で、わたしたちの人生が変わります。公に現れた救い主を前に、取るべき態度を隠す人は、単にヘロデの仲間であるだけでなく、ヘロデと同様に最後の最後までイエスを知ることなく、照らしを受けることもできません。

そうではなく、公に現れた救い主を前に礼拝をささげるなら、わたしたちは占星術の学者と同じ仲間であるだけでなく、彼らが礼拝後に「ヘロデのところへ帰るな」(2・12)と夢でお告げがあったように、絶えず神の導きのもとに生きることができるのです。公に現れたイエスを前にどのように振る舞うかは、生涯イエスとは誰かを学ぶことなく闇の中を歩くのか、イエスを救い主と受け入れて生涯照らされて生きるのかの分かれ道なのです。

最後に、わたしたちがさらに深く、占星術の学者たちの生き方に学ぶ方法を考えてみましょう。ひょっとすると彼らは、まことの礼拝を一度ささげて責任を果たしたということで、安心して祖国に帰り、それつきりかもしれません。そうではないだろうと思うのですが、彼らにそれ以上の義務はないわけです。

しかしわたしたちは違います。洗礼を受け、堅信によって洗礼の恵みを強めてもらったわたしたちは、占星術の学者たちを超えて今日も、さらに2018年も、言葉と態度で救い主に礼拝をささげます。しかも礼拝を終えて生活に戻ってからも、言葉と態度で救い主に導かれていると表明するのです。公に現れた救い主への信仰を、日の上るところから沈むところまで、隠すことなく生きるのです。

公に現れた救い主を、公に言い表しましょう。言葉と態度で、公にしましょう。わたしたちはこうして、占星術の学者たちを超えて、「あのイエス・キリスト」を宣べ伝えます。



年間第 2 主日 (ヨハネ 1:35-42)

わたしたちはメシアに出会った

主の降誕と降誕節が終わり、年間の主日が少し進みます。2月半ばの灰の水曜日を迎えるまで、イエスの語りかけに耳を傾け、また復活後の献堂百周年に向けて、高い目標をもって過ごすことにしましょう。

わたしの洗礼名は聖トマ使徒です。祝日表で7月3日を見るとそう書いています。ただ祝日表の後ろのほうにある教会住所録で田平教会を見ると、田平教会の主任司祭としてトマス中田輝次と記載されています。

なぜ違うのかは、今日の説教からずいぶん離れるのですが、教区に履歴書を届ける際、当時は新共同訳聖書が浸透し始めたころで、新共同訳に倣って洗礼名を「トマス」と届けたのでした。教会の典礼で使用される呼び名で届けるべきだったと、今となっては後悔しています。

さてこの洗礼名をいただいたのは、代父になってくれた喜蔵おじさんの洗礼名がトマだったからです。50年前のことですから、はほぼすべての人が代父母の洗礼名をもらっていたのです。小さいころから「抱き親」と言って親しくしていきまして、正月とか大切な日には遊びに行っていました。

喜蔵おじさんはわが家と違って非常に信仰熱心でしたので、おじさんの家に長居すれば、ロザリオと晩の祈りのおまけつきでした。それには閉口しましたが、よく鍛えてもらったものです。誰かの家に寄せてもらえば、その家のしきたりに従うのが当然のことで、その家のしきたりから多くを学びます。もし自分に合わないしきたりであれば、早めにお暇することになります。

今週の福音朗読で、ヨハネの二人の弟子が、洗礼者ヨハネに促されるようにして「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」(1・38)とイエスのもとを訪ねて行きます。彼らはどこにイエスが泊っておられるかを見、そしてイエスのもとに泊まりました(1・39参照)。

わたしが代父となってくれたおじさんの家にお世話になってそのしきたりを学んだように、ヨハネの二人の弟子は、イエスのもとに泊まったことで、多くを学んだに違いありません。ヨハネ福音記者が「見た」という言葉を使うとき、それはただ肉眼で見ただけではなく、「理解した」という意味でも使われています。

ですからヨハネの二人の弟子はどこにイエスが泊っておられるかを見たところでは、イエスがどのように時間を用いているか、どのように食事を始めて、食事を終えるのか、一日の終わりをどのように過ごして床に就くのか、事細かに見て理解したのです。

「泊る」ということも同じように考えて間違いないでしょう。イエスの暮らしを体験し、イエスの生き方に自分も共感し、こんな生き方をわたしたちもこれからしたい。そう思わせるだけの豊かな体験をしたのです。ただ単に泊っただけではなく、イエスと一緒に寝食を共にすることに決めたのです。

わたしたちも想像してみましよう。わたしたちはイエスと時代も場所もまったく違いますから、ふつうに考えればイエスがどこに泊まっておられるかを見ることもできないし、イエスのもとに泊まることも叶いません。しかしわたしは、イエスがどこに泊まっておられるかを見る方法を、イエスのもとに泊まる方法を示したいと思います。

こういうことです。ヨハネの二人の弟子はイエスが暮らしの中でごく自然に御父に祈り、祝福をして食事をし、御父と共に眠りにつく様子を見たはずです。わたしたちが同じ生活を目指すなら、そこにはイエスがおられ、わたしたちはイエスのもとに泊まる者ではないでしょうか。

時代と場所を超えて、わたしたちはイエスがどこに泊まっておられるかを理解しています。望めば、イエスのもとに泊まることもできます。わたしたちが暮らしの中で、父なる神に祈り、父なる神と共に眠りにつくなら、そこはイエスが泊っておられる場所なのです。

もう一つ加えましょう。イエスに従った二人の弟子は、シモンに出会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言いました(1・41)。それはイエスに出会った者、イエスのもとに泊まった者にしか語れない言葉です。

ではわたしたちには語れない言葉でしょうか？わたしはそうは思いません。わたしたちもまた、「わたしたちはメシアに出会った」と、人々に語るができます。もしわたしたちがイエスのもとに泊まる生活を価値あるものだと思うなら、語る必要があるのではないのでしょうか。

「わたしたちはメシアに出会った。」これは二千年前の、わたしたちには望むことすらできない出来事なのではなく、今もわたしたちの暮らしの中で、望めば叶えることができるし、告げ知らせることができるのです。



年間第 3 主日 (マルコ 1:14-20)

父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して

年間第 3 主日 B 年はイエスがガリラヤで伝道を始め、四人の漁師を弟子にする場面が選ばれました。四人の漁師を弟子にする場面で、あとに残していく人々のことを考えてみました。

司祭や修道者の中には、よく決断したなあと思う家庭環境の人がいます。ある先輩はわたしが赴任したことのある小教区出身で、一人っ子です。しかも、ご両親が高齢になってから生まれたと思われるので、周囲の方々の支えはあるでしょうが、晩年を託す人はいないわけです。

ある後輩は、大神学生時代から父親が認知症でした。高齢で、認知症の父を神さまに委ねて司祭職を選ぶ。これもよく決断したなあと思います。またある神父さまは東芝に就職してすでに課長まで昇進していましたが、司祭職への思いを持ち続けていました。40 歳を過ぎて大神学校に入学し、司祭になっています。その方のお父さんはたしか助祭の時代にお亡くなりになったので、司祭叙階は見えていないと思います。

さらに大司教様は、来年度から 44 歳の韓国人を長崎教区の神学生として受け入れるそうです。これまで韓国から神学生や司祭を受け入れたのは日韓の交流のためで、最終的には契約が終わると韓国に帰っていく人々でした。今回正式に 44 歳の韓国人を受け入れるのだそうです。

この件に中田神父はとやかく言えませんが、プロ野球で FA 選手が鳴り物入りでどこかに入団するような、そんな印象を受けました。わたしが応援するチームは海のものとも山のものとも知れない状態からコツコツ育てるのでいきなり即戦力を期待しませんが、来年度から長崎教区の神学生となるその韓国人は、祖国を置いて、即戦力となって日本の長崎に骨を埋めるつもりなのでしょう。

いろんな状況の中で、「あとに残していく人」のことが気にかかります。選ばれた福音朗読も、シモンとシモンの兄弟アンデレは「すぐに網を捨てて」(1・18) 従い、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネは、「父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して」(1・20) イエスの後について行きました。

この漁師たちのうち、ヤコブとヨハネについては明確に「父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して」と状況が書かれています。明らかに残されていく家族がいるわけです。残されていく家族のことを、本人たちはどのように考えたのでしょうか。イエスはそのことについてどのように考えたのでしょうか。

イエスは、だれよりも残される家族のことを心配していたと思います。意外に思われるかもしれませんが、父親を舟に残して従おうとするヤコブとヨハネ以上に、イエスは彼らの父ゼベダイのことを心配しておられたはずです。ヤコブとヨハネが心を配るのはせいぜい家族までですが、イエスは常に、すべての人に心を配って語りかけ、行動していたはずです。さまざまなことを考えた上で、イエスは四人の漁師に、最初に

声をかけたのです。イエスが心を砕いておられるなら大丈夫でしょう。

ヤコブとヨハネはどうでしょう。マルコ福音記者のちょっとした説明が、この疑問に答えていると思います。「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。」(1・19-20)

気を付けて読むと、ヤコブとヨハネは「舟の中」で網の手入れをしていました。網の手入れは、狭い舟の中でするよりも、陸に上がって手入れしたほうがよいはずですが、しかしあえて、マルコ福音記者は「舟の中で網の手入れをしている」と描きます。「舟の中」とは、「生計を立てる手段の及ぶ範囲内で」ということではないでしょうか。

同じように、「父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して」というのも、ただ単に「父ゼベダイを雇い人たちと一緒に残して」と表現する場合とは違っていると思います。

父親と雇い人たちは、舟の中でこれまで通り生計を立て、舟の中でイエスを信じ、生きるのです。しかしヤコブとヨハネは舟の中にとどまらず、「舟の外」イエスのもとに留まることにしたのです。いわばイエスという新しく、広々とした舟が、これからの漁の場所になるのです。

「わたしたちはこれまで通り、舟の中にいるから大丈夫だ。あなたは、イエスという新しい舟の中で、思う存分腕を振るいなさい。」残された父親からのたくましい応援が聞こえてくるようです。

わたしたちはヤコブとヨハネが、熟慮の上に父ゼベダイを雇い人たちを残してイエスに従ったと考えるかもしれません。ですがマルコ福音記者は、彼らは舟の中に残るから心配はない。むしろイエスが、残された家族のためにこれからも心を砕き続けると理解すべきだ、その意味を「舟に残して、イエスの後に従った」という短い表現の中に込めたのではないのでしょうか。

わたしたちも教会の何かで、協力を求められることがあると思います。ある人は任期何年という期限付きで、協力が必要になります。ある人は生涯にわたる協力です。これまでは「わたしが十分考えて、熟慮の上、求めに応じたのだ」と考えたかもしれません。

次のように考えましょう。「わたしが考えて決めるその前に、神が十分心を砕いて配慮をしておられた。だから求めに応じよう。」神が呼びかけ、神のために働くとき、それはわたしが求めに応じる能力があるから協力するのではなく、あなたのために、家族のことも含めて今後も心を砕いてくださるイエスを信じて協力するということです。

わたしを呼んでくださった神は、残されることになる家族を舟の中に残してください。ただ置き去りにするものではありません。この信仰に立って、神の国のため、田平教会のため、身近に迫った献堂百周年のため、汗を流すことにいたしましょう。



年間第 4 主日 (マルコ 1:21-28)

この人が命じると、言うことを聴く

年間第 4 主日 B 年は汚れた霊に取りつかれた男をいやす場面が読まれました。悪魔祓いと言うと現代には似つかわしくないように思うかもしれませんが、悪霊を追い出す司祭は現代でも教皇庁から選ばれて存在します。悪霊を追い出したイエスよりも、出来事に人々がどのように反応したかに注意を向けるほうが良いと思います。

いよいよ中田神父のマラソン第一弾が始まります。今日は午前 11 時に北松農業のスタート地点から他の選手と一斉スタートして生向（いけむこ）バス停まで走ります。皆さんの中には一週間前の日曜日 11 時に、沿道に座ってわたしが走って来るのを待っていた人がいると聞きました。「神父さまはまだか」と座り込みして待ってくれたのでしょうか。ありがたいことです。凍えて地蔵様になったのではないのでしょうか。

この一週間、実際のコースを走って、1 日おきに「タイムを計る日」「疲れを残さないようゆっくり走る日」と交替で繰り返してきました。いつも走りに出るときは悪魔との戦いでした。「今日は特別寒いぞお。明日にすれば？」悪魔はわたしに取りつき、わたしの足を引っ張ります。そのたびに、「黙れ。出て行け」と追い払って練習に行きました。

駅伝に出たのは好きだからではなく、賑わせのためです。ですからわたしを動かしているのは、教会と地区とを結びつけようとしているイエスさまです。与えられた区間のタイムをいちおう計りましたが、3 回とも 8 分 45 秒でした。後続には申し訳ないと思っています。

一人、教会の高校生がわたしと同じ区間に出ているという話を聞いています。顔も想像つきます。わたしに免じて手心加えるとはとても思えませんが、わたしはその高校生女子のうしろ姿を見ながら、女子高生の香りをかぎながら走ろうと思います。

マラソンの第二弾は 30 日（火）五島市福江での司祭団 10 キロマラソンです。ここでは、説教台にぶら下げているポスターを胸に貼り付けて、てくてく走ってこようと思います。昔のように順位を争える速さではありませんが、かえって百周年の宣伝にはちょうど良いと思います。報告を楽しみにしてください。ついでの話ですが、マラソンに出たご褒美の休みを一日ずつください。日程は「瀬戸山の風」に載せています。

福音朗読に移りましょう。出来事を目撃した人々は驚いて、論じ合いました。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」（1・27）

皆さんは「汚れた霊」にばかり目が行くかもしれませんが、与えられた朗読個所でいちばん多く取り上げているのは「教え」あるいは「教える」ということです。数えてみましょう。「イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。」（1・21）「人々はその教えに非常に驚いた。」

（1・22）「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった」（同）「権威ある新しい教えだ。」（1・27）

短い朗読の中で、4回も繰り返されています。つまりこの物語ではイエスの教える姿が中心なのであって、汚れた霊を追い出すのはイエスの権威ある教えを証明する一例に過ぎないのです。

ただし中心がイエスの教える姿であったとしても、その影響が同心円のように効果的に広がっていったかということそうでもないようです。中心であるイエスの教えるそのそばにいた目撃者たちは、「皆驚いて、論じ合った」（1・27）というのです。

たいてい「論じ合う」という場面は意見が分かれ、双方が意見をぶつけ合っているさまです。彼らはすぐ目の前でまったく新しい権威を帯びて教えるイエスを見ていながら、権威に裏打ちされた驚くべき御業を見ていながら、ああでもないこうでもない論じ合っているのです。

イエスが権威をもって教える様子、イエスの権威を裏付ける御業、これらを目撃した人々がすることは、論じ合うことでしょうか。教えるイエスに耳を傾け、教えを受け入れることです。この場面で汚れた霊だけが、教えるイエスに対してなすべきことを叫んだのです。

「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」（1・24）もちろんなすべきことを果たしません、汚れた霊がイエスの教えに耳を傾け、教えを受け入れるくらいなら、汚れた霊はとっくに滅ぼされていたことでしょう。

そばにいた人々も、なすべきことが何かを知っていたのです。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」教えるイエスに耳を傾け、その言うことを聴く。これがわたしたちのすべきことなのです。

わたしたちは何をなすべきかをすでに理解しています。ところでわたしたちは今どこにいますか。わたしたちもまた、教えるイエスのすぐそばに集まっているのではないのでしょうか。「これはわたしのからだである」と、驚くべき御業をおこなうすぐそばに集まっているのではないのでしょうか。

わたしたちも、イエスのすぐそばに集まっているのですから議論してはいけません。むしろ謙虚に耳を傾け、「わたしたちはあなたの教えを実行します」と、ミサの中で答えるべきなのです。

まさかとは思いますが、こんなことをつぶやいてはいませんか。「我々を滅ぼしに来たのか。」信仰のことを口酸っぱく言って、カトリック教会はわたしの生活を滅ぼそうとしているではいかかと。

はっきりさせましょう。わたしたちの生活は、いのちを与えてくださる神が留まる場所を設けて生活をしなければ成り立たないのです。神が留まるべき場所に汚れた霊を呼び込んで、自分さえよければよい、神などいらないという生活をすれば、滅びへの道をたどるのです。

「この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」わたしたちは大声をあげて、この信仰を宣言しましょう。わたしたちが選ぶことのできる生活は、「教えるイエスの言うことを聴く」この道しかないのです。



年間第 5 主日 (マルコ 1:29-39)

イエスは人々を神に従う人に変える

年間第 5 主日 B 年の朗読は先週の朗読の続きで内容もつながっています。先週は汚れた霊に取りつかれた人をイエスがいやす場面が選ばれていました。今週も必要に応じてシモンのしゅうとめの熱を取り除き、悪霊を追い出し、宣教しています。これらを一言で言い表すことができれば、先週の朗読と今週の朗読のつながりを説明できると思います。

田平町地区対抗駅伝、五島市福江での司祭団マラソン、どちらもいい仕事をしました。駅伝はタイムこそ物足りないですが、雨にもかかわらず教会の前をあれだけ人が埋めたのはわたしのおかげだと思います。応援してくれた皆さん、小手田地区の皆さん、ありがとうございました。

司祭団マラソンは、結果的に目的を達成して帰りました。10 キロを 1 時間切るタイムで走り、前を走る何人かを追い抜き、胸に貼り付けた献堂百周年の宣伝もちゃっかり果たしてきました。ただこれらは結果的にということにして、いろいろとんでもないことをやってきました。

30 日 (火) 司祭団マラソンに向かうため、長崎の大波止から 7 時 40 分の高速船を予約していました。宿泊させてもらった大司教館から大波止は少し離れています。たとえば言うと、田平教会の司祭館から平戸港くらいの距離です。7 時 40 分きっかりに船が出向するのですが、この日わたしは寝坊して、7 時 20 分に大司教館で目が覚めました。

慌ててマラソンの格好だけを整え、他は置いたまま飛び出し、浦上教会下でタクシーを呼び止め、大波止に向かいました。平戸港に行くくらいの距離です。切符は後輩の尾高神父さまに建て替えて買ってもらい、到着した時は 7 時 35 分。恥ずかしい思いをしながら船に乗り込みました。

それでも何とかスタート地点に立ち、半分位走ったところでエンジンがかかり、前の人を追い抜きにかかります。最大の難所の上り坂で歩いている後輩も追い抜きましたし、最後はゴールの福江教会手前で、田平教会がゴールなら、生向 (いけむこ) 公民館くらいの距離で手足の長い蟹股の後輩司祭を抜き去り、25 人中 11 位でゴールしました。

教会献堂百周年の宣伝もしっかり果たしてきました。沿道のじいさんばあさんたちが「胸の張り紙は何て書いとっとやろか～」と言うので、「読みづらいのだな」と思い、必要に応じてじいさんばあさんの前を「欽ちゃん走り」して読みやすいように走りました。宣伝もばっちりです。

前にも言いましたが、わたしが走るのは好きだからではありません。賑わせのためです。教会に目を向けてもらいたい、教会と地域をつながたい。そういう思いです。実は今週の福音朗読にも、イエスの心にある一つの思いが込められていると思います。それは「神の国を告げ知らせる」ということです。

先週の福音朗読でわたしたちは、汚れた霊に取りつかれた人がいやされ、神に背を向ける人から神に従う人にならなくなっていく様子を見ました。今週の朗読の始め、シモンのしゅうとめが熱を出していたのがいやされ

ると彼女は一同をもてなしています。それはイエスに従う女性たちがおこなっていたすぐれたわざでした。

ルカ福音書に「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」（ルカ 8・3）とあります。シモンのしゅうとめも、イエスに従う女性の姿を示していたわけです。

このシモンのしゅうとめの態度が、今週の朗読全体を生き生きとさせています。あとに続く悪霊に取りつかれた人は悪霊を追い出され、本来の神に従う生き方に戻してもらいました。けれどもイエスは奇跡をおこなうことに縛られてはいませんでした。

「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」（マルコ 1・38）「神の国を告げ知らせる」これがイエスの最優先の使命だったのです。ある時は言葉で、ある時はわざで神の国を告げ知らせ、人々を神に従う人に創りかえていったのです。

わたしが参加した駅伝大会でもマラソン大会でも、ひょっとしたら多くの方は「また何か変なことをしている」と思ったかもしれません。どう思われようとわたしは構いません。そこに田平教会のことを知らせることのできる人がいるなら知らせる。それだけのことです。

イエスが人々に示した先週と今週の結び目は、「神の国を告げ知らせる」ということでした。わたしたちも自分の活動の範囲内で「神の国を告げ知らせる」必要があります。イエスは病の人、悪霊に苦しめられている人を全員いやしたわけではありませんでした。町々を巡って示されたのは、イエスによって変えられた人が、後を引き継ぐことができるように、道を開いてくださったのです。

イエスに声をかけられて従った 12 人の弟子、言葉や奇跡で神に従う人に変えてもらった人々、ほかにもそれらを目撃した人たちが、時代を超え、場所を越えて「神の国を告げ知らせる」、つまり人々を神に従う人に変えていくことを期待しているのです。

今朝あなたは、起きた時に顔を洗ったでしょうか。それだけでは父母に倣う人、兄弟姉妹に倣う人にすぎません。では今日一日を祈りで始めたでしょうか。その時あなたは、神に従う人、神の望みに耳を傾ける人に変えられたのです。教えるのは小さなことで構いません。食前の祈りを唱えて食事を始める。これ一つ教えるだけでも、あなたは自分の子や孫を、神に従う人に変えているのです。「神の国を告げ知らせる」とは、こうした小さなことの積み重ねなのです。

あと 3 カ月もすれば田平教会の献堂百周年ですが、告げ知らせるためにどうか一役買ってください。友達との会話に一言付け加えてください。「わたしたちはこの教会に百年結ばれて、今日を迎えています。」「神の国を告げ知らせる」これは遠い場所での話ではなく、身近な場所で起こるものなのです。



年間第 6 主日 (マルコ 1:40-45)

「よろしい。清くなれ」を保つために

年間第 6 主日 B 年、「重い皮膚病を患っている人をいやす」場面です。過ぎた金曜日に本日の朗読箇所を読む切り口を神さまから与えていただきました。そのひらめきというか、照らしを取り入れながら、与えられた朗読から学びを得たいと思います。

堅信式も一週間後と迫ってきました。この前の金曜日に試験をしました。祈りの試験で残念な点数をあげた子供がいました。信仰宣言を唱えることができなかつたのです。わたしはある医者から、「病人が医者の所に訪ねてきたら、まずその人に医者は謝るべきだ。なぜなら医者の力不足で、その人に病気の予防をほどこせなかつたのだから」という言葉を聞いたことがあります。

実際の医者が「病気にさせてしまい、申し訳ありません」と謝っている場面を見たことはありませんが、信仰宣言を唱えることができなかつたこの子供に、わたしはまず謝りたいと思いました。わたしの力不足のために、この子は祈りを覚えることができなかつたのです。

今週金曜日は堅信式のリハーサルで、この日までにこの子には信仰宣言を覚えてくるように伝えました。きっと覚えてきてくれると思っていますが、仮に覚えてくることができなかつたとしても、それはわたしの力不足だったので、生涯わたしは今年の堅信対象者の子供たちに果たせなかつた責任を背負って生きていこうと思っています。

今週の福音朗読では、重い皮膚病を患っている人がイエスに「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」(1・40)と言います。イエスがためらうことなく「よろしい。清くなれ」(1・41)と言われたことから、重い皮膚病の人は純粋な気持ちで願い求めたのでしょう。

清くなった人は、純粋にその清い状態を保つ必要がありました。ところが清くされた人は、イエスに寄せていた信頼を清く保つことができなかつたのです。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」

(1・44) イエスの指示を、忠実に、かたくなに守ることも、イエスに対する信頼を清く保つために必要なことです。

しかし「彼はその場を立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ」(1・45) たとあります。悪気はなかつたかもしれませんが、けれども清くされた人の行為は、イエスに寄せていた清い心から離れてしまったのです。たとえ言い広めることで多くの人が出来事を知ったとしても、イエスに寄せていた清い心を失った人のことばは、出来事の意味を違った形で、あたかも魔法使いのわざのように伝えてしまっていたのです。

わたしは祈りの試験で残念な点数を与えた子供に対し、内心腹立たしさを覚えました。しかしそれは正しいことなのかと、この説教を準備しながら考え直したのです。たしかに傍目には「毎週けいこの初めに天主の十戒、けいこの終わりに信仰宣言を唱えてきたのに、ただの一行も唱えられないとは何事だ」と思います。けれどもわたしは、叙階してから 25 年後に、そういうくだらない

ことを言うために司祭になったのだろうかと考えたのです。「もう一人のキリスト」とまで言われる身分にしてもらったのに、イエスに寄せる清い心は失われ、「それが一年間施したけいこにたいする君の答えか？」と言っているのです。間違っているのはわたしのほうです。

重い皮膚病の人にイエスは「よろしい。清くなれ」と言いました。だからたしかに清くされたのです。けれどもその清さを保ち続けるかどうかは、本人の努力にかかっています。たとえばわたしも、叙階の秘跡を通して「もう一人のキリスト」に変えていただきました。叙階の秘跡の中では、聖香油を両手に塗られ、清い手に変えられたのです。

皆さんの中にも、尊敬する人と握手をして、その日一日手を洗いたくないと思うことがあるでしょう。そのように、わたしは大司教様によって聖香油を手塗りにいただき、同じ気持ちになりました。けれどもその時の気持ちを保ち続けるのは本人の努力や心がけです。清くけがれのない手にしていただいたのに、25年たった今はどうだろうか。堅信を受ける子供たちの試験を終えて、子供たちへの接し方を振り返って、思い返すのです。

今日このミサを始めるにあたり、健康祈願祝福式を行い、3名の方が祝福式に臨まれました。祝福はたしかに受けたのですから、祝福されたのです。ですがこれまで話しましたように、これからの日々を祝福された状態で積み重ねていくのは、やはりご本人の努力と心構えなのではないでしょうか。

例えば、「神の祝福を、人生の節目に受けた。神の祝福を真剣に受け止めながら日々を積み重ねていくことが、祝福された人生につながっていくのだ」こういう考え方は必要だと思います。「祝福を受けなさい」との神からの招きは、今日この日の一瞬なのではなくて、「これからも祝福を受けて生きる人でありなさい」という「人生にわたる招き」だと考えましょう。

「よろしい。清くなれ」(1・41)。わたしもロザリオやベールの祝福を依頼されれば祝福の言葉を取り次ぎます。けれども「祝福されたロザリオやベールを持っているから祈らなくても安全だ」という意味ではないのです。祝福されたロザリオやベールを用いながら祈ることで、祝福された日々を積み重ねていくのです。

重い皮膚病から清くされた人は、清くしてくださったイエスが続けて言い渡した言葉を軽んじました。これから灰の水曜日を迎え、イエスは十字架へと歩みを進めます。奇跡や権威に満ちた言葉を聞いていた時は心躍らせたのに、イエスが十字架を選ばれると背を向ける人であってははいけません。イエスがなさるすべてにわたしたちもついて行くことにしましょう。

「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」「よろしい。清くなれ」わたしたちを招くお方は、十字架の最期の場面までわたしたちの望みに答えて働いてくださるお方なのです。



四旬節第 1 主日 (マルコ 1:12-15)

神の「試練」を恐れるな

四旬節に入りました。イエスさまが十字架の上で亡くなって、三日目に復活する大切な出来事をこれから四十日にわたって準備していきます。毎週ミサに参加して、イエスさまの死と、復活を確かめるための段階を確実に積み重ねていきましょう。

中学生の皆さん、いよいよ堅信の秘跡を受ける日がやってきました。堅信の秘跡は、洗礼の秘跡で受けた信仰を、はっきりと人々に証明する、証言するために聖霊のたまものを受ける秘跡です。大人の信者にしてもらおう秘跡と言ったりもします。神父さまが考える本物の大人のカトリック信者についても後で話したいと思います。

まず今週の福音朗読から始めましょう。「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた」(1・13)とあります。きっと四十日間、休みなくサタンから誘惑を受けられたのだと思います。一日三十分、それが四十日間続いたという意味ではないと思います。二十四時間ずっとサタンの誘惑を受け、それが四十日続いたのだと思います。

それほど長く激しい誘惑に、イエスさまはなぜ打ち勝つことができたのでしょうか。イエスさまが神さまだったからでしょうか？イエスさまが誘惑を受けられたのは、わたしたちに模範を示すためです。神さまとして誘惑に打ち勝ったのでは、わたしたちの模範になりません。わたしたちは神さまとして模範を示されても、真似できないからです。

イエスさまは人として、誘惑に打ち勝ったのです。人として模範を示してくれたのなら、わたしたちは見倣うことができます。ちょうど今はオリンピックの時期ですが、金メダルを取った人が指導してくれたりアドバイスをくれたりしたらそれはお手本になりますが、もし神さまがわたしたちに、「フィギュアスケートの10回転はこうするんだよ」とお手本を示されても真似できないのです。

イエスさまは人として、誘惑に打ち勝つ姿を見せてくれました。ポイントはどこでしょうか。「誘惑」と日本語に訳した言葉は、元のことばに近い日本語では「試」この漢字に当てはまります。2つの読み方ができますね。1つは、「こころみ」です。「試みに遭わせる」というのが「誘惑」です。

「試」この漢字はもう1つの読み方もできますね。「試練」ということです。「試練」であれば人はそこから多くのことを学んで、成長し、より強くなることができます。イエスさまがサタンの誘惑を受けていた間、野獣と天使がそばにいます。野獣は、「試み」を表し、天使は「試練」を表しています。

サタンの誘惑を「試み」と受け止めてしまえば、野獣にかみ殺されてしまうことでしょうか。けれども同じ誘惑を「試練」と受け止めれば、これまでよりも多くを学び、より強い人となって、四十日後にイエスさまが神の国の宣教に出かけて行ったように、試練を乗り越えて強くなっ

た皆さんは、自分の信仰を表に出せるようになるのです。

イエスさまが示してくれた人としての模範はこうです。「サタンの誘惑を、試練として受け止めるなら、試練はあなたを強くしてくれます。」堅信の秘跡を受けたなら、試練と正面から向き合い、聖霊の七つのたまものに助けられながら試練を乗り越えて、洗礼を受けたカトリック信者としてより強くなりたいと思います。

実際、同じことが「試み」にも「試練」にもなるものです。今、中学生は学期末試験の真っ最中でしょう。神父さまも経験がありますが、試験勉強をしていると眠たくなったりします。「眠気」は「試み」でしょうか、「試練」でしょうか。「あー眠くなった。もうあきらめよう。」そう思った人は「眠気」を「試み」と受け取ったわけです。

「うー眠い。でも今寝てしまったら後悔する。力を出し切るために、納得できるところまで頑張ろう。」こんな受け止め方をした人は、「眠気」を「試練」と受け止めた人なのです。同じことが、ある人には「試み」になってその人をダメにするし、ある人には「試練」になってその人を成長させます。

堅信で注いでもらう聖霊の七つのたまものは、「試」この漢字を「試み」ではなく「試練」に変えて、あなたを成長させてくれます。七つのたまものをもう一度思い出しましょう。「知恵」「理解」「判断」「勇気」「神を知る恵み」「神を愛する恵み」「神を敬う心」でした。どれも、目の前にある同じものを「試み」ではなく「試練」に変えて、あなたを成長させ、強くしてくれるのです。

最後に、中田神父が考える「大人のカトリック信者」を示したいと思います。世の中に「大人」はたくさんいます。皆さんより後ろに座っている人は、きっと皆「大人」でしょう。けれども、その大人たちの中には、「試」に出会うと、それを「試み」に受け取ってしまっただけで負けてしまう大人も結構いるのです。

サタンは「試み」しか与えることができません。サタンは人間を成長させるものを何も与えることができないのです。「試」この出来事を巧みに「試み」に変えて、次々と人をダメにしていきます。

神は「試み」を与えません。反対に「試練」を与えて、常に人を成長させ、強くしてくださるのです。「神さまは、目の前にあるこの出来事『試』を『試練』に変えてわたしを成長させ、強めてくださる。」こんなふうに考える人こそ、中田神父が考える「大人のカトリック信者」です。

堅信の秘跡を受けて大人の信者になっても、「試」は次々とやってきます。仕事がうまくいかなかったり、自分の考えをわかってもらえなかったりすることは数えきれないのです。けれどもこれらを、「これは試練だ。神さまはきっとこの試練を通して、成長させ、強めてくださる」と考えることができる人だけが、本物の大人です。

堅信の秘跡で本物の大人、本物のカトリック信者にさせていただけるように、このミサと堅信式のミサの中で心から願い求めましょう。



四旬節第2主日 (マルコ 9:2-10)

この世のどんなものも及ばない白さ

四旬節第2主日です。B年ですのでマルコ福音書からですが、「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」(9・2-3)とあります。この場面を何度も考えてきたわけですが、違う切り口から考えることができそうだと思います、今年の学びとしたいと思います。

久しぶりの韓国語です。動詞で、「～を好む」は韓国語で「チョアハダ」と言います。反対に、「～を嫌う」は「シロハダ」と言います。初めてこの単語を勉強した時、おやっ？と思いました。「～を嫌う」が「シロハダ」だなんて。わたしはどちらかと言うと「シロハダ」は好みだがなあ、と思ったのです。

この冗談はもちろん韓国人には通用しません。日本語をよく理解できる韓国人なら、通用するかもしれません。50歳の手習いで韓国語を学び始めたので、まあこれくらいの語呂合わせは許してください。韓国の巡礼者と二言三言会話するのはもう少しかかりそうで、つい韓国語を思い出すよりは英語であいさつするほうが楽なので、なかなか韓国語も上達しません。

福音朗読に戻りましょう。「服は真っ白に輝き」ここに注目してみると、「服の白さ」とか、「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」とか、「白さ」にこだわっています。しかし、この世の白さですと、完全なものなど何一つないと思います。それなのにここでは、この世のものでない、完全な白さに言及しているのです。

そこで、この世のものでない白さとはどのようなものか、考えてみました。わたしは黙示録のある一節を思い出しました。「長老はまた、わたしに言った。『彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。』」(黙示録7・14)小羊の血で洗って白くした。

ここに、この世のものではない白さを考えるヒントがあるのではないのでしょうか。イエスの姿が変わった場面にモーセとエリヤが現れます。ほかの福音書から補うと、「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」(ルカ9・31)とあります。イエスの死と、イエスの姿が変わることを結びつけるのに十分だと思います。

すると、イエスがまとわれたこの世のものではない白さは、黙示録で「小羊の血」と表現されたイエスの死のことではないのでしょうか。イエスの死が、この世のものを白くする。しかも、この世のものでは表現できない白さにする、ということです。

わたしたちは、白さについてどこまでこだわりがあるのでしょうか。この世のものではない白さに、関心があるのでしょうか。むしろ、白さなどどうでもよいと思っていないのでしょうか。時間の経過とともに、この世のものは白さを保てなくなるのはある程度仕方のないことかもしれません。

「白さ」は物の白さだけでなく、心の白さ、心の清さについても当てはまります。時間の経過とともに、一切妥協しなかったことにも妥協するようになり、正しいものを正しいと認める潔さも失われ、居心地の良さや快適さを心の

白さよりも優先している。こんな状態になっていないでしょうか。

そんなわたしたちに、イエスは道を示します。あなたが白さを保ちたいなら、それもこの世のものではない白さを保ちたいなら、わたしに近づきなさい。自分自身を白く保つためには、血を流して人類を白くするわたしに近づかなければならない。イエスはそう言っているのだと思います。

小さい頃はまじめに教会に行き、朝夕の祈りもよく唱えていたかもしれませんが。その時心は白かったはずです。今その白さを保つためには、努力して、イエスに近づき、触れる必要があるのです。イエスから自分を遠ざける理由はいくらでもあります。イエスに触れなければ、小羊の血で洗ってもらわなければ、わたしたちはこの世のものでない白さを手に入れることができないのです。

「服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」この世のどんなものも、わたしたちをこの世のものではない白さに導くことはできません。イエスに触れ、イエスの血によって白くされることを願い求めましょう。祈ること。ミサにあずかること。聖体を拝領すること。わたしたちがイエスに触れて白くしてもらうことのできる身近な手段です。

四旬節第3主日(ヨハネ 2:13-25)



四旬節第 3 主日 (ヨハネ 2:13-25)

まことの礼拝を危うくする私心運び出す

四旬節第 3 主日はしばしば「サマリアの女」という、いのちの水についてイエスとサマリア人の女性対話する場面が読まれますが、典礼の暦が B 年の今年「神殿から商人を追い出す」場面が朗読されました。与えられた朗読に沿って、学びを得ることにしましょう。

3 月 2 日は個人的に楽しみが待っている日でした。3 月 12 日の誕生日ではありません。この日はプロ野球の公式戦チケットの予約販売が開始される日として、指折り数えて待っておりました。皆さんが「早く暖かくなれないかなあ。春にならないかなあ」と思うのと同じくらい、待ちに待った日でした。

3 月 2 日のその日は午前 10 時から発売開始になっていましたので、初金曜日の病人訪問の途中でしたが、病人訪問もそこそこに、スマートホンでチケット予約窓口を開いたわけです。ところがわたしと同じように予約を入れようとする人が殺到して、予約サイトはパンクしていました。

1 時間待っても 2 時間待っても予約に入れませんで、3 時間後にようやく窓口が開いたのですが、なんとその時点でほぼすべてのチケットが予約完売していたのです。わたしも周囲があきれるほどのカープファンですが、土曜や日曜は観戦に行けないので、どうしてもその他の日程を探す必要があります。

可能性があるのは振替休日の月曜日か、中学生のけいこを「腹が痛い」と嘘を言って金曜日に行くか、どちらかです。振替休日でしかも本拠地開催は 4 月 30 日と 9 月 24 日でしたが、なんと 9 月 24 日も、チケットはありませんでした。わたしの中で、今年のプロ野球観戦ツアーはこれですべて潰れてしまいました。

かつて慶応大学の学生だった時に後楽園球場付近で「お兄ちゃんチケットあるよ。内野指定席 8 千円。どう？」と声をかける人たちがいました。たぶん正規のチケットを 3 倍くらいの値段で売ろうとしていたのを思い出します。

こうなったら、わたしもチケット持たずに本拠地に行って、3 倍に吊り上がったチケットを買って球場に入ろうかと思っているところです。4 月 30 日が取れないのは仕方ないとしても、いくらなんでも 9 月 24 日がチケット販売開始初日の数時間で完売するというのは困るなあと思いました。

福音朗読に入りましょう。神殿では牛や羊や鳩を売っていました。両替屋さんもありました。当時の神殿礼拝でどうして牛や羊や鳩が売っていたのか、両替屋さんがあったのか、今回は話を聞くだけではなく、話して聞かせることができるようになってください。

念を押しておきますが、わたしたちはだれもが「宣教者」になる必要があって、この聖堂は話を聞いて、話して聞かせることができるようになるための「宣教の拠点」なのです。「へえ」と言うだけで、人に話して

聞かせることができるよう持ち帰らなければ「絵に描いた餅」になってしまいます。ここで聞いたことのうち1つでも2つでも、話して聞かせることができるようになってください。

そこで神殿礼拝の話ですが、当時の神殿では、いけにえをささげることが礼拝の中心でした。お金持ちは大きな動物を、一般の人は中型の動物を、貧しい人は小さな動物を持ち込んで祭司に渡し、祭司がそれを屠っていけにえにしていたのです。

礼拝にやって来た人々が立ち会えるのは祭司に動物を渡すところまでです。その動物をいけにえにするのは祭司の務めだったので、簡単に言うと礼拝に来た人々は動物を祭司に渡せば、礼拝は終わり、あとはそれぞれ祈って帰っていたわけです。

動物は自分たちで持ち込むことができました。しかし、いけにえにささげることができるのは傷のない動物でした。いろいろの決まりごとに合格できる動物をだれもが用意できるはずもなく、そこで商売の余地が出てきます。

「いけにえ用に合格した牛はいらんかね～いけにえ認証マークを受けた羊はいらんかね～」。「遠方からですか？うちはお隣よりも安くしますよ。隣の値段を聞いてきてください。それより安くで売りますよ。」現状ではそんな甘い誘いが神殿の中で飛び交っていたのでした。

さらに問題をこじらせていたのは神殿専用のお金でした。神殿は特別な場所だから、いけにえの動物を買うためにはユダヤを支配しているローマの貨幣は使えないと言うのです。そこで日常生活で使っているデナリオン銀貨を、神殿専用の貨幣に交換する必要があります。

「お客さん。うちのレートは隣よりも条件がいいから、うちで両替しませんか？今ならお得だよ。」両替商も神殿に巣くって甘い汁を吸っていました。当然イエスは、礼拝に来る人の弱みに付け込んで動物を売り、両替をする商売人たちを一掃しようとしたのです。ここまでの話は、人に話して聞かせることができるでしょうか。ここからは、どんな学びを得るかです。ですから一人ひとり当てはめて、自分の言葉で言う必要があります。

「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」(2・16) そもそも動物を買い求めて祭司に渡せば、巡礼者が礼拝を果たしたことになるという仕組みそのものを、イエスは神殿から運び出してほしかったのです。この時から、まことの礼拝が始まる。まことの礼拝はイエス・キリストを通して行われるのです。

金曜日に、保育園の主任と一緒に年長さん2人が初聖体の準備をしていました。「日曜日が楽しみですね」とわたしが話しかけたら、「神父さまも日曜日まで元気でいてください」と言われました。イエスさまをいただく子供たちの真心を、受け取ったような感じがしました。神殿で、現代は聖堂で、やり取りされるべきは神さまに対する真心だと思います。

「真心のやり取り。」その最上のもはイエス・キリストです。神さまはわたしたちにイエス・キリストを与えてくださり、わたしたちは御父にイエス・キリストを通して礼拝をささげます。まことの礼拝は「キリストによってキリストとともにキリストのうちに」なのです。キリスト

がおいでになったことで、まことの礼拝が始まりました。
まことの礼拝に妨げとなるものを運び出しましょう。「イエス・キリストを受け、イエス・キリストを通して真心をおささげする」この原則を不確かなものにしてはいけません。イエス・キリストを受けるための心の部屋は、掃き清められているでしょうか。
この世のものがそこら中に散らかっている部屋ではいけないのです。イエス・キリストを通して御父におささげするわたしの心は、曇りのないものでしょうか。だれかに反感を持ったままだったり、だれかに見られたいという余計な思いが満ちていないでしょうか。
今日初聖体を受ける2名の子供たちをわたしたちは見守ります。イエスさまを全身で受け止め、全身で祈りを父なる神におささげする姿は、「このようなものはここから運び出せ」と言われるイエスに素直に従う姿です。わたしたちも生活の組み立て方を教わりながら、歩んでいきたいと思えます。

四旬節第4主日(ヨハネ 3:14-21)



四旬節第4主日 (ヨハネ 3:14-21)

イエスの声を聞く人になろう

今週四旬節第4主日B年は、福音朗読から「声を聞く」ということについて考えてみたいと思います。初めは私がかつてお仕えした川添神父様の遺作となった著書「やぶ椿」を材料にして、後半は与えられた福音朗読から、「声を聞く」努力をしてみましょう。

川添神父様の遺作「やぶ椿」を読みました。一気に読み終えました。俳句を切り口に、カトリック信者の生き方を示してくれた本だと理解しました。ミサのお知らせで「手に取ってみてください」と呼びかけておりますが、なかなか、個人的なお付き合いのあった神父様の本を強く推すことができなかつたのですが、実際に読みましたので、客観的に中身を紹介できます。

川添神父様は上五島の桐教会出身です。私も、上五島に生まれたので、川添神父様が五島の景色を俳句で読んだものは、とても印象深く、自分の生まれ故郷の話として身近に感じることができました。その中で、ふるさと桐を訪ねた時に詠んだ俳句「道消えて家朽ちて島やぶ椿」が心を打ちました。

この句は、本のタイトル「やぶ椿」のもとになった俳句だと思います。見開きのページで右頁にこの句が、左頁に説明文が載せられています。私の故郷の鯛之浦でも、道が消えていく、家が朽ちていくさまを間近に見ていますので、信仰の故郷が限界集落となって信仰の灯が消えていくのではないかと心を痛めているのだらうと感じました。

その中で、島のやぶ椿は、ひっそりと花を咲かせている。繁栄したものでも、消え去っていく日は来るわけですが、変わらずに存在するものがある。その変わらずに存在するお方を、やぶ椿で切り取っているのではないかと思います。私は桐の出身でもないし、桐教会に赴任したこともないですが、あたかも私の故郷の景色を詠んでくれた俳句のように思えて、とても身近に感じました。

さらにもう一つ、私はこの川添神父様に、叙階して最初の五年間、ご指導いただいたのでした。浦上教会に配置されて、右も左も分からない中で、叱られたり諭されたりしながら、すべてを教えていただきました。ですから今でも、川添神父様の声が聞こえるのです。

私には、遺作となった「やぶ椿」を読みながら、神父様の声が聞こえてきました。本を読むとき、声に出して、音に置き換えて読むと思いますが、たいていは自分の声で読んでいるでしょう。しかしある場合、はっきり誰かの声を浮かび上がらせて読むことがあります。今回の「やぶ椿」は、はっきり川添神父様の声で読み終えることができました。

福音朗読に移りましょう。与えられた朗読箇所は、一般的には「イエスとニコデモの対話」として理解されている箇所です。ただ、ここでイエスご自分のことを「独り子」とか「光」とか呼んでいます。こうした呼び方は、当時のイエスが好んで用いていた呼び方ではなく、「ヨハネ福音書が読まれていた時代の信仰共同体」がイエスを指して呼ぶときにこのように呼んでいたのです。

ですから、今日の箇所は、当時のイエスの語りを書き取ったというよりは、「ヨハネ福音書が読まれていた時代の信仰共同体がもっていた信仰理解を、イエスの言葉に託している」と考えるとよいと思います。彼らはイエスの言葉を、「迫害のさなかにある自分たちを強め、励ましてくれている」と理解したでしょう。イエスの生の声を聞いたことはないけれども、各自自分の声でヨハネ福音書を読んでいるのではなく、朗読から生き生きとイエスの声が聞こえていたのではないのでしょうか。

朗読から生き生きとイエスの声が聞こえる。わたしたちも同じ体験をしたいと思います。日曜日のミサで福音朗読を聞くとき、実際には中田神父の声しか聞こえていないかもしれませんが。ですがよくよく耳を澄ますと、いつか私の朗読を通してイエスの声が聞こえるようになると思います。

私は、あえて抑揚をつけないように、淡々と朗読することを心がけています。登場人物が増えてくるといろいろ声を変えたりして読む方法もあると思いますが、かえってそれは、何かの固定観念を与えるのではないかと考えています。司祭は男性ですが、朗読箇所によっては女性が登場することもあります。そこでわざわざ女性の声を作ったりすれば、変な思い込みを与えてしまうのではないのでしょうか。

ある教会で、マタイ福音書の受難朗読の時に男性がピラトの妻の部分を変えて朗読したのです。「一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。『あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。』」（27・19）これをわざわざ女性の声をまねて私が朗読したら、皆さんは想像を膨らませてしまうでしょうし、少なくともスムーズに内容に入り込めないのではないのでしょうか。

ですから、私は朗読はしますが、私の声がイエスの声をかき消してはいけないと思っています。私の声はいつの間にか消えてしまい、イエスの声が聞こえるように、そういう思いで朗読をしているつもりです。その人なりのイエスの声が聞こえるようになれば、朗読はもっと意味のあるものになり、お一人お一人を照らすようになると思います。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（3・16）とあります。四旬節第一日曜日に話しましたが、必要なものを与えてくださるのが神です。世を愛してくださっていることをどんな方法よりも理解できるように、独り子を与えてくださいました。この思いがよく伝わるように、私も朗読を心がけていますし、朗読を聞く皆さんも、御父の思いを語っておられるイエスの言葉が聞こえてほしいなと強く思います。

日曜日の朗読に限らず、ご家庭に聖書と典礼を持ち帰って福音朗読を読んでみてください。朗読した時、あなたの耳と心に、どんな声が聞こえたのでしょうか。やはり、あなたの声しか聞こえないのでしょうか。イエスが私に語りかけている。福音朗読を極めた時、わたしたちは時代を超えてイエスの声を聞く人になるのだと思います。



四旬節第5主日 (ヨハネ 12:20-33)

何かに死ぬことで豊かに実を結ぶ

「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(12・24) 四旬節の最後の日曜日にあたり、イエスがはっきりとご自分の死を意識して語られた言葉に耳を傾けましょう。

使徒ヨハネ田邊徹神父様が亡くなられました。皆さんに大変申し訳なく、お詫びしたいのですが、亡くなられたのは3月5日、鹿児島県の郡山司教様によって葬儀ミサが行われたのは3月8日です。今日ですでに10日も経過しています。じつは私が回覧されてきたFAXを見落とししたのです。月曜日は決まってお休みをいただいているので、まったくFAXで緊急連絡が入ることは頭にありませんでした。一か月以上前から、数週にわたって田邊神父様の容態が悪いのでお祈りしてほしいと信徒の皆さんに願っていたところだったのに、こんなことになって大変申し訳なく、心が痛みます。鹿児島の教区本部にはお詫びの手紙を送りましたが、せめて田平教会のほうでも、鹿児島教区の始まりのころから尽力してくださった神父様のために、ミサをささげ、祈りたいと思っています。

今週の朗読で、イエスは次のように言われます。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」(12・27-28) イエスが「この時のために来たのだ」と言われるのは、「十字架を通して救いの計画を完成される時」のことです。救いの計画が完成されるその時のために、神の計画は人類が罪を犯して救いの状態を失った最初の時から始まっていたのです。

考えてみればわたしたちも、「この時のためにあった」という体験を持っています。私が言うまでもないことですが、お産を間近に控えた女性は、赤ちゃんが産声を上げるその時のために、すべての産みの苦しみをささげるのです。またある人は、だれにも評価されないような地道な研究を積み重ね、ある日人々があっと驚くような、称賛を受けるような成果にたどり着くことがあります。最後にすばらしい結果が待っている人にとっては、「すべてはこの時のためにあったのだ」と、過去を振り返り、神に感謝することができます。

3月17日は中田神父の叙階記念日でした。島本要大司教様から司祭叙階のお恵みを受けました。今年の17日は26年目が始まった日でした。叙階式の時、瞬間的には「これまでの歩みは、この日のためにあったのだ」と思いましたが、司祭生活はここから始まるわけですから、叙階式のその日がゴールではありません。

むしろその日から、イエスが歩んだ「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」これと「わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」この両方を胸に刻んで歩き続けることになります。

司祭が一粒の麦として死ぬとはどういうことかと考えることがあります。25年過ぎてみると、結婚しないということが、司祭にとって一粒の麦として死ぬことかなあと思うようになりました。結婚すると、家族を持ち、子や孫の顔を見ることができたかもしれませぬ。ただ、結婚した夫婦が子や孫の顔を見るといっても、せいぜいそれは十数人、多くても30人くらいではないでしょうか。

司祭は違います。司祭は洗礼を授け、ゆるしの秘跡の恵みを与えます。洗礼は人を神の子として新たに儲けることです。地上での子を儲けませんが、天の国の子を儲けるので、多くの実を結ぶのです。数えたことはありませんが、これまでに百人くらいは洗礼を授けたのではないのでしょうか。

ゆるしの秘跡は、「死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった」（ルカ 15・32）秘跡です。何年もゆるしの秘跡から遠ざかっていた人が、黙想会などで現れることがあります。洗礼の秘跡と同じくらい、もしかしたらそれ以上に、多くの実を結ぶ機会ではないかなあと思います。司祭は一つの生き方である結婚には死にますが、死んだことで、天の国のために多くの実を結ぶのだと思います。

こうした恵みを体験するためには、ある程度の時間が必要です。司祭に叙階されたその日に、百人の洗礼を授けるのは不可能ですし、長らく許しの秘跡から遠ざかっていた人に会うこともできません。長い時間をかけながら、「一粒の麦は、（中略）死ねば、多くの実を結ぶ。」「わたしはまさにこの時のために来た」これら二つのイエスの言葉に出会うことができるのだと思います。

実際に、「私はこの時のために来た」という時があったか？と問われると、はっきり分かりませぬ。病者の塗油を授けて、死の淵から帰ってきた人を見た時にも「私は司祭になってよかった」と思いましたし、余命宣告を受けたカトリックの妻のために、自分がカトリックになり、カトリックの婚姻の秘跡を受けた時にも「司祭になってよかったなあ」と思いました。もちろんここ田平教会の献堂百周年記念に、中田藤吉神父様の縁者として赴任していることにも深い喜びを覚えています。

みなさんは、「一粒の麦として死ぬ」「豊かに実を結ぶ」そう確信できる体験をお持ちでしょうか。何かに死ななければ、何かを極めることはできません。何かを極めた時、「いろんなことに死んだけれども、豊かに実を結んだ。私の選んだ道は素晴らしかった」思うことができるでしょう。イエスが先頭に立って歩まれた道は、私たちにも豊かな実りをもたらしてくれる道なのです。



受難の主日 (マルコ 15:1-39)

イエスを「お前」と呼ぶ人々

受難の主日、聖週間が始まりました。私たちの主が成し遂げられる救いの御業を、最後まで見届け、復活の喜びを迎える大切な一週間としましょう。

黙想会に参加した皆さん、本当にご苦勞様でした。私が依頼することのできる神父様の中で、いちばん真面目に黙想指導してくださる神父様をお願いしました。来年も中濱神父様でお願いしますという人がもしいたら、喜んでカレーを買って頼みにいきます。

本日の朗読箇所は典礼暦B年なので、マルコによる福音書の受難の場面が朗読されました。与えられた朗読箇所を見る限り、イエスに従う人々、イエスに同情する人々は誰一人登場しません。そのことが、イエスが完全に見捨てられたということ強く印象付けます。

また、イエスを呼ぶ人々の呼び方も、だれもイエスに同情を寄せていないのです。その中で、いちばん特徴的なのはピラトがイエスを呼ぶときの「お前」という呼び方ではないでしょうか。「お前」という呼び方は、完全にイエスを見下している呼び方です。

さて、私たちはこの朗読箇所を、どのように見ているのでしょうか。私たちは本日の朗読箇所の、どこに立っているのでしょうか。いくつか示してみますので、自分がどれに当てはまるのか考えてみてください。

まず一つは、自分が本日の朗読箇所で繰り広げられている舞台の目立つ場所に立っているのではないか、ということです。それはつまり、イエスに同情すら向けない人々の一味であり、声を出す機会が与えられれば自分もイエスに「お前」と呼び捨てにする。そういう立ち位置で朗読箇所を見ているのでしょうか。

二つ目は、私たちは全く本日の朗読箇所を取り上げられた舞台に関わりのない人物でしょうか。つまり私が立つ位置はこの朗読箇所のどこにもなく、存在すらしないと考えるのでしょうか。本日の朗読箇所で描かれた舞台と何の関係もなければ、それはそのまま、イエスとも何の関係もないこととなります。

最後のケースは、私たちはイエスに従うつもりがあるけれども、恐怖のあまり体が動かず、遠くに立ってただ眺めているだけなのでしょうか。この場合、積極的にイエスを「お前」とののしることはしませんが、かといって命を懸けることもできない弱さの中で震えながら遠くからただ眺めているだけです。

きっと、私たちの立ち位置は、イエスに従うつもりはあるけれども、何もできないでいる弱くはかない存在で、遠くに立って眺めることしかできない。そんな貧しい人間なのではないのでしょうか。ふだんどんなに威勢が良くても、ふだんどんな人の前に立っても動じないという人でも、四方八方敵だらけの中で渡り歩いている人でも、イエスの最後の場面ではだれもが弱く、ただ遠くから眺めるだけなのです。

いかに弱い人間か。いかに無力なことか。今は私たちは、そのことを認めるために今日このミサに参加しているのです。枝をいただいて、枝を振ればイエスの目に留まるかもしれませんが。けれども枝を振れば、私たちはイエスの仲間であり、イエスとともにはりつけにされるかもしれません。はりつけにはされたくないなので結局枝を振ることなく降ろしてしまふ。そんな弱さみじめさを味わって、今日は帰っていくのです。

「私は『お前』などと言うののしりの言葉は決してイエスさまに言わない。」そう思っているかもしれませんが。けれども私たちは、「お前」とは言わないけれども助けにも行けないのです。その弱さを担って、イエスはわたしたちを救ってくださいます。

聖木曜日から復活徹夜祭までの三日間、できるだけ典礼にあずかり、イエスの救いの御業を十分に学びましょう。助けることのできない私を助けてくださる主に信頼を寄せて、今日はそれぞれの生活に戻りましょう。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる

聖木曜日、主の晩餐を祝います。聖体の秘跡と、聖体を取り扱う司祭職の制定が聖木曜日の中心です。聖体は「与えられたキリスト」の姿を示します。「与えられたキリスト」の姿とはどういうことでしょうか。

「与えられたキリスト」と言いましたが、それは権威を示す姿やゆるしをお与えになる姿ではなく、受け身の姿、司祭の手を通して信者に授けられ、ご自分からは動かない姿です。通常ご聖体は司祭によって授けられますが、聖体拝領の列にだれが連なっているか、司祭は完全には把握できません。

ご聖体のイエスは完全に把握しておられても、司祭が間違っただけならばその人のもとに授けられていきます。そんな姿にまでへりくだってくださいました。見える形では弟子の足を洗う姿によく表れています。

イエスはこう言われました。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」(13・7)。ここにはもはや言葉では説明できない、へりくだりの姿が示されているのです。

「既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。」(13・2) 謙虚さとか、仕える者となるとか、そういう言葉では裏切ろうと考えているイスカリオテのユダの足をイエスが洗う姿は説明できません。

「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」(マタイ 26・14)。ユダはこう言ってイエスを裏切ったのです。イエスは、最もそば近くにいながら、イエスのことに触れながら金をくれと言う人、金を要求する人の足を洗ったのです。謙虚さとか、仕える者とか、そういったありきたりの言葉を超越したへりくだりがここにはあるのです。

ご聖体は弟子たちの足を洗うこのイエスの姿なのです。だれが裏切り者であるかを完全に把握しているのに、司祭が授けるままになり、仮に司祭が間違っただけの人に授けても、拝領した人の中に留まるのです。

「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(ヨハネ 13・15) 司祭職は、互いに足を洗いあうことのようにです。司祭の判断ミスで、ふさわしくない人にご聖体を授けてしまうかもしれません。イエスのそば近くに仕えていながら「幾らくれますか」と言う人にも、足を洗うために膝をかがめました。司祭も、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように」この模範に従うように招かれたのだとあらためて考えました。

裏切る人に膝をかがめるのはどんなに悔しいことでしょうか。どんなにみじめなことでしょうか。それら人間的な感情を超越して、イエスはへりくだったのです。ご聖体を取り扱う司祭職に招かれた司祭は、生涯、主の晩餐で示された模範を刻みつつ、悩みつつ生きていきます。



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

私たちもイエスを「あの人」「あの男」と呼んだ

聖金曜日、主の受難を記念しています。マルコ福音書を解説した書物の中に、「思い起こし、物語れ」という本がありまして、上下二巻の書物で、合計一千頁ほどあります。「主の受難を記念する」という言い方に前から私は抵抗がありましたが、この本のタイトルのように、「思い起こし、物語る」ことが記念することの本質なのだと思います。

さて、聖週間の連続した説教の中で、私が取り上げているテーマは「イエスをどのように呼ぶか」ということです。受難の主日、ピラトはイエスを「お前」と呼びました。聖木曜日、イエスを裏切ろうと決意したユダの引き金となった言葉として、「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」という言葉を引用して、ユダがイエスを「あの男」と呼んだことに触れました。

今日、十字架の上でいのちをささげるイエスをペトロは「知らない」と言います。問い詰める人々が「あの人」と呼んだり「あの男」と呼んだりしてイエスの仲間だと追い詰める中で、直接は書かれていませんが、「あの人のことなど知らない」「あの男のことは知らない」と否定するのです。

イエスは孤立しています。イエスから遠い人が「お前」と呼ぶのは仕方がなくても、最も近い場所にいる弟子たちがイエスを「あの人」「あの男」と言い放っているのです。イエスを「先生」とか「主」とか呼ばなければならない人々がその呼び方でイエスから心が遠く離れてしまっていることがわかります。

こんな人のために十字架にかかる必要があるでしょうか。すべての人をご自分のもとに引き寄せるためでした。私たちが犯した大なり小なりの罪を、認めるためです。イエスから遠く離れている人のためにも、イエスのそば近くにいて心苦しくもイエスを知らないと言ってしまった人のためにも、すべての人をご自分のもとに引き寄せるために、イエスは十字架の上でいのちをささげるのです。

私たちは残念ながらイエスを「あの人」「あの男」と呼んだ者たちの仲間です。イエスの弟子が「あの男」と呼んだのでした。私たちも洗礼堅信を受けて、イエスの弟子となっています。「あの男」と呼び捨てた覚えはなくとも、ふだんの生活で誰かにイエスのことを「主」とか「イエス様」とかなかなか呼べない弱い存在です。

私たちはいつになったらふさわしい言葉でイエスを呼ぶことができるのでしょうか。それはイエスの復活を待つしかありません。復活したイエスが私たちに勇気づけ、ふさわしい呼び方をわたしの唇に授けてくださいます。復活のその時を待って、今日は静かに十字架を礼拝しましょう。



復活徹夜祭 (マルコ 16:1-7)

あの方は復活なさって、ここにはおられない

主の復活おめでとうございます。今年の聖週間を、イエスの名前をどのように呼ぶかという切り口で考えてきました。今日、その答えが与えられました。私たちは復活の主を、「あの方」とお呼びします。

与えられた朗読の中で、白い長い衣を着た若者は、イエスについて二通りの呼び方を示しました。「十字架につけられたナザレのイエス」と、「あの方」という呼び名です。「十字架につけられたナザレのイエス」とは、イエスに油を塗りに来た婦人たちが理解していたお姿です。

イエスが裁判を受け、お亡くなりになるまで、イエスの呼び方はひどいものでした。「お前」とか「あの男」「あの人」こんな呼び方をたしなめる人も、堂々と反論する人もいなかったのです。最後の晩餐で「主よ」と呼びかけたペトロさえも、イエスの死に際して「そんな人は知らない」かわりを否定しました。人間は命のかかった場面では弱くみじめで、ただじっと、遠くから様子を見守るだけなのです。

勇気ある婦人たちも、墓に向いたとき「十字架につけられたナザレのイエス」としか呼び名を持ち合わせていませんでした。そこへ、新しい呼び方が示されたのです。それは「あの方」という呼び方でした。

「あの方」「あのお方」こうした呼び方は、明らかに敬意をこめた呼び方です。それは、一緒におられた間も、お亡くなりになっても、イエスが変わらず尊い姿であることを思い出させました。さらに加えて、神の使いであるこの若者は「あの方は復活なさって、ここにはおられない」と付け加えたのです。墓に眠る人を呼ぶ呼び名はイエスにふさわしくないと知らせたのです。

神の使いは決定的な変化を付け加えます。イエスの呼び方を「十字架につけられたナザレのイエス」から「あの方」に変えてくださっただけでなく、復活して、さらに栄光が増し加えられたと教えてくれたのです。「あの方」と呼んで過去を振り返るだけでなく、「あの方は今生きておられる」と教えてくださったのです。

復活の出来事は、まず墓に向いた婦人たちに、イエスは「十字架につけられたナザレのイエス」のままでは終わったのではない。人前で話すのとはばかれる呼び方で終わったのではなく、今生きて、「あの方」「あのお方」と呼びかけることができると気づかせたのです。

神の使いは婦人たちに使命を与えました。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる」(16・7)。まだ弟子たちにとって、イエスの呼び名は人前でうっかり語れない呼び方しか持っていません。その弟子たちに、婦人たちが伝えるのです。「イエスは、名前を呼ぶのとはばかれる姿ではなく、復活して、『あの方』と呼ぶことができるのです」と。

弟子たちには、イエスのことを語り合う勇気はまだ育っていませんでした。言葉と行いによって神の国の到来を告げたのに、最後は宗教指

導者たちと彼らに動かされた人々によって死に追いやられた人。弟子たちの中ではイエスについて語ることはそこまででした。

けれども婦人たちの報告ですっかり変わります。うかつに名前など呼べない。ましてやイエスのご生涯について語れない。そんな恐怖にとらわれていた弟子たちは一つの呼び方を示されて変わるのです。イエスを「あの方」と呼んで、イエスについて人々に語ることはできる。イエスは生きておられ、ガリラヤで会うことができるのです。

私たちの間でも、呼び方が一つ変わるだけで、人と人とのかかわりは大きく変わるものです。結婚している夫婦が、「おいお前」と相手と呼んでいる間は、配偶者は言うことは聞くかもしれませんが、心の底から相手を尊敬することにはならないでしょう。その配偶者は外に出れば、「あの人は」とか「あいつは」とか言っているかもしれません。

呼び方が変わることで、お互いの尊敬や信頼も深まります。私は配偶者がいないのでどう呼ぶのが適当か分かりませんが、花子さんとか何とか、配偶者の名前をいくつになっても呼ぶなら、もっと互いが寄り添う関係であり続けるのではないのでしょうか。

復活した主は、ご自身を呼ぶために「あの方」という呼び方を婦人たちと弟子たちにお示しになりました。つまり、尊敬の念をもって、自信に満ちて呼ぶことができる呼び名を授けてくださったのです。私たちはどうでしょうか。生活の中で、イエス・キリストという名前が、呼ぶのもはばかりるのであれば、復活した主は私の中で生きているとは言えません。

むしろ、堂々と「あの方は生きておられる。あのお方はわたしの生活を喜びと希望で満たしておられる」このように言える信者となりましょう。私たちが、イエスを「あの方」と呼んで人々に示すとき、復活した主は確かに今私たちを導いておられるのです。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）



復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかった

あらためて主の復活おめでとうございます。復活徹夜祭と復活の主日日中のミサは、同じ復活の主日と思われがちですが、朗読される福音が違うということ一つを取り上げても、私は違うミサだと思っています。つまり、別々にあずかってほしいミサだということです。

ある人は、「復活徹夜祭にあずかったから、明けて復活の主日日中のミサは行かなくてもよい」と考えているかもしれません。先週のミサでしたら、繰り上げミサと当日のミサは朗読が全く同じなのですから、それは当日あずかれない人が繰り上げミサで務めを果たすというのはもったいなことです。

ですがこの復活を祝う両方のミサは、選ばれた聖書朗読が違いますから、同じミサとは言えないと思うのです。もし「両方とも同じだからどちらかあずかればよい」と考えていた人がいらっしゃれば、来年からは改めましょう。同じことは「主の降誕」にも当てはまります。

さてこの日の日中のミサは、少し切り口を変えて考えてみましょう。マグダラのマリアがからの墓に驚き、弟子たちに自分たちが見たことを告げました。ペトロともう一人の弟子が墓に向かいます。この二人について最後にこう書かれています。

「シモン・ペトロも着いた。（中略）それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」（20・6-9）

もしかしたら、シモン・ペトロ一人では、イエスの復活に思い至らなかったかもしれません。また、もう一人の弟子、おそらくヨハネのことだと思いますが、かれもまた、一人ではイエスの復活を信じることはできなかったかもしれません。つまり、彼らは二人で出来事を思い巡らしているうちに、聖書の言葉「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」ということを理解したのではないのでしょうか。

今年、聖週間の一連の説教を「イエスをどのように呼ぶか」ということで考えてみたのですが、受難の主日を迎えた直後には、まだ今日の復活の主日までのつながりについて道筋は見えていませんでした。ところが月曜日と火曜日、どのように聖週間全体の説教をまとめるかを人に話してみたら、はっきりと道筋が見えたのです。一人で考えているときには見えそうで見えなかった道筋でしたが、だれかと分かち合った時に、道筋がはっきり見えたのでした。

これは、シモン・ペトロともう一人の弟子が空の墓で体験したことに重なると思います。イエスが復活し、暗く沈んでいた弟子たちの心に光を届けてくれました。そのとき一人で救われたのではなく、複数の人が助けを求めて一緒に思い巡らしているときに、救いの光が差してきたのです。

私たちにとってもそれは同じことではないでしょうか。人は一人で救われるのではないのです。かつてイエスが言われたように、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ 18・20）複数の人がイエスについて学びあったり語り合ったりするところに、求めるものが与えられるのだと思います。

そこで一つの呼びかけをして説教を結びたいと思います。復活の喜びは、一人で心に持ち続けるのではなく、二人三人で、分かち合うべきだということです。複数の人が集まると言っても、皆がイエス・キリストへの信仰を持っている必要はありません。だれかと一緒にイエス・キリストの復活を語り合うとき、そこに復活の主がおいでになり、喜びと希望を与えてくださる、復活した主を理解する恵みを与えられるということです。

わたしたちは四六時中同じ信仰を持つ仲間と時を過ごしているわけではありません。むしろ、違う信仰の人と、あるいは信仰すら持たない人と席を共にしていることのほうが多いと思います。家庭の中にあっても、自分一人カトリック以外の宗教の家に嫁いでいることも考えられます。だれともイエス・キリストのことを語り合っただけでこなかったかもしれません。

そうではなく、だれかと復活したイエスのことを分かち合うとき、あなたに復活した主への理解が授けられるのです。私一人がイエスを信じている場所でも構いません。自分の持っている信仰を分け合うとき、それまで以上の理解を、分かち合ったことで授けられると思います。いつかそのことが、そばにいる人にイエス・キリストを知る機会を与えてくれて、身近な福音宣教に結びついていきます。

まっすぐにイエスについて行ったシモン・ペトロと、イエスの愛する弟子だったヨハネ、この二人であっても一人だけではイエスの復活を十分理解できなかつたのです。考えてみれば、イエスの復活は複数の人がある場所で示されています。墓に最初に言った婦人たち、家に閉じこもっていた弟子たち、エマオに向かう弟子たちなどです。私たちは孤独のうちに復活を読み解くのではないのです。

そこでもう一肌脱いでもらう必要があります。残念ながらこの社会には、孤独に生きる人、一人きりで復活の主日に家庭で祈っている人、そういう人がいるはずで、ぜひ訪ねて行って、二人または三人で主の復活を迎えられるようにしてほしいと思います。共に主の復活を祝うとき、私たちの喜びは何倍も深まるのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

私たちは見ないのに信じることができる民

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」(20・29) 神のいつくしみの主日にあたり、このみことばを味わってみたいと思います。「見ないのに信じる」という姿には、二つのことを汲み取れると思います。

一つは、「見ないのに信じる」このために何が必要なのか、ということ。それは「聞くこと」だと思います。多くの出来事は、見ることができるのはごくわずかでも、大勢の人が聞くことができる場合が多いのではないのでしょうか。

私は今現在、初金曜日と翌日の土曜日とで25人の病人訪問をしていますが、このほとんどが、ミサにあずかりたくてもあずかることができません。1人か、2人は、家族の協力があって、年に数回ミサにあずかるくらいで、毎週参加することはまず不可能です。

それでも、聖体を司祭が運び、聖体拝領の準備の祈りを唱えて、「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」という言葉を聞いて、信仰告白をして聖体を拝領します。目の前でさえもミサの様子を見ることはできませんが、ミサの主要な部分を耳で聞くことで、いのちの糧にあずかっているのです。

病人訪問をしているある人たちに、ミサの説教を2か月とか3か月に1回まとめたものを届けています。ミサの説教は、私の顔を見なくても声さえ聞くことができれば意味がありますから、「見ないのに信じる」またとない材料になっています。何回も何回も聞いてくださっている人もいます。

皆さんは教会に来て、1回聞いて、反芻することもなく、それっきりかもしれません。けれども病気でミサに来ることのできない人が、「見ないのにイエス・キリストを信じる」そのために説教を繰り返し聞いてくれています。

もう一つ、「見ないのに信じる」について考えるためには、「まだ見ぬ未来」について考えてみてはいかがでしょうか。たとえば、「神の国の完成を待ち望みながら、主の祈りを唱えましょう」という招き方があります。「神の国の完成」はまさに、「まだ見ぬ世界」です。けれども私たちは、「見えないものを見ているかのように」主の祈りを唱えているのです。あたかも、すでに実現しているかのように、主の祈りを唱えるのです。

同じように、今見ていないけれども、あたかも見ているかのように信じている人は、すでに幸いを得ている人です。これはわたしたちにぴったり当てはまっています。今のわたしたちが、「見ないのに信じる人は、幸いである」この生き方を歩んでいるのです。

わたしたちは何を見ないのに信じているのでしょうか。5月13日を、私たちは「見ないのに信じる」神の民なのです。5月13日になって、神

がこの教会を百年守ってくださって、私たちも一役になったことを、見たから信じるのでしょうか。そうではありません。「見ないのに信じる」のです。この日に向けて委員会の中に加わった人はその中で、毎日の祈りで献堂百周年の祈りを唱えた人は祈りの中で、その日を見ないのに、その日の喜びと感謝をすでに信じてきたのです。

献堂百周年が、目の前まで来ました。一人か二人は、百年前に生きていたかもしれません。献堂された日をわたしたちは見ないで信じています。今こそ、献堂されてから百年のその日を、「わたしたちは見ないのに信じる者たちである」と、人々の前に証しましょう。信じること、信じたことが報われることを、約束してくださる復活のイエスが、私たちの後ろ盾です。

復活節第3主日(ルカ 24:35-48)



復活節第3主日 (ルカ 24:35-48)

聖書はイエスの復活を信じる鍵

復活節第3主日、長崎教区ではしばしばこの日が転勤した主任司祭叙任司祭の新しい任地での最初の日曜日です。私もこの復活節第3主日に最初の日曜日の説教をしました。3種類の薬を飲んでいるという話でした。初心を忘れず、また献堂百周年に向かって心を一つにしていけるように、朗読箇所を解き明かしていきたいと思います。

金曜日に、新しい中学生たちと最初のけいこをしました。小学6年生だった子供たちが、中学1年生として教室に来ていました。緊張した顔を見ながら、この子供たちの心をイエスの教えにどうやって開いてあげればよいか、考えました。

金曜日は宗教が持つ3つの特徴を話しました。キリスト教も、イスラム教も、仏教も、宗教には3つの特徴があります。1つ目はその宗教を始めた人がいます。2つ目は宗教を始めた人の教えやわざがあります。3つ目は宗教が大切にしている書物があります。この3つをわたしたちのキリスト教の中で考えてみました。

キリスト教を始めた人がいます。もちろんイエス・キリストです。もちろん単なる「人」ではありませんが、ユダヤ教の中で生まれたイエスがキリスト教を開いたわけです。次にイエスの教えがあります。「わたしは道であり、真理であり、命である」「隣人を、自分のように愛しなさい」

金曜日は6人けいこに来ていたので、教えの中から友達が言わなかったものを思い出してもらって、教えを6つ子供たちの引き出しから取り出しました。3つめの大切にしている書物は聖書です。聖書を大切にしていることはすんなり答えることができました。

問題は、キリスト教を始めた人は誰ですか、キリスト教を始めた人はどんなことを教えましたか、この2つで子供たちが答えに詰まったことです。緊張のために、難しく考えすぎていたのです。キリスト教を始めたのは誰ですかと初めて中学校のけいこに来た中学1年生に聞くと、顔がこわばっていました。

「難しく考えすぎ。」そう言っても、間違っではいけないと自分で自分を追い詰めてしまって、声が出なかったのです。

中学2年生はその点落ち着いて答えてくれました。中田神父との信頼関係もあったでしょう。イエスの教えを引き出すときは、心を開いてもらうために、あの手この手を使いました。「隣人を自分のように○しなさい」「わたしは道であり、真理であり、○である」20年前は考えられなかったようなことまでしてヒントを出して、心を開いてけいこに臨んでくれるように努力したわけです。

本日の福音朗読でも、復活したイエスの出現を弟子たちが信じられず、イエスはあの手この手で弟子たちの心を開こうと努力しています。まずエマオの弟子たちの報告を聞いても、不思議に思うばかりで信じら

れませんでした。

弟子たちの真ん中に復活したイエスが現れても、「亡霊を見ているのだと思った」（24・37）とあります。さらに「わたしの手や足を見なさい」と言ってご自身の手や足を指し示しても、喜びのあまりとはいえ信じられず、不思議がっているのです。さらにイエスは、食べ物を食べました。復活したイエスを信じられない弟子たちの心を開こうと、あの手この手で涙ぐましい努力です。

では弟子たちが最終的にイエスを信じるようになったのは、どの時点だったのでしょうか。姿を現したときでしょうか。手や足を見せたときでしょうか。焼いた魚を食べたときでしょうか。どれも違うようです。むしろ、最後に用意しておられた「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて（24・45）言われた」ここでようやく、イエスの復活が信じられるようになったのです。

中学1年生の子供が中田神父からけいこを受け始めました。私があの手この手で話す、その工夫は必要かもしれませんが、子供たちの心を最後に開くのはわたしの工夫なのだろうかと思います。イエスの教えを子供たちが心を開いて受け入れるためには、聖霊の働きが、聖霊に導かれて書かれた聖書の働きが、最後は必要なのだと思います。

弟子たちもそうでした。復活したイエスが目の前に現れても、亡霊ではないかと思い、手や足を示してもまだ信じられず、食べ物を食べる姿を見せても不思議に思っていました。復活したイエスを最後に信じさせる決め手になったのは、聖書だったのです。

弟子たちの体験は、わたしたちを象徴する体験だったと言えるでしょう。弟子たちにとって、イエスの復活を心から信じさせるためには、何重にも囲まれた扉を壊し、心を開いてもらう必要があります、その最後の扉を開くのは聖書だったのです。イエスを十字架に追いやってしまった罪とか、引き渡されないように戦うべきだったのを逃げてしまった後悔とか、そういう壁の向こうに、復活したイエスを信じる最後の扉を開く鍵「聖書」が、必要なのです。

わたしたちも、復活したイエスを信じるため、心のいちばん奥の扉を開くのは聖書であると悟りましょう。だれか圧倒的な説教をしてくれる司祭が最後の扉を開くものではありません。司祭はいずれ変わるのです。いずれこの世を去るのです。配偶者が最後の扉を開くのでしょうか。配偶者も永遠にそばにいてくれるわけではありません。

聖書だけが、イエスを信じる扉を最後に開いてくれる鍵で、聖書に親しむならば、聖書は永遠に私を離れることはないのです。現代は目が不自由でも録音を通して聞くことができます。点字もあります。私たちはいずれかの方法で、聖書をそばに置いて親しむべきです。復活したイエスを信じる決定的な鍵だからです。

主イエスよ、聖書を開いてわたしたちに話し、心を燃やしてください。



復活節第4主日 (ヨハネ 10:11-18)

私たちキリスト者は命を置いて生きる者

復活節第4主日、与えられた福音朗読でイエスは何度も「命を捨てる」という言葉を繰り返します。その中でも特に目を引くのは「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」(10・18)この言葉です。イエスのこの言葉が当てはまるのはどんな場合なのかを考えてみましょう。同じく私たちも、どんな場合なら「命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」のか考えてみましょう。

昨年12月に韓国で親子旅行をして以来、親の顔も見に行っていないのは親不孝だと考え、日曜日の女性の会総会を終えてから新上五島町鯛之浦の実家に帰ろうと思います。「実家に帰らせていただきます。」田平教会の献堂百周年に事情で母親は参加できないようなので、これまでの取り組みとか、当日計画していることとか、記念誌のこと、施設整備のことなどを話してこようと思います。

さて福音朗読、イエスが言われる「命を捨てる」という言い方ですが、日本語訳では「命を捨てる」となっていますが、もとのギリシャ語に近い言い方をすると「命を置く」と訳したほうが良いようです。ただ、日本語で「命を置く」というと、「財布をテーブルに置く」くらいの意味合いに受け取られかねないので、イエスの意図していることを汲んで「命を捨てる」と訳しました。

「命を置く」でも、十分説明すればなぜこの言葉が使われているかは分かります。だれも命を捨ててはいけないわけで、イエスもそれはよく分かっていました。命を、完全に守ることのできる方に託す。そんな意味で、イエスは「命を置く」と言われたのです。

羊飼いであるイエスにとって、委ねられた羊を命がけで守ることは当然の務めでした。自分の命惜しさに、羊を置き去りにして逃げることは到底考えられませんでした。けれども、命は捨てるべきものではありません。そこでイエスは、父である神に命を置くことを考えたわけです。完全に命を守ることのできるお方に託して、復活によって命を取り戻すことができることをご存じだったのでした。

御父への信頼のもとで、イエスが命を置くこと。この場合「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」というイエスの言葉は説明がつきます。イエスはわたしたちの救いのために、御父への信頼のもと、命を置いてくださったのです。

イエスが命を置いてくださったこと、イエスが命を捨ててくださったことは、イエスご自身のわざに終わらず、私たちの模範でもありました。私たちもイエスのわざを模範として、命を置く必要があるし、命を置くことができるのです。

ただし、条件は変わりません。命は捨ててはいけないのです。完全に命を守ることのできる方に、命を置くのでなければなりません。そのような場面がわたしたちの日常生活にあるのでしょうか。

一つだけ、条件に当てはまる場面があります。それはこのミサ、私たちが礼拝するご聖体のイエスに命を置くのであれば、イエスはわたしたちの命完全に守ることのできるお方ですから、「命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」と言えると思います。

では私たちが命を捨てるとしたら、どのように実行するのでしょうか。それは、私たちがミサにあずかって聖体を拝領し、次にミサにあずかる時まで、この祭壇に命を置くことで実行できます。ミサを終えると社会のそれぞれの場所に実を置くことになります。一人ひとりが、社会の荒波にもまれ、ある時は傷つくかもしれません。けれども私たちは命をこの祭壇に置いていったので、次にミサに来ることで、いつでも命を受けることができます。

このようにして、私たちの命を完全に守ることのできる方に命を置いて生きるならば、私たちは安全です。どのような困難に遭遇しても、仮にこの世の命を落とすことになっても、私たちはまことのいのちを神に置いて生きているので、その神がわたしたちに命を返してくださるのです。今日、一人のお子さんが洗礼を受けます。洗礼はもともとは、洗礼を希望する人が洗礼を授ける人から水に沈められて引き上げられる形で行われていました。それは、生まれ持ったの罪の傾きに死んで、神が与えてくださる命に新たに生きるためでした。今ここで、私たちキリスト者は神に命を置いて生きる者であると聞きました。今日の洗礼式を通して、あらためて聖パウロがローマの信徒への手紙で呼びかけているように、「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(14・7-8)このような生き方でありたいと思います。

この子は洗礼を受け、神の子となり、教会の一員となります。ご両親はお子さんが成長する中で、「わたしたちは自分で自分の命を守って生きているのではなくて、イエス・キリストに自分の命を委ねて生きているのよ」と教えてくだされば幸いです。

それでは洗礼式に移りましょう。



復活節第5主日 (ヨハネ 15:1-8)

わたしにつながっていないさい

「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」(15・5) この言葉は田平教会献堂百周年をいよいよ迎えるわたしたちに、終盤の準備の仕方を教えてくれています。イエスが教えてくださる準備の仕方を学び、教会献堂百周年の豊かな実りを期待しましょう。

私たちはここまで、一人ひとりの祈りと犠牲の積み重ねで、いよいよ教会献堂百年を迎えようとしています。ゴールは目の前で、きっと成功すると思っています。ただ、見た目の成功に一喜一憂するのではなく、イエス・キリストの物差しに照らして、実りある日を迎えるかが問題です。イエスは、「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」と言われています。私たちがイエスを通じて御父につながり、一つの神秘体として奉仕するとき、イエスの物差しにかなった実りを得るのです。けっして、見た目の華やかさに惑わされず、イエスの言葉に動かされて一人ひとり役割を果たし、喜びのその日を迎えたいのです。

最近はまだすでに、「田平教会献堂百周年の祈り」も板についてきたことでしょうか。しかしそこに落とし穴がある。スラスラ言えるようになると、隣の人を唱えている声は気にもかけなくなるかもしれませんね。慣れっこになった人が、隣の人を祈りのペースが遅く感じ、イライラを募らせて唱えているかもしれません。

もしそうであれば、その人の祈りは、キリストにつながっていると言えるでしょうか。キリストを通して御父につながっていると言えるでしょうか。むしろ、耳を澄まして、隣の人とも声を合わせて、祈りを唱えるべきでしょうか。

ラテン語のミサ曲を含め、歌の練習をしています。「どうせ言葉がわからない」とか、「私は歌が歌えない」とか、自分を押しえつけるような言葉で縛ってしまっていて、練習をおっくうに思っていないでしょうか。大きな声で、奉仕のつもりで練習に参加してくださるなら、私たちの歌声は、キリストにつながって実りをもたらすと思います。

こうしたことは、目には見えません。目に見えないけれども、「心を一つにして祈っているか、歌っているか」は、聞こえてくる祈りでわかるのではないのでしょうか。当日、ミサを司式してくださる大司教様が、「今日の典礼は皆さんの心が一つになっていてよかった」と喜んでくださる一日にしたいと思います。

私たちがキリストを通して御父につながり、豊かに実を結ぶためにすぐにはできません。それは一つの食卓から食べるということです。ぶどうが実るのは一つの木につながっているからだと思いますが、私たちが一つの食卓から食べるならば、一つの心、一つの思いになれるのではないのでしょうか。

言うまでもなく、「一つの食卓」とは、ミサのことです。みことばと聖体をいただくことです。みことばの食卓から、また聖体祭儀が行われる食卓から、皆が一つのパンをいただくなら、私たちの働きは一つの心、一つの思いになるのではないのでしょうか。

「豊かに実を結ぶ」その日はもう目の前です。今までの歩みをさらに実り豊かなものとするために、キリストを通して、父なる神につながりましょう。私たちは見た目の実り以上に、キリストの物差しにかなった実りを神にささげる民なのです。

復活節第6主日(ヨハネ 15:9-17)

復活節第6主日 (ヨハネ 15:9-17)

僕は主人が何をしているか知らない



復活節第6主日B年に選ばれた福音朗読は、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(15・13)が際立っています。私たちが大きな愛を感じる方について考えてみましょう。

献堂百周年一週間前となりました。私は記念ミサの終わりに予定されている感謝式の挨拶を原稿にまとめようとしています。大司教様への感謝の言葉は、ずいぶん前から温めてきました。挨拶を文字に起こそうとする段になって、「主任司祭は大司教様の思いにあまり応えられていないのではないか」そういう気持ちになってきたのです。

私たちは一般的には、「大司教様の考えを私たちが察してあげることなどできるはずがない」と考えていると思います。「親の心子知らず」それが当たり前だというわけです。ですが、私はもっと大司教様の田平教会にかける思いを、知るべきだと思うのです。

たとえば、「田平教会献堂百周年の祈り」は、私が試しに作ったものを大司教様に届けて目を通してもらい、手直しを受けて出来上がった祈りです。この祈りを唱えているのは田平教会の皆さんですが、ここに込められた思いは、最終的には大司教様の思いです。

その証拠に、祈りの終わりごろに出てくる「宣教の拠点となるよう努力します」この一行は私が用意したもとの祈りには全く触れられていませんでした。皆さんが「宣教の拠点となるよう努力します」と唱えるということは、それはすなわち「私たちは大司教様の思いに応えるよう努力します」と公言しているのと同じなのです。

大司教様は来週の献堂百周年のために、すべての予定をキャンセルして、田平教会のためだけに時間を取ってくださいました。百周年を記念するミサ、記念碑の除幕式、祝賀会、すべてに大きな期待をもっておいでになるはずですが、ただ単に記念ミサの司式をなさるのではなく、この日までどんな準備をしてきたかを、この日のミサで確かめたいわけです。先ほどの祈りの一節「宣教の拠点となるよう努力します」を唱える私たちを眺めながら、どのようにしてこの聖堂を宣教の拠点としようとしているのか、計りたいわけです。

本日の福音に、「僕は主人が何をしているか知らない」(15・15)とあります。もし私たちが、大司教様にとって僕にすぎないならば、大司教様がこの日をどれだけ楽しみにしておいでになるのか知らなくても構わないでしょう。「宣教の拠点となるよう努力します」と唱えながら上の空、他人事のように思っているのも何も責任を問われないでしょう。

ですが、私たちは大司教様にとって「僕」なのではないでしょうか。「友」なのではないのでしょうか。「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。(中略)わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」(15・15)この教会を、祈りと賛美がこだまする家、宣教の拠点となるよう努力してほしい。大司教

様の思いを私たちは知っているのです。ですからすでに私たちは、「友」と呼べる身分にさせていただいたのです。

ここで時々取り上げている聖書ギリシャ語の日本語訳の問題ですが、「友のために自分の命を捨てる」この部分は、「友のために自分の命を置く」と日本語にするのが元の言葉により近い翻訳です。大司教様は、私たち田平教会神の民を友と認めてくださって、百周年記念行事の一切を任せてくださったのです。

ご自身の思い通りの記念行事を行いたいならば、わざわざ主任司祭に任せなくとも、ご自身がすべて取り仕切って、当日おいでになれば済むことです。しかし大司教様は、私たちを友とお考えになり、すべてを私たちにゆだねたのです。大司教様がすべてを委ねたのですから、命を委ねたのと同じではないでしょうか。

ですから私たちは、大司教様の思いを知らない人であってははいけません。大司教様はどんな思いで、ミサの聖歌を聞いておられるだろうか。どんな思いで、献堂百周年の祈りを聞いてくださっただろうか。私たちは仮に「どんな思いで聖歌を歌いましたか?」「どんな思いで献堂百周年の祈りを唱えましたか?」と聞かれたら、「私たちは大司教様の思いを知らない僕です」と答えてはいけません。

私も、主任司祭挨拶を書き始めて、「私は何と親不孝であったらうか」と思い始めています。大司教様の思いを汲もうともせず、これまで25年過ごしてきたのではないだろうか。いくつかの教会の主任司祭を歴任してきて、それぞれの教会に大司教様がどんな思いを込めておられたか、爪の先ほども考えたことがあったらうか。自問自答して、暗澹（あんたん）たる思いなのです。

もちろん大司教様の心の中は誰にも推し量れません。大司教様の耳には、私たちでは知ることもしないいろいろな情報が届いていることでしょう。社会的な言い方をすれば、公表できない事情もある中で、常に全ての決断を下しているのだと思います。そこは知る由もありません。

それでも、大司教様の期待にいくらかでも応えるために、一つの選択をしなければなりません。それは、今週の福音朗読に繰り返されている「互いに愛し合いなさい」この生き方を選ぶということです。互いに愛し合う方向にかじを切るなら、友としてお認めくださった大司教様の恩に報いることができるのではないのでしょうか。

行事の一切を委ねてくださった大司教様から、「僕ではなく友として」迎えていただく日はもう目の前です。「大司教様は私たちに何を願っておられるだろうか」そんな問いを一つ自分に持って、この一週間で過ごしましょう。大司教様が皆さん一人ひとりにかけての期待に答えを出すのは、皆さん一人ひとりです。



主の昇天 (マルコ 16:15-20)

私たちは聖堂を宣教の拠点にする

主の昇天の祝日です。弟子たちの行動を取り上げながら、私たちも何かを学び取ることにいたしましょう。

イエス様が天に昇られたときの様子を、私たちは二つの朗読から聞きました。第一朗読の「使徒たちの宣教」と、「マルコ福音書」です。これら二つの朗読では、弟子たちの様子は明らかに違っています。

第一朗読では、白い服を着た二人の人が、弟子たちに次のように言っています。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(使 1・11)。福音朗読では、「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した」(マルコ 16・20)となっています。かたや、天を見上げてぼんやりと立っている弟子たち、かたや早速宣教に出かけて行った弟子たち。いったいこの違いはどこから出てくるのでしょうか。

私は、それぞれの書物を書いた著者の気持ちが、このような違いになっていると考えます。「使徒言行録」を書き残したルカも、福音記者マルコも、12人の弟子のメンバーではありませんでした。彼らは直接の弟子ではなくて、使徒たちのそのまた弟子だったのです。

そうすると、イエス様が天に昇られたときの様子は、どのように話を聞かされたかですぐいぶん違ってくることなのでしょう。おそらく、二人とも忠実に聞いたのですが、ルカはそれをじかに書き記し、マルコは聞いたことを踏まえて、手を加えたのだと思います。事実上、使徒言行録にあるように、ぼんやりと天を見上げていただろうということです。

ではなぜ、マルコ福音記者は、弟子たちがさっそうと宣教に出かけたかのように書いたのでしょうか。それは、この福音書が、新しく信仰の道に入った人を教育するために書かれていたからです。マルコは、新しく信者になった人たちに、あなたたちも同じようにしなさいと勧めるために、「早速宣教に出かけて行った」という形にまとめたのです。

もちろん、使徒言行録にあるように、ぼんやりと眺めていたことは推測できます。たとえば、愛する配偶者を失ったときや、両親を失った子供たちが、「さあ亡くなった人を惜しんでも帰ってこないから、私たちは次にどうしたらよいか考えましょう」と、すぐに次の行動に移れないのと同じです。最終的にはそうするのですが、それにはある程度の時間が必要なのです。マルコは、そのことを踏まえて、出かけて宣教したと書いたと思われます。

このような事情を考えて、弟子たちの姿から何かを学ぶことにしましょう。イエス様はご計画の通り、ご自分が元いたところへ帰って行かれました。それは弟子たちと別れるためではなくて、弟子たちが自分の足で歩いて行って、イエス様のみわざを続けていくためです。三年間見守ってきたのだから、あとは私に信頼をおいて宣教に行きなさいと、堂

々と弟子たちを送り出してくださったのです。

もし弟子たちが、三年間の教育と、あとでお遣わしになる聖霊の働きで十分に満たされないとしたら、イエスはまだしばらく残ってくださったことでしょうか。もう弟子たちは、自分で出かけて行くことができると、イエスが判断してくださったので、天の父のもとへ戻られたのです。

私たちはどうでしょうか。学校教育を終え、社会に飛び込み、結婚生活の一步を踏み出し、教会でもそれぞれの役を持ったりします。「さあ、あなたの出番だよ」と言われているのに、ぼかんとしていることはないでしょうか。役職をいただいたのはいいけれど、ただぼんやりとして時を過ごしていることはないでしょうか。そんな姿では「なぜ天を見上げて立っているのか」と、注意されはしないでしょうか。

献堂百周年のその日が来ました。もちろんこの日がゴールではなく、百年の価値ある聖堂をこれから守り続けていきます。「百年も守ってきました。私の責任はもう終わりです。」「私ではなくて、ほかの人にお願ひしてください」と、現実から目を背けないで欲しいと思います。私たちは先祖が見ることのできなかつた歴史の瞬間の目撃者なのです。私たちだけが、百周年という歴史的瞬間を語ることもできるのです。

「田平の人たち、なぜ上を見上げて立っているのか」と、指をさされることのないように、一致して当日の行事とこれからの歩みに加わっていきましょう。そのための恵みを、ミサの中でお祈りいたしましょう。

聖霊降臨(ヨハネ 20:19-23)



聖霊降臨 (ヨハネ 15:26-27;16:12-15)

聖霊は受けた恵みをより深く悟らせる

聖霊降臨を迎えました。聖霊である神さまがわたしたちにどのように関わってくださるのかを考え、学びを得ることにしましょう。

献堂百周年記念は、皆様一人ひとりが力を貸してくださったおかげで、立派な記念の一日となりました。皆さんご苦労様でした。そして本当にありがとうございました。

百周年記念行事の直後に私は司祭の黙想会に参加してきましたが、何人もの先輩方から「ご苦労だったね。立派な式典だったね」とねぎらっていただきました。ふだんねぎらってもらったりいたわってもらったりということは、司祭の間ではあまりないのですが、今回ばかりはあまり言葉を交わさないような大先輩からも「よくやったね」とお褒めの言葉をいただきました。とてもうれしかったです。

私は、百周年は通過点だと思います。これから積み重なっていく日々の歩みが、通過点となった百周年を価値あるものにすると思っています。百周年を通過した後、私たちが信仰のありがたさをもう一度見直し、より積極的にカトリックの信仰を知らせるようにしたいものです。百年を祝った田平教会と、私たちの信仰を、百年たっても自信をもって紹介できないのであれば、何のための百周年であったか？ということになりかねません。

福音朗読でイエスは、「父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをする」(15・26-27)とおっしゃっています。

16章の「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」(16・13)を踏まえて考えると、真理の霊が弟子たちに遣わされて、弟子たちはイエスの教えを十分理解し、証しをする人に変えられていくのです。

私たちはミサの中で信仰宣言を唱えますが、12人の弟子たちの時代にはそのようなだれもが共通に持っている信仰のまとめはなかったことでしょう。私たちは信仰宣言を皆で声をそろえて宣言することができますが、弟子たちは私たちが唱えている内容を、ことごとく理解しておく必要があったわけです。

今後たとえば二人一組になって宣教に出かけるとき、同じだけの信仰をことごとく理解して宣べ伝えます。イエスが言われたとおりに、真理の霊が真理をことごとく悟らせるのでなければ、宣教は成り立たなかったでしょう。

同じことは、私たちにも呼びかけられています。私たちも献堂百周年を祝ったものとして、ますます、私たちの信仰が広まるように働きかけをしていきます。私たちも信仰宣言で語られている内容をことごとく悟らせていただかなければ、宣教は無理なのではないでしょうか。

「瀬戸山の風」四月号で、私はこの聖堂が宣教の拠点となるためのヒントを示しました。私たちの中には、カトリック信者とそうでない方との間で結婚の誓いを交わした夫婦がいらっしゃると思います。結婚当初は、カトリックの洗礼を受けるには様々な事情が引っかかる人がいたことでしょう。

ですがもし今、「私たちはもはや結婚当初に抱えていた事情は取り除かれました」そういう夫婦がいらっしゃるなら、私は喜んで洗礼を授けてあげたいと思いますので、どうか申し出ていただきたいと思います。

結婚当初は、自分の親の世話を考えると、宗教を変えるのは抵抗があると感じていた。けれども今は、両親のためには両親の宗教を尊重しながら、カトリック信者になってもよいと考える夫婦もおられるのではないのでしょうか。

カトリックの洗礼を受けることについて、両親がいる手前、ためらいがあると思っていた人も、長い時間がたってみると、カトリックになっても両親の信仰を軽んじるわけではないと理解できたなら、それは聖霊の働きだと思えます。「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」真理の霊が、その人の心を照らして、洗礼の恵みをより深く理解させてくれたということだと思ふのです。

真理をことごとく悟らせてくださる聖霊は、今も私たちに働きかけます。私たちは真理の霊に心を開き、導きを願うべきです。百周年を迎えたこの聖堂が、祈りと賛美がこだまし、宣教の拠点となるために、一人ひとりが聖霊に動かされる必要があります。

聖霊は、ただ黙って隣に立っているようなお方ではなく、私たちを変えてくださる力ある神なのです。隣に立っているというよりは、私たちの中から、私たちを造りかえるお方なのです。私たちはもっと聖霊に心を開くべきです。

私たちが聖霊に心を開くなら、田平教会聖堂でまだまだ洗礼を受ける人を得ることは可能だと思います。私たちが聖霊の働きに心を開かないと、百年たっても田平教会の現状は変わりません。田平教会を形作る神の家族、その家族構成がより中身の濃い家族構成になるために、ぜひ力を貸してください。

この聖堂が宣教の拠点となるために、ぜひ皆さんの力が必要です。聖霊が、一人ひとりの心を照らし、必要なことに目覚めさせてくださるよう、取り次ぎを願いたいと思います。



三位一体の主日 (マタイ 28:16-20)

疑いを乗り越えて全面的な信仰へ

三位一体の主日を迎えました。三年かけて、三位一体の主日を学ぼうと昨年話しました。今年はその二年目です。今年「子なる神」について考えてみたいと思います。

先週からナイターソフトが始まりました。開幕試合で、誰もがなしえないであろう記録を打ち立てました。四打席連続、空振り三振です。山投げのソフトボールの試合で、全打席空振り三振です。これはどんな選手にもなしえないことだと思います。

その日の夜、腰をさすりながら風呂に入って、山投げのボールにかすりもしなかった自分の打席を振り返っていました。自分では「今がスイングするタイミングだ」と思ってバットを振ったのですが、全て空を切りました。四打席で10回スイングしましたが、1回もボールにバットが当たりませんでした。

私は運動神経はないので、なぜ当たらなかったのかの説明が、理解できません。チームメイトからは「ボールを見てないからだ、目線を早く見切りすぎだ」と言われました。言葉の意味は分かりますが、理解できないのです。

魚釣りでも同じ体験をしました。説明を受けたのですが、理解できず、丸一日棒に振った日がありました。ただ、ある日魚が釣れて、「あー、なるほどね」と理解できたのです。ですから、ナイターソフトでも、だれに説明されても理解できないのですから、私が自分でボールをバットに当てて、「あー、なるほどね」と理解するまで待つてほしいと思います。早速次の試合で「あー、なるほど」となるかもしれないので、どうか使ってください。

三位一体の神秘を考えるのに、光の三原色がふさわしいのではないかと考えました。光の三原色とは、赤と緑と青の三色です。この三色の交ぜ具合で、たとえばテレビはすべての色を表現できるのです。ちなみに三色が一体となって、「白」が表現されています。

この光の三原色になぞらえると、赤は「聖霊」、緑は「御子」、青は「御父」となるかもしれません。炎のような形で表わされる聖霊、緑の大地に人となっておいでくださった御子、蒼天におられる私たちの御父。うまく当てはまるような気がします。

光の三原色は、重なると「白」になるのが特徴です。イエスは山上で、「服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」(マルコ 9・3) となっています。ここには、御父・御子・聖霊の三位一体の働きがあって、真っ白に輝いたのではないのでしょうか。この世の職人ではできないほどの白さなのですから、そこに三位一体の神の働きを見ることで、出来事は可能になったのだと思います。

福音記者はいつも、御子イエスの働きに三位一体の神の姿を見ようとしていました。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」(28

・18) 天は御父です。地は御子です。天と地を結ぶ絆は聖霊です。マタイ福音記者は、復活したイエスの言葉の中に、見ようとしていたのでしょう。イエスは洗礼を授けなさいと弟子たちに言い渡すにあたって、「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」(28・19) するようにと言われました。私たちが復活したイエスを知ろうと努力すれば、三位一体の神についてよりよく知るようになるのです。

一つ、引っかかることがあります。弟子たちがイエスの指示しておられた山で復活したイエスと出会っている場面です。「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。」(28・16) もし私が福音記者でその場面を書き残すとしたら、「疑う者もいた」という書き加えはしないと思います。

なぜわざわざ、弟子たちの中に疑う者がいたと書くのでしょうか。仮にいたとしても、彼ら弟子たちの名誉を守るために、書かないほうが良かったのではないのでしょうか。ここだけ一つ解決して終わりたいと思います。

「疑う者もいた」とありますが、誰が疑っているのか、何を疑っているのか、いっさい書かれていません。そこで考えました。マタイ福音記者は、誰かを非難したり責めようというのではなく、「疑いを乗り越えて信仰が成長することもある」そのことを教えるための書き加えなのではないのでしょうか。

最近私はよく忘れ物をしますが、どうしても見つからないとき、すべての思い込みを疑ってみます。「ここには置いていないだろう」すべてを疑ってみて、思いがけない所、考えられない場所に忘れ物があつたりするからです。

疑ってみて、乗り越えることのできるものもあります。信仰も、なぜ自分がその教えを受け入れられないのか、なぜ教会が教える信仰箇条に抵抗があるのか、自分自身の思い込みを疑ってみて、ようやく信じることができるようになるのではないのでしょうか。

三位一体の神は私たちに疑いを乗り越えるように招いています。私たちは三位一体の神秘を理解できるから信じているわけではありません。疑ってみて、疑いを乗り越えて、その先に信じることが出来る人もいるはずです。父と子と聖霊の唯一の神に、全面的に信頼を置き、手放しで称える人になれるように、恵みを願いましょう。



キリストの聖体 (マルコ 14:12-16,22-26)

どこでどんな働きをお望みですか

キリストの聖体の祭日を迎えました。この祭日に選ばれた福音朗読を通して、私たちが神の望みや神の思いに触れるために、どのような心構えが必要なのかを考えてみましょう。そのヒントとなる言葉は、弟子たちがイエスに尋ねた「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」(14・12)だと思います。

最近野球を安心して観ることができません。楽勝で勝ったと思った日の試合が、寝る前にスポーツニュースを確認したら終盤7点入れられて逆転負けを食らっていました。1イニングに10点取られて大敗した日もありました。ここは一つ、応援しているチームに喝を入れに行く必要があると思っています。

ということで、6月17日は応援しているチームに喝を入れに行きます。この日は何も予定を引き受けることはできませんので、当然司祭館のチャイムを鳴らすこともダメですし、ましてや誰かが死んでもお世話できません。よろしくお願いします。

私が応援しているチームが序盤から混戦を抜け出せないことも、見方を変えれば「セ・リーグ全体が面白くなる」と見ることもできます。私の見方だけを正解と思うなら、それは間違いです。答えはしばしば、別の見方に立つときに見出すものです。

さて福音朗読ですが、考えるヒントに選んだ「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」この個所は、だれの立場に立って考えることができるでしょうか。「どこへ行って用意いたしましょうか」という問いかけを見る限り、これは弟子たちの立場でものを言っているのだと考えるかもしれませぬ。

ですが、すぐ後に続くイエスの指示を読めば、考えは変わるでしょう。「その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』」(14・14)

弟子たちへのイエスの指示は、明らかにイエスの立場に立って動くことを求めています。では少し戻って、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」これもまた、弟子たちの立場に立って読み解くのではなく、イエスの立場に立って読み解く必要があるということなのです。

そこで翻訳の問題を考えてみます。元の言葉では、よりはっきりとイエスの指示に沿って動いていると読み取れる可能性があります。そこで、元のギリシャ語にできるだけ近い日本語にすると、「あなたが過越の食事を食べるために、われわれは行ってどこに準備するようにとあなたは望みますか」となるそうです。これだと、なるほどイエスの指示を仰ぎながら行動していることが読み取れます。

弟子たちがイエスに仰いだ指示。これが今週私たちの学びでもあり

ます。「あなたが過越の食事を食べるために、われわれは行ってどこに準備するようにとあなたは望みますか。」もちろんそのまま当てはまるわけではありません。込められている思いを汲み取るのです。次のようにまとめたいと思います。「あなたの望みに応えるために、私たちにどこでどんな働きをお望みですか。」

ここには「あなたのために私がこうしてあげましょう」といった思いは取り除かれています。お世話好きの人であれば、ついこのように言いたくなる場所です。けれども弟子たちがあえて「私たちがこうしてあげましょうか？」と言うのを控えた、そこを見落としてはいけません。常に、イエスが何を望むのか、どのようにすることを望むのかを考えるべきなのです。

私は過去に、ある人の取った行動をこっぴどく叱ったことがあります。教会の正面に、石を掘って作られた御像が設置されていて、私が巡回教会のミサから帰って見たら、一人の信徒がその御像にペンキ塗りをしていました。もちろん主任司祭の了解もなく、独断でした。「どういうつもりだ」と、顔を真っ赤にして叱った記憶があります。

本人は、汚れが目につくのでペンキを塗ろうと思ったそうですが、たとえば言うなら墓石に汚れが付かないようにペンキを塗ったようなものだったのです。今思うと、思い止まらせるためにもっと上品な言葉を使うべきでしたが、その時は頭に血が上ってどうにもなりませんでした。

たまに、田平教会でも同じ気分になることがあります。本人は良かれと思ってしているのかもしれませんが、主任司祭に報告してからなすべきことを、自分の判断だけで実行しているのを見聞きします。がっかりします。そしていまだに、良かれと思っているのか、何の報告もありません。

もっと、一人ひとり考える余地があります。「あなたの望みに応えるために、私たちにどこでどんな働きをお望みですか。」主任司祭から「誰の許可を得てしているのか」と言われるのはある意味大したことではありません。主任司祭はいつか変わるのですから。

しかし、イエスから「誰の許可を得てそんなことをしているのだ」と言われたら、それは致命的です。自分の行動に命をもって責任を取ることになるかもしれません。「これくらいは許される」「これくらいは」自分一人で正しいと思った判断は、しばしば正しくないと思うべきです。

すべての人がイエスに問いかけるべきです。「あなたの望みに応えるために、私たちにどこでどんな準備をお望みですか。」長を任せられている人、活動団体に入って協力している人、病院に入院している人でも、イエスに問いかけるのです。そして一人残らず、イエスの望みに自分を合わせようと、日々自分をおささげしましょう。常にイエスの望みを追い求める人に、神はご自分の望みを打ち明けてくださいます。



年間第 10 主日 (マルコ 3:20-35)

より大きな器に身を置いて神の望みを知る

一連の大きな祭日が終わって、年間の主日に移りました。今週年間第 10 主日に選ばれた福音朗読箇所、「これはイエスが語るような言葉だろうか」と思わせる箇所があります。私たちの器が小さくて、イエスの言葉を理解できない場合は、私たちの思い込みをあっさりとして捨て、もっと大きな器を神に願い求める必要があります。

枢機卿様となられる大阪の前田万葉大司教様に、二人の補佐司教様が与えられることとなりました。酒井俊広被選司教様と、アベイヤ被選司教様です。私は酒井被選司教様とは十年来の付き合いがあります。新司祭のころから、当時聖堂学園の先生だった酒井神父様と、毎週のようにテニスをしていました。雨が降っても室内のテニスコートを探すくらいのテニス仲間でした。

また、私が太田尾教会の主任司祭となってからは、わざわざおいでくださって、ボートでの釣りに出かけたりもしていました。海の魚はお客様さんには親切なのか、私よりも酒井神父様がよく釣っていたような記憶があります。

このたび司教に叙階されるということで、お祝いのメールを送りましたら、叙階式においでくださいとのお誘いを受けました。日程が調整つければ、喜んで見届けに行きたいと思います。またご本人から、黙想会の説教師を探すのに苦労しているなら、どうぞ私をお使いくださいと言っていたいただきました。黙想会の謝礼をどうするかという問題がありますが、考えてもいいなあと思っています。

司教に選ばれる方々は、東京におられる教皇大使から、「あなたは補佐司教に司教に選ばれました」と伝達されるわけですが、どうやら酒井被選司教様にとっても全く予想だにできなかったことのようにです。多くの方に挨拶として発送した手紙を読むと、司教職にふさわしくないことは誰よりも自分自身がよく知っている。けれどもこの小さな自分を使って神は大きなわざを示されるのだろう。そう思って引き受けたというようなことが書かれていました。

酒井被選司教様にとっても、神の計画を知るために、自分は器ではないと思っても、神の望みが自分の思いを越えているときは、あっさりとして自分の器を捨て、もっと大きな器を神に願い求める必要があったのでしょ。神さまが与えてくださるより大きな器に植え替えられて、より大きな仕事ができることを願っていますし、できれば叙階式を見届けて、被選司教様のために祈ってあげたいなと思いました。

福音朗読に戻りましょう。初めに私が「これはイエスが語るような言葉だろうか」と思ったのは次の箇所です。「また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。」(3・27)

これは強盗のすることであって、イエスはまるで強盗の仕方を手ほ

どきしているかのように聞こえます。何回もこの朗読個所に当たったでしょうに、今の今まで疑問にも思いませんでした。皆さんもこの個所をミサの中で、自分で聖書を読む中で聞いたり目にしたりしたことでしょう。疑問に思わなかったのでしょうか。

そこで、私たちの思い込みという器をいったん捨てて、より大きな器でものを考えるようにしましょう。「強い人を縛り上げて、家財道具を奪い取る」と言うのですが、このたとえを面と向かって話しているのは「彼は汚れた霊に取りつかれている」と言っている人たちに対してです。

もし「強い人」が、「律法学者」のことだとしたらどうでしょう。イエスの眼に彼らは群衆を知識で抑圧している人々に見えていたかもしれません。すると、「家財道具」とは抑圧されている群衆のことで、律法学者を縛り上げなければ、取り戻すことができなかったのではないのでしょうか。

おそらくイエスは律法学者に、「あなたたちの私への非難は全く当てはまらない。あなたたちが家財道具と思っている群衆を、私はあなたたちから取り上げる」と、警告を発していたのでしょうか。イエスのたとえの中に、強い警告が込められていると考えれば、イエスがあのようなたとえをなされたことも理解できるのではないのでしょうか。

朗読の後半についても、「イエスの母、兄弟」とは誰か、より大きな器に身を置いて考えさせようとしている、そう考えると理解できます。決して、家族を軽んじて構わないと言っているのではありません。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」(3・34-35) 神の御心を行う人は、人に対して果たすべき務めを決して見誤ることがないのです。

冒頭、酒井被選司教様と私の交友に触れましたが、酒井被選司教様は所属しているオプス・デイというグループの中でも中心的なメンバーでした。所属しているグループは家族のようなものです。しかし、さらに大きな器に身を置いて働くことを教皇様に願われて、決断をしたのです。オプス・デイというグループの中で没頭して働こうとしていた神父様に、イエスは「周りに座っている人々を見回してごらん。『ここにあなたの母、あなたの兄弟がいるよ』」と言われたのだと思います。

誰にとっても、自分の見ているものが正しく見えるものです。しかし神は、時としてより大きな器に私たちを移し替えて、違った見方を示し、ご自分に従うように招くのだと思います。私たちはその際、執拗に自分の見方にしがみつくべきではないのです。時にはあっさり自分今いる器を捨て、より大きな器を受け入れる必要があります。こうして神の国は広がっていくのです。

神は私たちの日常の関わりを変えてでも、より大きなものの見方を身につけさせ、宣教の担い手とすることがあります。神の招きに大きく心を開き、新しい景色の中で、神の使いやすい手足となっていきましょう。そのための恵みを、このミサの中で願うことにしましょう。



年間第 11 主日 (マルコ 4:26-34)

神がまかれた種が出発点なら

ミサの中で説教の時間は、ミサが長くなったり短くなったりするのに最も影響する要素です。思い込みかもしれませんが、大司教様が説教するミサと聞けば、長くなるかなあと想像してしまうものです。以前お話ししたように今日私はミサのあとすぐに福岡に行くので、長い説教はしません。

今週の朗読で、二つのたとえが語られています。神の国を当時の人々により親しみをもって考えてもらえるように、「成長する種」のたとえと「からし種」のたとえに当てはめたのです。これらのたとえは、最終的には神の国が種まかれると、ひとりでに実を結ばせることを教えてくれます。人間の計算通りにではなく、知らないうちに、ひとりでに実をつけるのです。

植物の種がどんなに小さくても大きく実をつける。このように神の計画も初めはどんなに小さく見えても、必ず大きく実をつけるということです。私たちは献堂百周年の実りを見ましたが、始まりは献堂百周年の祈りを唱えたところからではなかったでしょうか。一回の祈りそのものは、それこそゴマ粒のような小さな取り組みでした。けれどもたくさんの人に感謝される実りとなりました。これからもたくさんの実をつけることでしょう。

これほどの大きな実りを喜び合えたカギは何でしょうか。私は、始まりとなった献堂百周年の祈りの中に、「実を結ばせたい」という神の思いが込められていたからだと思います。

祈りを作ったのは中田神父かもしれません。けれども中田神父の中には、ここまでの実りを予想はできませんでした。最初から、ここまでの実りを思い描くことができたのは、神お一人ではないでしょうか。

小さなものに過ぎなかった「献堂百周年の祈り」に、皆さんが空気を吹き入れてくださり、神が膨らませてくださったのです。どんなに練り上げられた計画も、必ず成功すると私たちは断言できませんが、出発点に神の思いが込められた働きは、鳥が巣を作るどころではない、すべての人が憩いを見出すほど大きな実りをもたらすのです。

そこで私たちが学ぶべきことはこうです。これからなそうとするその計画に、神の望みは込められていますか。その計画は神の望むことに向かっていますか。ここさえ間違いがなければ、人間の働きが不足していても、神がその計画を完成させてくださいます。

神が計画の出発点から立ち会っておられた出来事であれば、人間の協力がどんなにみすばらしいものであっても、計り知れない実を結ぶのです。私たちはこの点を信じ、人にもそのように語れる者でありたいと思います。



洗礼者聖ヨハネの誕生 (ルカ 1:57-66,80)

見えないものが見えるとき

今年は洗礼者聖ヨハネの誕生の祭日6月24日が日曜日と重なりました。祝日が日曜日と重なるとその年は暦から消える中で、イエスの先駆者となった洗礼者聖ヨハネの誕生は特別です。ほかにも聖ペトロ聖パウロの祝日が日曜日と重なったときも特別扱いです。洗礼者聖ヨハネに焦点を当てて、今週の学びを見つけることにしましょう。

今週の朗読で目につくのは、ヨハネの誕生を喜ぶ周囲の人々と、両親の喜びとは見ているものが違うということです。人々は、子どもに恵まれない夫婦を神が大いに慈しまれたと喜びました。両親は、我が子を前に、「主の前に道を整える預言者」が生まれたと見ていたのです。

誕生したことに目を向ける周囲の人々は、当時のしきたりに従って子どもに名前をつけようとします。彼らの目には、子どもに恵まれたということ以外は見えていなかったからです。ところが両親は、神の計画に沿った出来事だから、神の計画に沿った名前をつけなければならないと理解していました。「名はヨハネとしなければなりません」「この子の名はヨハネ」眼の前の子どもを、単に赤ん坊と見ている周囲の人々と、預言者と見ている両親とは、見えているものが違っていたのです。

何が違っていたのでしょうか。両親には、見えないものが見えていたのです。人々が「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもいない」(1・61)と言ったとき、周囲の人々には見えていないものを見せてもらっている。そんな静かな喜びに満たされていたことでしょう。

見えないものを見る力を「信仰」と言い換えても良いでしょう。主の天使から我が子の誕生を予告されたとき、受け入れることができませんでした。主の天使が見ているものを、ザカリアはその時点で見ることができなかつたからです。見えないものを見る力、「信仰」が足りなかつたのです。そのためザカリアは神によって口がきけなくなりました。

今ようやく、ザカリアはエリサベトとともに主の天使が予告した世界が見えるようになったのです。単に我が子が与えられたというだけではなく、イスラエルの民に「主に先立つ預言者」「主の道を整える者」が与えられたことを見て取ったのです。

見えないものが見えるとき、信仰はより一層深まります。ザカリアは主の天使の言葉を疑い、口が聞けなくなりましたが、今ようやく見えないものが見えるようになり、信仰が深まり準備が整ったので、神を賛美し始めます。

ここで見逃してはいけないことがあります。父ザカリアは「口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」(1・64)となっていますが、これは日本語の翻訳がそうなっているのであって、見えないものを見るためには、もう一步踏み込む必要があります。この部分を元の言葉であるギリシャ語に近い訳をすると「口は開かれ、舌がほどかれ、神を賛美して言った」となるそうです。この違いにお気づきでしょうか。

違いは「口が開き」と「口が開かれ」です。「口が開いた」これだけだと、今まで内面の問題などで言葉を失っていた状態から回復して語りだしたように感じます。当時周囲の人々にはそのように見えていたかもしれません。

しかし「口が開かれた」という意味であれば、その向こうに「口が開けないように仕向けた方」がおられて、その方がザカリアを赦し、赦された証しに口が開かれたことになります。その御方とは「神」であって、ザカリアはかつての疑いの罪がようやく赦されて、神を賛美し始めたということです。

ザカリアにとってこの賛美は、見えないものが見えるようになった賛美、信仰を深めてもらったことへの賛美でした。私たちも説教の結びは、見えないものを見せてもらったことへの賛美で終わりたいのです。

では、洗礼者聖ヨハネの誕生は私たちにとってどんな意味があるのでしょうか。主の道を整える預言者が私たちにも与えられたということです。人々に主の道を整える、その日がやってきたということです。当時そのような機会に恵まれただけではなく、今も私たちを通して、主の道を整える、その日が来ているということなのです。

これを、私たち誰もが知っている言葉で何と云えばよいのでしょうか。私が言わずとも、ここにいる皆さんが声に出してくれたなら、説教を閉じて構いません。どんな言葉が当てはまるのでしょうか。口は開いたままで、思い浮かばないのでしょうか。おそらくこの言葉にたどり着くと思います。ミサ中の言葉です。「主の死を思い、復活をたたえよう。主が来られるまで。」

ヨハネの誕生を通して、主の道を整える時代がやってきたと言いました。今の時代、誰が主の道を整える人なのでしょう。主任司祭でしょうか。修道院のシスターたちでしょうか。そうかも知れませんが、もっと身近な場所では、ここに集まっている皆さんお一人おひとりが、「主の道を整える預言者」なのではないのでしょうか。

たとえば家庭で、日に三度の食事を頂いています。時には来客も交えて、楽しい食事かもしれません。その食事を、主の道にかなったものに整えるために、「食前の祈り」をします。誰が「食前の祈り」を唱えるのでしょうか。主任司祭が呼ばれて唱えるのでしょうか。

日々の生活。朝が来て、夜で一日が終わります。一日の始まりを主の道にかなったものにするために「朝の祈り」を唱えます。誰が「朝の祈り」を唱えるのでしょうか。まさか、修道院のシスターが呼び出されて唱えるのでしょうか。

十分、答えはわかっていると思います。世に対して、そして世の終わりまで、「主の道を整える預言者」となるのは私たち一人ひとりなのです。今週洗礼者聖ヨハネの誕生に選ばれた朗読から、ぜひ見えないものを見抜いて、生活に活かしてください。見えないものが見える信仰の目を常に磨いてくださるよう、主に願い求めることにしましょう。



年間第 13 主日 (マルコ 5:21-43)

固く信じて近づく人にイエスは答えてくださる

マルコ福音書 4 章 35 節から 8 章 26 節は、一連の奇跡物語です。これら一連の奇跡は、それぞれ癒やされた人の物語であると同時に、ペトロの信仰告白を引き出すための出来事でもあります。私たちも、物語を読むことで、イエスへの信仰を告白する、信仰を宣言する機会としたいと思います。

7 月 3 日、聖トマスのお祝いをお祝いをして今日開いてもらうことになり、感謝申し上げます。祝賀会の時は、寸劇をしようと思っていますので、楽しみにしておいてください。また「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されました。私たちはこれからも誇りを持って、受けた信仰を守り継いで行きたいものです。

7 月 1 日は、日付にこだわって考えると「福者ペトロ岐部と 187 殉教者」の記念日です。東京大司教区ではいろいろな記念行事を計画しているようですが、長崎では特別な行事は組まれていません。なにか一つでも、ということで 188 殉教者の取り次ぎを願い、列聖を求める祈りが届いています。ミサの終わりに唱えて、各自持ち帰ってください。身近な人に配りたい人もいるでしょうから、出入り口にカードを置きますので、ご利用ください。

主任司祭は車を去年の 5 月に「カラーラフィールドハイブリッド」に買い替えましたが、1 年ちょっと乗ったところで油断が生じたのでしよう。佐世保市総合病院の立体駐車場の中で対向車と離合するときに柱で車を凹ませてしまいました。

私は降っていて、相手は登ってくるころでしたが、油断があったのでしよう。大きく左折して対向車をかわそうとしたら後部座席、左のドアを柱に押し付けて、ドアが凹んでしまいました。興味がある人は車庫の扉を開けて見に行ってみてください。

がっかりしましたが、ちょうど総合病院での出来事でしたので、入院手続きを取って、明日から入院させることにしています。その間は、長崎に行く用事の時でも軽自動車で行かなければなりません。ただし、軽トラックでは行かないことにします。軽トラックで大司教館に停めていたときに、「ここは大司教館に用事のある人が利用できる駐車場です。速やかに移動させてください」と張り紙をされた経験があるので、今回は軽トラックでは行かないことにします。

さて与えられた福音朗読は「ヤイロの娘」と「イエスの服に触れる女」の二つの奇跡物語です。私はそのうちの「イエスの服に触れる女」について少し考えてみたいと思います。出血の止まらない女性は、「この方の服にでも触れればいやしていただける」(5・28) と固く信じて、イエスに近づいていきます。

それにしても不思議なのはイエスの言葉です。「イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、『わたし

の服に触れたのはだれか』と言われた。」(5・30)

なぜ、このような投げかけをしたのでしょうか。群衆がイエスに押し寄せ、寄せていても、「いやしていただける」と固く信じて近づいてくる女性がこの中にいると、イエスはご存知だったはず。それだけの決意をした人であれば、鬼気迫るものが伝わるはず。なぜイエスは、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われるのでしょうか。

もし、イエスがうっかりしていたとしたら、私は慰められます。服に触れるまで、自分の内から力が出て行くまで気づかなかったのであれば、私は慰められます。イエスさまでもうっかりすることがあるのだな。私が車をうっかりぶつけるのも無理ないよな。そう思うのです。

「わたしの服に触れたのはだれか」と言われたのは確かです。うっかりしていたから確かめようとしているのではないとすれば、どんな狙いがあるかを探する必要があります。それは、ペトロのためだったかもしれません。弟子たちが「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」と言ったことになっていますが、ペトロが代表して言ったのかもありません。

弟子たちの考えをまとめると、「群衆が押し迫っているのでだれが触れたか分からない」となりますが、イエスが示した答えは、「群衆が押し寄せている状況でも、固い決意で願い求めている人に恵みは届く」ということです。仮にイエスがうっかりしていたとしても、イエスから力が出て行って、その人をいやしてくださるということです。

私たちに当てはめてみましょう。私たちは自分たちの願いが届くのは、何かのことで目に留まるから、抜きん出ているから叶えてもらえると思うかもしれませんが。特別なことなどない願いは、誰の目にも留まらないし、神にも取り上げてもらえないと思っているかもしれません。

今週イエスが示してくださったのは、人々の目には見分けもつかない願いであっても、イエスは必ず叶えてくださるということです。私たちの願いはいろいろですが、どんな願いも、誰の目にも留まらない願いであっても、神は目を留めてくださるということです。

神が目を留めてくださるなら、神は答えてくださいます。「神は必ず、目を留めてくださる。」中田神父は、これまでその体験をいくつも積みました。さまざまな病人を見舞い、神のもとへ旅立つ場面に立ち会い、神が目を留めてくださる姿を見てきたのです。私が願ったとおりではないかもしれませんが。ですが神が目を留めてくださり、神が与えてくださる答えは、十分信頼できます。

あとは、イエスの示した答えに私たちがどのように動くかです。イエスの示した答えを、人々に告白する、宣言すること。これが私たちに求められています。イエスは必ず答えてくださいます。そして、私たちに示されたイエスの答えは、十分信頼できます。この気持で新たな一週間を過ごしてまいりましょう。



年間第 14 主日 (マルコ 6:1-6)

問い続け、納得して受け入れる

まず、この度の台風被害に心からお見舞い申し上げます。「なぜこんなことが」と言いたくなるような災害でした。慰めと、励ましをイエスに願いたいと思います。

今週の福音朗読箇所は、故郷のナザレでイエスが受け入れられない現実を弟子たちが見ることになります。日本では「故郷に錦を飾る」と言ったりしますので、弟子たちはイエスの活動を、故郷の人々が手放しで歓迎するだろうと思っていたかもしれません。

ところが、事実は正反対でした。「誰その息子が、何を偉そうに」そんな反応だったのです。イエスの働きぶりを、故郷の人々は自分たちの知っている知識と結びつけました。人々の驚く姿は今週の朗読の大切な鍵なのですが、驚きが信仰には結びつかず、かえって疑いを生む結果となりました。

先週、一連の奇跡はペトロの信仰告白に繋がる出来事として見ることもできると言いました。「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた」(6・5-6)今週の出来事は、弟子たちを失望させ、なかでもペトロの信仰を挫く危険もあったと思います。

ペトロは今日の出来事でも信仰を失わなかったのでしょうか。期待をくじかれるとき、人はだれでも自身を失い、失望するものです。私だってそう考えます。けれどもペトロは、故郷で冷たくあしらわれたイエスに、従い続けたようです。

最近二つの貴重な体験をしました。改めてカトリックの信仰は素晴らしいと思いました。一人の御婦人は、楽しみにしていた日を迎えようとしていましたが、その日を延期されてしまいました。ふつうであれば、落胆し、恨みに思うかもしれません。けれどもその人は、「わたしの償いが足りないので、延ばされたのでしょうか」と事もなげに答えました。

その人の様子は逐一聞いていたので、いよいよその日が来ると思っていたのです。「がっかりしているだろうから、慰めてあげよう。」そんな気持ちでしたが、その御婦人はむしろ、延期されたことを神さまのお考えに違いないと結びつけたのです。こんな人と出会うことで、私たちは信仰を深めてもらうのではないのでしょうか。割り切って考えることの多い私も、その受け止め方に頭が下がりました。

もう一人は、先週出血の止まらない女性を説教に取り上げましたが、そのミサの帰りに私のスータンの裾に触れて帰った御婦人がいたのです。「あの人は、どうしてあんなことしたのだろうか」と、さっき朗読した出血の止まらない女性の箇所と御婦人の行動とを結びつけることができませんでした。しかしこの御婦人は、私のスータンの裾に触れて、「神さまがきっと良くしてくださる」と信じ、黙って帰っていったのです。

驚くべきことが起こりました。調子が良くなると、後日御礼を述べに御婦人が司祭館に来たのです。調子の悪かった人が司祭館にまで御礼に来るのはよほど嬉しかったのでしょう。私は先週裾に触れた理由がやっとわかり、私も御婦人の調子が良くなったのを喜び合いました。私を道具として、イエスの力が御婦人に届いたのだと思います。

イエスの故郷ナザレで、人々はイエスを驚きをもって迎えました。驚きは、大切に温めると信仰に向かっていきますが、粗末に扱おうと疑いのもとになります。故郷の人々は自分たちが感じた驚きを粗末に扱ってしまい、イエスを疑いの目で見たとです。しかし弟子たちは、イエスの驚くべきわざを大切に温めました。

私たちがわからなくても、きっとそこには何かが込められているに違いない。私の体験談で話した二人の人も、自分の身に降りかかっていることを身の回りにある答えで片付けようとせず、もっと大切な意味が込められていると考えたので、神さまが答えてくださいました。

「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」(6・3) 故郷の人々は簡単な答えに結びつけたために、イエスを見誤りました。弟子たちはその場ではわからなくても、答えがわかるまで驚きを温め続けたのです。そのおかげで、ペトロはイエスへの信仰を告白できたのでした。

私たちの周りにも、「なぜそうなるのか」と驚き怪しむことがあるかもしれません。「神さまはおられるのか」とさえ思うかもしれません。簡単な答えにすがるうとすれば、私たちはほんとうの意味を見つけることなく、失望したり恨みに思ったりするのです。

神さまが私たちに見せているのは、「知恵の輪」のようなものではないでしょうか。答えは確かにあるのですが、簡単な答えに結びつけようとしても決して解けないのです。「こうに違いない」と思ったことすら横に置いて、神さまが示そうとする答えにたどり着かなければなりません。神さまの示そうとする答えを知るまで待てない人は、知恵の輪を無理やりこじ開けて勝手な答えを出すでしょう。

そうではなく、神さまが示そうとする答えはかならずあるのだから、納得して神さまの答えを受け入れる準備が整うまで待ちましょう。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。」(6・2) 問い続けるなら、神さまが示そうとする答えに私たちもたどり着き、納得してその答えを受け入れることができると思います。



年間第 15 主日 (マルコ 6:7-13)

すべてにイエスを抛り所として

マルコ福音書を中心に日曜日の福音朗読を組み立てるのがABC年さん年周期のB年です。B年の年間第15主日は、弟子たちが十二人呼び寄せられ、派遣されていきます。私たちが日曜日にこの聖堂に呼び寄せられ、派遣されていく姿を思い描きながら、今週の糧をいただくことにしましょう。

チャンスがあって、あることを調べて分かったことがあります、皆さんと分かち合いたいと思います。それは、一般のカレンダーに見られる「六曜」についてです。ご存知のかたもおられると思いますが、「六曜」とは「日の吉凶に関しての陰陽(おんよう)道や民間信仰で、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口(しゃっく)の六種の日」のことです。

感の鋭い方は私が何を言いたいのかすでにお分かりのことでしょう。これは「陰陽道や民間信仰」であって、仏教の教えではない、ということです。カトリック教会の神父がわざわざ説教で言うことではないかもしれませんが、けれども皆さんの家庭でも、仏教の信仰の方と結婚した方もいらっしゃるでしょう。そうであればなおさらですが、仏教は仏教の教えを大切にし、キリスト教はキリスト教の教えを大切にすべきだと思うのです。

なぜ日本人は、「大安」や「友引」に神経を遣うのでしょうか。キリスト教徒は、「大安」や「友引」をあまり気にしませんが、仏教徒が、仏教の教えではない「大安」や「友引」を気にするのは、間違っていると思うのです。仏教の教えであれば仏教徒が大切にするのは当然です。なぜ陰陽道の考え方なのに、仏教徒が振り回されるのですか。私はそう言いたいのです。

確認のために、「六曜」の中から二つ紹介します。一つは「友引」です。明治時代までは共通という意味の「共」に「引く」と書いていました。意味は、「勝負がつかない引き分けの日」です。しかも、「大安」の次に日取りが良いとされています。

もう一つは、「仏滅」です。これは「何をするにも悪い日」だそうで、明治時代までは「物」を「失いやすい日」として「物」の「ぶつ」に「滅」と書いていたのです。人によっては「仏すらも滅びる縁起の悪い日」と解釈していたようです。

ここまで知れば、私たちが何となく考えていた理解が曖昧であったことが分かります。「六曜」は陰陽道の教えであって、仏教の教えではないのです。それでも納得行かない人は、お寺のお坊さんに「友引は仏教の教えですか」「仏滅は仏教の教えですか」と尋ねてください。

私たちはカトリック教会の信者ですから、カトリックの教えを大切にしなければなりません。福音朗読では十二人の弟子たちが二人ずつ組にして遣わされていきます。ここでも、弟子たちに本当に必要なことは一つです。それは、「イエスの弟子だから、イエスの教えを何より大切

にする」ということです。

イエスは弟子たちを派遣するにあたり、指示を与えました。「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず」(6・8)とあります。この指示は、イエスの教えを何より大切にするという考えが背景にあります。

実際には予備のためのパンを備えておくと、何かと便利でしょう。寄付をしてもらうための献金袋を持っておくことも、いざというとき助けになるでしょう。けれどもそれは、「イエスの教えを何より大切にする」という原則に外れるのです。イエスの教えに行き詰まったとき、すぐるものがほかにある。これでイエスに全幅の信頼を置けるでしょうか。

「この場面ではイエスの教えを抛り所にしましょう。ここは民間信仰を抛り所にしましょう。」私たちキリスト者には、そのような使い分けは許されていないのです。すべてがキリストを抛り所にして組み立てられたものでなければならないのです。

私たちの命はどのようにして与えられたのですか。私たちは死ぬとどのようになるのですか。キリスト者は皆、子供であろうが大人であろうが、命の始まりから死、そして復活の希望まで、イエスの教えを抛り所にして説明すべきなのです。

あえてもう一度触れておきます。なぜこの世の旅立ちについて、仏教徒が陰陽道を抛り所にして日取りを決めるのですか？私たちキリスト者は陰陽道を気にして旅立ちの日を決めたりしません。仏教徒も、仏教の教えに沿って旅立ちの準備をすべきではないのでしょうか？

私たちキリスト者は、命の始まりから終わりまで、復活のキリストに希望を置いて人生を全うします。イエスから派遣された弟子たち、朗読では教えについて細かな指示はありませんが、派遣された場所で彼らの一挙手一投足が、人々に「この人はイエスの教えを抛り所に生きている」と感じさせたのです。最後は教えがどうのこうのではありません。生き方が、「この人はイエス・キリストを心底信じて生きている」と伝われば、それが何よりの宣教、証なのです。

日本人の多くは「今日は日が悪いから」と言って行動を控えたりします。その中には仏教徒もいるでしょう。仏教が教えもしない「友引」や「仏滅」に右往左往しては、「私は仏教の教えを抛り所にして生きている」とどうして言えるのでしょうか。

キリスト者は「日が良くて悪くても」福音を宣教します。パウロが弟子のテモテへの手紙で述べた通りです。「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くて悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」(2テモテ4・2)

派遣された人は、福音を携えて行きます。私たちも今日、この聖堂から派遣されていくのです。「大安」の日も「友引」の日も「仏滅」の日も、私たちがすることはたった一つ、イエスを抛り所にして日々を生きる。これです。この一つを携えて、今週の生活に戻っていきましょう。



年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

休まずに教え、諭すイエス

「使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した」(6・30) 今週年間第 16 主日の福音朗読はこのように始まっています。先週どのような指示を受けて出かけていったのかが語られていました。一週間も経つと、なかなか思い出せないかもしれません。今週は先週の流れを思い出すところから出発しましょう。

大阪の前田枢機卿様による補佐司教叙階式に参列してきました。司教座聖堂はエアコンのない聖堂でした。もし私たちがこのミサをエアコン切って挙行したら、逃げ出す人が出てくるかもしれません。そんな暑さと戦いながら、前田枢機卿様は立派にご自身の二人の補佐司教を叙階して、喜びあうことができました。

ところで前田枢機卿様には、私たち田平小教区からのお祝いを届けることになっていたのですが、忙しくなる前にと思い、ミサの 1 時間前に大司教館を訪ねたのです。すると受付の人がいたので、お祝いを渡したいと伝えると、「おつなぎできません」とあっさり断られました。「そんな～」と思ったのですが、別の先輩から「前もってアポイント取らなきゃ」と諭されました。私たちの考えが甘かったのですが、叙階式後に無事にお渡ししてきました。

司教様は本当に大切な牧者です。司教様の務めは教会法の中に関連する法令が 55 項目ありました。その中には、たとえば教区司教の務めがありまして、教区司教は教区民をこのように導かなければならないとか、教区内の司祭たちをこのように導かなければならない、そういう項目もあります。

司教様は司祭と教区民を導かなければならないわけですが、教会法の中で書かれていることは法律の面から見た務めで、司教様は教会法によって教区民や司祭に、牧者として教え導き、励まし、時には忠告したり罰を与えたりもするわけです。それは父親が子供に対して教え導き、時には叱ったりするのと同じことです。

親しくさせていただいた神父様が、このような重い務めを引き受け、補佐司教様になった姿を見て、大変だなあと改めて思いました。あの暑さの中で司教に叙階されたことで、火で精錬された鉄のようになったのかもしれないと思いました。

さて福音朗読ですが、先週十二人がイエスに派遣される場面では、「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした」(6・12-13)と結ばれていました。

十二人はイエスの権能を授かって恵みを届けることと、「悔い改めさせる」ためにも出かけました。教え導くだけでなく、時には戒めたり警告したりもしたのです。これはまさに、現代の教会法が司教様に求

めている務めに通じるなあと思いました。

今週の朗読は、その十二人が戻ってからの話です。彼らは精神的にも肉体的にもそうとう疲れて帰ってきたのだと思います。イエスは彼らに休みを取らせませぬ。肉体的な休み、たとえば横になって体を休めるというよりは、精神的な休みを取るよう勧めています。

宣教活動は人々の悩み苦しみに寄り添って手を差し伸べることが多いので、精神的な疲れがあるとどうしても続けられません。「人里離れた所」は、イエスが父なる神と語り合うために好んで選ばれた場所ですから、弟子たちにも父なる神に自分を委ねることで力を取り戻してもらいたかったのだと思います。

ところで、弟子たちに休みを与えている間も、悩み苦しむ人々は救いを求めて集まってきます。「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」(6・34)

イエスのこのような姿は、文字通りの働きを表していると同時に、弟子たちが休んでいる間も、イエスが悩み苦しむ人々のために休まず働いてくださるから、休む時は信頼を寄せて休みなさいと言われていたのだと考えました。司教も司祭も、どこかで休みが必要になります。

その間も絶えず悩み苦しむ人が救いを求めてくるわけですが、イエスは休まず働いて、司教や司祭の足りないところを満たしてくださるのです。教会は、見える姿だけではなく、見えない姿もあって、絶えず宣教し、絶えず人々の苦しみに寄り添っているのだと思います。

教え、励まし、時には戒めてくださるイエスが、弟子たちを通して、枢機卿様、司教様、司祭を通して働き、彼らが休んでいるときも、羊のために休まずイエスがお世話してくださる。この姿を今週は持ち帰りたいたいと思います。



年間第 17 主日 (ヨハネ 6:1-15)

私たちもイエスのパンを分け与える弟子

年間第 17 主日は典礼暦 B 年の福音朗読の流れから外れていますが、ペトロの信仰告白に至るまでの奇跡物語の一つとして捉えてみたいと思います。選ばれたのは「五千人に食べ物を与える」奇跡です。単にパンを増やした奇跡としてではなく、「いかにして五千人に食べ物を与えるか」このことに焦点を当てて考えることにしましょう。

与えられた朗読をざっと見渡して、物語全体に味をつけているのはどこでしょうか。イエスが言われた言葉や行動が、物語全体に味付けをしている、出来事に意味を与えているわけですが、どの言葉でしょうか。どのような行動でしょうか。

私はこう考えます。イエスがフィリポにかけた言葉が、これから起こること全体に関わる味付けしていると思っています。それは 6 章 5 節「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだらうか」ここだと思えます。

すると、その後にかかる出来事は初めの言葉と比べれば、その次になるような重みの出来事かもしれません。たとえばパンが増えたことをことさら強調していないのも、ヨハネが何を重視しているかを暗に示しています。

「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだらうか」イエスは明らかに、群衆に食べ物を与えようとしておられます。さらに「どこでパンを買えばよいだらうか」この言葉も気になります。パンを買う場所が、いくつもあるとは考えにくいです。

小店とか、郊外にあるショッピングセンターとか、専門店とか、そういう店の区別ではなく、「この人たちに食べさせるパンを与えることができるのはイエスただ一人である」ということを、どうすれば気づかせることができるだろうか。そういう意味ではないでしょうか。

イエスは弟子たちに行き出しに行くよう命じることもなく、その場で大群衆にパンを与えます。しかも、有り余るほど与えました。こうして、「イエスこそ、まことのパンを与える方である」ということを示したのですが、弟子たちは理解が及ばなかったかもしれません。ただ弟子たちはのちにはっきりと理解することになります。

「こう言ったのはフィリポを試みるため（であった）」何を試そうとしたのでしょうか。何が試されているのでしょうか。参考ですが、フィリポは弟子たちの中で抜きん出た存在ではなかったようです。ヨハネ福音書の別の箇所でも次のようにイエスに言われています。

「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。」(ヨハネ 14・9) このフィリポに私はとても親しみを感じます。フィリポが試されていた事柄は、私たちが試されている事柄かもしれません。どんなことでしょうか。

私が考えたのはこうです。「イエス・キリストを与えなければ、この人たちに食べさせることはできない。」この答えにたどり着くかどうかを、フィリポはじめ弟子たちは試されていたのではないのでしょうか。同じように私たちも、この人たちに食べさせるには、イエス・キリストを与えなければならないのです。

ところで「この人たち」はどこにいますのでしょうか。福音朗読ではイエスのもとに集まった大群衆でした。私たちにとっての「この人たち」は誰なのでしょう。私は、「イエス・キリストを必要としている人々」だと思います。

ミサをささげる司祭にとって、「イエス・キリストを必要としている人々」とは皆さんのことです。説教によって神の言葉のパンを分け与え、聖体の秘跡によっていのちのパンを分け与えます。司祭が人々の中に分け入った時は、イエス・キリスト抜きで生きていけると思っている人々すべてが「この人たち」です。この人たちにもパンを与えなければなりません。パンは詰まる所イエス・キリストですから、司祭の生き方、接し方、声のかけ方で何千人もの人にイエス・キリストというパンを与えるよう召されているのです。

ただ司祭だけが、この使命に召されているわけではありません。皆さんはミサを通して、みことばのパンと、いのちのパンを頂いたのです。それはまず、あなたのためのパンですが、弟子たちが差し出した五つのパンでもあるのです。人々と分け合う時、数えきれない人々が食べて満たされるほどの豊かさを持つパンなのです。

近くに、いのちのパンを分け合える人がいないのでしょうか。同じ屋根の下に暮らしながら、いのちのパンに触れたことのない人がいないのでしょうか。聖体のパンはまだ分け合うことができなくとも、みことばのパンをその人と分け合えるのではないのでしょうか。

イエスは弟子たちが「こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」(6・9)と言った元手を使って、数えきれない人をご自分のもとに引き寄せ、満たしてくださいました。ここにいる二百人がそれぞれ二人とみことばのパンを分け合ったら、四百人の人が同じパンに触れることになります。その積み重ねがあれば、私たちも五千人にイエスのパンを分け与える人なのではないのでしょうか。



年間第 18 主日 (ヨハネ 6:24-35)

イエスが与えてくれるものなら何でも

今週の福音朗読で群衆が問いかけ、イエスが答えるやり取りが出てきます。群衆とイエスの、しりとりのような言葉のやり取りはまったく噛み合っていません。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」「わたしが命のパンである」この噛み合わないやり取りが今週の学びを与えてくれます。

お願いして、司祭館の西側にゴーヤーで目隠しを作ってもらいました。緑のカーテンで日陰の恩恵を受けるのはもう少しかかりそうですが、ゴーヤーの実はいくつかぶら下がりはじめました。何個ぶら下がっていると思いますか？「5」（ゴーヤー）です。涼しくなったでしょうか。

さて群衆とイエスの噛み合わない対話の最後はこうでした。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」「わたしが命のパンである」これは、イエスが招く場所にたどり着けない人間の、変わらない姿なのかもしれません。多くの人がいろんな場面で「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と問いかけるのですが、考えの及ばない私たちは、命のパンであるイエスにたどり着けないのです。

主任司祭が切に「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と願い求める場面があります。それはカトリック信者の最期を看取り、神様のもとに送り出す「葬儀」の場面です。私の葬儀ミサの説教は、8月号の「瀬戸山の風」にも触れましたが、「この人はどのように神とつながって生きてきたか」「この人はどのようにこれから神とつながることができるか」この一点に集中しています。

亡くなった人が信仰生活の中でどのように神とつながって来たか、関係者に聞くこともあります。ですがたいていの場合、私は説教を準備する時間の中で、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と願っているのです。

もう少し付け加えると、「この人があなたからいただいたパンは何ですか。どこで命のパンをいただいて生きていた人ですか。私がそれを見送る人々に知らせますので、どうか教えてください」そう言いながら説教を考えているのです。

ただ、主任司祭もまた、考えの及ばない人間の一人に過ぎません。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と熱心に問いかけますが、いのちのパンであるイエスとの関わりにたどり着けない時もあります。すると葬儀の説教の中では「私の力が及ばず、本当に申し訳ない」そんな気持ちです。

これからも私は葬儀の説教で、できるだけ一人ひとりのことを思い巡らしながら「この人は命のパンを携えて旅立っていきました。この人はこのような形で、命のパンをいただいていたのです」と紹介して送り出したいと思っています。

私自身が身近に感じる場面を紹介しましたが、一人ひとり自分の生

活に当てはめてください。たとえば、家庭で忠実に朝晩の祈りをしている家族がいらっしゃると思います。お祈りをして、私たちが求めていることは何でしょうか。家族の健康でしょうか。家庭の平和でしょうか。それとも、別の答えでしょうか。

何か学び始めている人もいます。カテキスタ養成講座に参加している人たちはこれに当てはまります。学びながら、何かの答えを求めていることでしょうか。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」。もちろんイエスの答えは「わたしが命のパンである」なのですが、それが予期せぬ答えだったらどうでしょうか。

もしも、予期せぬ別の答えだとしたら、私たちは受け入れることができるでしょうか。私たちはか弱い人間なので、イエスの示す答えと噛み合わないことがあります。「自分はそういう答えを考えていませんでした」と。

けれども「予想と違う」と言っている私たちと「わたしが命のパンである」と言われるイエスと、どちらに合わせるべきでしょうか。私たちがイエスの答えを驚き怪しまないために、次のような心構えが必要です。「イエスが与えてくださるものなら何でも。」パンをくださいと願う私たちにどんな答えが示されようと、私たちは受け入れる。そんな心構えが必要だと思います。

イエスは命のパンとしてご自身を私たちに与えてくださいます。それが癒やしの奇跡を与えている姿であるか、十字架上で命をささげている姿であるか、私たちは選べません。「イエスが与えてくださるものなら何でも」そう心に決めましょう。どの場面のイエスであっても、私たちに必要なものを与えてくれる命のパンなのです。



年間第 19 主日 (ヨハネ 6:41-51)

あなたの手は命のパンを受け取る形になっているか

聖母被昇天直前の日曜日、暑くもあるし、今日か明日か気になることもあるし、説教は短めにしたいと思います。

何かを手にする時、先を争って手にしようとする場合と、順番に沿っていただいたりする場合とでは、手の出し方が違うと思います。先を争って手を出す時は、手の甲を上にして、上から掴もうとするはずです。

一方、順番に沿って何かを手にする時、それは配られたもの、配達されてきたものですから、手の甲を下に、手のひらを上にして受け取るはずです。

問いかけたいのは、今あなたが手にしようとしているものを、あなたは手の甲を上にして掴みと取ろうとするのですか、手のひらを上にして、大切にいただくとするのですか、どちらですか？ということです。

今週の福音朗読で、イエスは「わたしは命のパンである」(6・48)とはっきりおっしゃいました。ここで考えてみましょう。イエスという命のパンを手に入れるのに、あなたは先を争うように手の甲を上にして手を伸ばし、掴み取ろうというのですか。それとも手のひらを上にして、与えられるその時を待って、いただくのですか。どちらでしょうか。

私たちが聖体拝領をするときの動作を思い出しましょう。司祭が「キリストのおんからだ」と言って聖体をかかげます。私たちはどのように手を準備するのでしょうか。先を争って掴み取る手の出し方ですか？まさかそんな人はいないでしょう。

聖体拝領の手の形が、私たちに命のパンであるイエスとの向き合い方を教えてくれているのです。命のパンに私たちがあずかるためには、順番を待つ人のように、心を整えておく必要があるのです。もっと言うと、順番を待つことすら横に置いて、命のパンが手のひらに授けられるその時をじっと待つ。そんな心の準備が必要なのだと思います。

残念ながら朗読に登場する群衆は、手を伸ばし、手の甲を上にして、先を争って掴み取ろうとする人たちになってしまいました。手の甲を上にして争って集まる人たちから、命のパンであるイエスはこぼれ落ちていくのです。

神の恵みを待ち望む時、祈りに答えてくれる神に顔を上げる時、照らしを求めている時、苦しみの意味を教えてくださいと願っている時。あらゆる時に私たちは手のひらを上にして、手の甲を下にしていなければ、受け取り損ねるのです。

私はこれまで、命のパンをいただくためにイエスとどんな向き合い方をしてきたのでしょうか。マリアは私たちのあるべき姿を間もなく祝う聖母被昇天で示してくださいませるでしょう。恵みをいただくふさわしい心を準備できるよう、主に照らしを願いましょう。



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

私たちはマリアを慕ってここに集まった

聖母被昇天の祝日、この祝日をどのように祝うのか、そこから広げて、私たちはふだんのミサをどのように祝うようにすれば、より積極的にミサに参加する気持ちになれるか、考えてみたいと思います。

13日月曜日に、ご年配の男性がミサを頼みに来ました。この日午前中は司祭団ソフトの練習に召集され、若い司祭たちに混じって汗をかき、へトへトになって司祭館でひっくり返っているときでした。もう少し詳しく言うと、シャワーを浴びてそのままの状態ですぐにひっくり返っていたのです。

慌てて服を着て、「よりによって月曜日に」と思いながら玄関に立つと、ご年配の男性が二人立っていました。「〇〇と申します。墓参りと、おばを訪ねにやってきました。ミサをお願いします。」ミサと言ったので急に私の顔はにこやかになり、「ああそうでしたか。暑いのに大変でしたね」とねぎらいの言葉をかけました。

この方々が訪ねに来た人は、私がお見舞いしている人でした。苦勞した時代に良くしてもらって、歳をとった今でも当時のように「お姉さんお姉さん」と言うのだそうです。

ミサは、そうしたお世話になった方を含めた意向のミサでした。私はここで、ふと考えたのです。私たちが小さい頃に「お姉さんお姉さん」と慕った人は、いつになっても訪ねていくし、いつになってもお姉さんとして慕うのではないだろうか、ということです。

今日私たちは聖母被昇天の祝日を祝っています。マリアが体も魂も天にあげられたことを祝う日です。イエスと最も深く結ばれていたマリアが、真っ先に復活の栄光にあずかったことを祝う日と言っても良いでしょう。ただ実際には、体も魂も天にあげられたことを祝いに行きましようと思っただけの人はいないのでしょうか。あまりいないかもしれません。

それが悪いと言っているわけではありません。私が言いたいのは、私たちはもっと素朴な理由から、今日の聖母被昇天のミサに与っているのではないのでしょうか。たとえばそれは、守るべき大祝日だからかもしれません。

残念ながら、ある時から日本の教会は聖母被昇天を守るべき大祝日から外しました。今はクリスマスと、神の母聖マリアの二つだけが守るべき大祝日です。あと守るべきなのはふだんの日曜日です。

先ほどのミサに行く動機ですが、もっと単純な理由で集まっているかもしれません。「マリア様のお祝いだから」この理由で集まる人も多いことでしょう。マリアを慕い、マリアに親しんで日々を過ごしている。だからマリア様のお祝いには参加したい。この考えは、まさに小さい頃から姉と慕った人を歳をとってからも変わらず大切にし、欠かさず訪ねに行く姿ではないのでしょうか。

私はこうした考えが、聖母被昇天を祝うすべての人に浸透したらいいなと思っています。ふだんから聖母マリアに親しんでいるから、集まる。家庭でロザリオをしている人は特にそうでしょう。また家庭祭壇にマリア様を飾ったり、マリア様を額に入れた絵を飾ったりする家庭も、マリア様に親しみを感じるきっかけになるでしょう。こうしたふだんの聖母マリアとのふれあいが、「マリア様のお祝い日だから集まる」この考えに行き着くのだと思います。

同じように、ふだんの日曜日のミサに親しむためには、「イエス様のお祝いだから集まる」そんな素朴なきっかけが浸透してほしいなと思うのです。ふだん家庭で祈る時、イエス・キリストに呼びかけて祈ることが圧倒的に多いはずです。

家庭祭壇に聖母マリアだけ飾ってイエス像を飾らない家庭もいないでしょう。イエス像も飾ると思います。そこから、ふだんイエス・キリストに親しみを持つ人に育っていけば、「日曜日はイエス様のお祝い日だから」この理由だけで教会に集まることができるのではないのでしょうか。

福音朗読でマリアは神をたたえて、「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」(1・51-53)とも言いました。

思い上がる者、権力ある者、富める者は皆、12日の日曜日に話した通り手の甲を上にして人を呼びつけ、上から掴み取り、命令する人たちです。神はそのような者の間を通り抜けて、身分の低い者、飢えた人、そのほか手のひらを上になっている人々に近づくのです。

マリアもまた、小さくされた人の代表です。人は手の甲を上にして人を慕っては行かず、手のひらを上にする人に親しみを覚えるのです。マリアを慕う人として集まった私たちは、これから出会う人々に、「私たちはマリア様を慕っているので教会に集まるのです。私たちはイエスを慕っているので教会に集まるのです」と知らせましょう。

マリアを慕って教会に集まる人が増えれば、平和はもっと身近なものに、現実的なものになっていくはずですよ。



年間第 20 主日 (ヨハネ 6:51-58)

口のある者は食べなさい

「ユダヤ人たちは、『どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか』と、互いに激しく議論し始めた。」(6・52) ユダヤ人のつぶやきは、現代人も含めイエス・キリストという食べ物を知らない多くの人のつぶやきでもあります。私たちもユダヤ人のつぶやきを出発点に、今週の糧を頂きましょう。

ユダヤ人のつぶやきに答えを得るヒントを見つけました。共観福音書の中に、「耳」に関連する次のような戒めがあります。「耳のある者は聞きなさい」この表現がマタイ・マルコ・ルカの中に出てきますが、これは今週のユダヤ人のつぶやきに答える強力な説明となるでしょう。

もちろん、耳が備わっていない人はいないわけですから、この場合「聞く耳のある者は聞きなさい」ということです。マルコ4章9節やルカ8章8節がそれに当たるでしょう。同様の箇所をマタイはあえて「耳のある者は聞きなさい」とだけ書きます。13章9節がそれに当たりますが、間違った読み方をするはずがないという前提でしょうか。

いずれにしても、イエスが「耳のある者は聞きなさい」「聞く耳のある者は聞きなさい」と念を押す時、話を聞いている人々は準備が必要になります。耳は備わっているのです。ですがあなたの耳はイエスの言葉を謙虚に聞く状態になっていますか？と問われているのです。

同じように、イエスがご自分をパンとして示す時、聞いている人はこのパンを食べる口を用意していなければならないのです。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」(6・51)

「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」ユダヤ人たちは口は備わっていても、生きたパンを食べる準備ができていませんでした。いつの時代でも、準備がととのっていないければ天から降って来た生きたパンに触れることはできません。

ときおり耳にするでしょう。葬儀ミサの中で中田神父は聖体拝領に移っていく直前、参列者の皆さんに「聖体拝領の準備ができている方は列にお並びください」と案内をしています。イエスという生きたパンに触れるためには、心と体がふさわしい状態である必要があるのです。

私たちはこのミサに、生きたパンに触れるために、集まりました。命の糧をいただくのに、どんな準備をしたのでしょうか。列聖されたマザー・テレサは、最も小さな人にお仕えする時、イエス・キリストをいただくと言っていました。人に示した愛や、ゆるしで心の準備をすることもできるでしょう。イエスは福音朗読を通して、「食べるにふさわしい口のある者は食べなさい」とおっしゃっています。



年間第 21 主日 (ヨハネ 6:60-69)

主よ、だれのところへ行きましょうか

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」(6・68) ペトロの信仰告白です。これまで何週かに渡ってイエスは誰であるかを言葉と態度で見て、学んだ弟子たちの代表として、信仰を表明しました。私たちも同じように「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」という信仰を再確認したいと思います。

今週火曜日と水曜日で、侍者と先唱者を連れて五島の福江に行ってきます。五島と言うと上五島も下五島もひっくるめて一つの五島と思っている方もいらっしゃると思いますが、上五島のほとんどのひとは下五島の人と交流がありません。

下五島の人でも上五島の人や暮らしぶりを知りません。同じように上五島で生まれ育った私は、下五島の地理をまったく知りません。五島にいながらそういう状態でしたので、この機会に下五島のことを学んで帰ろうと思います。

「五島の福江に行くそうですね。ついでに野崎島のレンガの教会の写真を撮ってきてください。」これは一つの例ですが、福江から野崎島にはついでで行けるような距離ではありません。私自身、下五島についての知識は、似たようなものです。ぜひ頭の中に地図を描いてきたいと思います。

かつて私は、五島に生まれたことをひどく負い目に思っていました。都会に生まれていたら、私はもっと社会的に成功していたに違いない。そう思っていたからです。五島でとれた魚は都会に持っていかれ、五島の人が食べるのは売れ残りの魚だった記憶があります。五島の人が汗水流して育てたものを食べるのは都会の人。だから五島は嫌いだとしんげんに思っていたのです。

今はどうか。今は考え方が変わりました。五島に生まれたから、都会の人がたまに体験したいという田舎暮らしを知っています。五島の信仰も、古臭いものではなく都会に多大な影響を与えることのできる宝だと知りました。島本大司教様、前田枢機卿様、白浜司教様、これら高位聖職者は都会に影響を与えた五島の信仰の結晶です。

捨ててしまいたいとさえ思ったものの中に宝物があった。私にとってのペトロの信仰告白は「わたしたちは五島を捨ててどこに自分の原点があるのでしょうか」ということです。娯楽も少ない、情報も少ない、生活も選べない。そんな環境でしたが、かけがえのない宝をいただいたのだと思います。ここまで誇りに思えるようになったのは最近のことです。

福音朗読、イエスと弟子たちに不協和音が生じ、ある者たちはイエスを離れてしまいました。朗読で読まれた場面は、一日の出来事ではないかもしれませんが、何年、何十年という教会の始まりの時期に起こった分裂を、一日の出来事の中に埋め込んだのかもしれませんが。

弟子たちの中には、自分が弟子である源泉がイエス・キリストであるにもかかわらずイエスを捨てて、別の道を歩み始める者も現れました。それでもペトロのようにイエス・キリストのもとにとどまる弟子は、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」この言葉をそのたびに確認してイエス・キリストにとどまったのです。

私たちは一時的な思いで故郷を否定したり捨てたりします。私を形造ってくれたものなのに、自分と結びつけない時期があるわけです。故郷の良さを理解するには若すぎるということもあるでしょう。理解できる感性が育っていないこともあるでしょう。残念ながら、故郷を否定する時期を多くの人が通っていくのです。

信仰においても私たちは同じ経験をします。信仰の良さ、ありがたさを一時期否定し、捨ててしまうことがあります。信仰に頼らなくとも自分で生きていける。信仰は卒業した、信仰は幼い頃に一生涯分務めを果たした。いろいろな口実を設けて信仰を遠ざける時期があります。

ですが、私たちの始まりは神なのです。ここに集まっている人は、そのことを理解しています。そして自分の信仰を言い表しに来たのです。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」(6・68-69)

いのちを与えてくださったのは神です。ですから出発点も神です。神に始めを与えていただいた人生、どこに行くというのでしょうか。私たちはこの信仰を表明しにここに来たのです。そしてミサに与り、御言葉と聖体をいただき、生活に戻って、「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」と繰り返しながら日々を送るのです。

ある時期、信仰を否定し、捨てた人も、その信仰が私たちの出発点であり、宝物のある場所だと再確認できるよう願いたいと思います。私たちが何度も繰り返し「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」この言葉を口にするなら、遠ざけた信仰の宝を見直してくれるかもしれません。私たちも繰り返し思い出して、ペトロの信仰告白に続きましょう。そして私たちの信仰告白に続く人を、私たちも育てましょう。信仰の伝達は、実はそれほどたやすいものではないからです。



年間第 22 主日 (マルコ 7:1-8,14-15,21-23)

神への忠実が重荷ではなく喜びとなるために

9月に入りました。子供たちにとっては夏休みが終わり、新学期に向かう心の準備に今週の説教を聞いてくれると嬉しいなと思います。

8月最後の週に、年間を通して平日にミサの侍者と祈りの先唱をしてくれる子どもたちに呼びかけて下五島に行ってきました。「福江に行ってきた」と言ったほうがわかりやすいのかもしれませんが。

田平教会出身の啓輔神父様が福江教会の助任なので、思い切って案内をお願いして下五島の教会をあちこち巡礼して回ることができました。宿泊は、名前は忘れましたが井持浦教会そばに建てられている立派な巡礼宿に子供たち保護者たちは泊めさせてもらいました。

この巡礼宿は私の同級生が井持浦小教区の主任だった時に苦勞して建てたものです。ついでに話しますと、同級生の神父様は資金集めに苦勞しておられ、太田尾教会の私のところまで協力を願いに来たのです。神学生時代から仲が悪かった私に頼みに来たのですから、よほど困っていたのでしょう。お金を貸しました。余談ですが貸したお金が返ってきたのは去年でした。

子供たちと教会巡礼、海水浴のおまけまで付いて楽しい旅行でしたが、個人的に行ってよかったと思ったのは水ノ浦教会です。この教会の敷地内に、野外の十字架の道行が設置されています。私はこれを見てすぐに、「あー、これが田平教会にあったらいいなあ」と思いました。

歩きながら、キリストの十字架の道をお供する。もちろん聖堂内でも十分な恩恵を受けることができますが、これが野外でできたらどんなに素晴らしいだろうと思いました。場所は思い描いている場所があるので、あとは土地の所有者にぼちぼち相談に上がって、形にしたいと思えます。

福音朗読に「昔の人の言い伝え」をなぜ守らないのかとイエスの弟子たちにファリサイ派の人々が詰め寄る場面があります。「昔の人の言い伝え」を大事にするファリサイ派の人たちは決して言い伝えに凝り固まった人たちではなく、もともとは聖書の教えを実生活に生かそうと努力した人たちでした。

ところが彼らの向かった先は、神の思いを実生活に活かすところまでたどり着いてなかったのです。「清い手で食事をする」はたしかに神の望みですが、食器だけでなく家のもの一切合切洗い清めて食事をしなさいとは望んでおられないのです。細かな規則を作りすぎたあまり、「清い手で食事をする」ことから遠く離れていってしまいました。

さて十字架の道行を思い出してほしいのですが、みなさんが十字架の道行で思い出すことはどんなことでしょうか。もしかしたら、「十字架の道行は四旬節にするもの」「条件を整えば贖宥を得られる」そういった事かもしれません。

けれども今並べた2つのことが、もし十字架の道行の信心に取り組

むのを難しくしているとしたらどうでしょうか。もし「十字架の道行きは四旬節にするもの」という考えがこの信心業を私たちから遠ざけているなら、私たちもファリサイ派の人たちと同じ過ちに陥っているのではないのでしょうか。

十字架の道行は、イエスの受難・復活までの場面を思い起こす信心業のはずです。もっと頻繁に、この信心に加わって、イエスのご受難・ご死去・ご復活を黙想できたらと思うのです。十字架の道行を終えて疲れたと感じるのではなく、喜びを感じて帰ることができれば。この教会に野外で十字架の道行を設置したいと思っている私の狙いです。

伝統的な信心業に興味を失っている人は多いと思います。十字架の道行もそうです。こんな流れだからこそ、神への忠実を呼び覚ます信心業を次の世代に伝える工夫が必要だと思います。信心業は、神の思いを実生活に活かす助けとなります。私の在任中に、たとえば十字架の道行のできる「祈りの園」を設けて、親から子に、重荷ではなく喜びと感じられるような伝え方を学ぶ一助ができればと願っています。

「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。」(7・14) イエスは神の思いが何であるかを確実に教えてくださる唯一のお方です。私たちが神の望みをどのように実生活に活かすことができるのか、常に教え導いてくださいます。私も、この教会に熱望している「祈りの園」の計画が本当に神の思いを学ぶ場所になりうるのか、イエスの照らし、導きに心を開いて教えを請いたいと思います。



年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

この方のなされたことはすべて、すばらしい

「この方のなされたことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

(7・37) 周りにいる群衆の、イエスに向けた最大級の賛辞です。これ以上ないくらいにイエスを褒め称えましたが、褒めて褒め上げて、その人達はどうなったのでしょうか。

平戸地区の球技大会ですが、天気がねえ。私が説教を準備している時点で予報を見たところ、一日中雨予報でした。仮に雨が小降りでも、風が強くて体育館の競技以外は難しそうです。私はこの前、ナイターソフトで3打数3安打しましたので、今年の平戸地区球技大会だったら3打数3安打できると思っていたのですが、残念です。

残念と言えば、私の応援しているプロ野球のチームも、マジックが減っていて、もう減らないでほしいと祈りながら試合の様子を見守っています。チームが負けているのに、マジックが減るわけです。このままでは振替休日に広島経由五島福江行きで試合観戦した時、優勝争いの終わった試合観戦になりかねません。適当に勝ったり負けたりしているのですから、他チームはぜひマジックが減るのを阻止してもらいたいです。

さて福音朗読ですが、群衆がイエスを褒め称える声を聞いて、何を考えたのでしょうか。私は、「あなたたちは今はイエスを褒め称えているけれども、しばらくしたらイエスに『十字架につけろ』と言うのでしょうか」そんな事を考えています。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。」この言葉が、イエスに対して最高の言葉ではなく、常に変わらない言葉であるべきです。

イエスが救い主ですと信じる人は、「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と言うのであれば、イエスが徴税人や罪人と食事をすることも、今にも石投げの刑に遭おうとしている罪深い女性をゆるしてあげること、最後に十字架に磔にされていのちをささげること、すばらしいと言える人でなければなりません。けれども集まっている群衆のどれだけの人が、罪人に手を差し伸べるイエスを、十字架に上るイエスを、「すばらしい」と言ってくれるのでしょうか。

同じ問いかけは、私たちにも向けられています。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。」イエスを称えるこの言葉は、私たちの言葉でもあるはずですが、私たちがまた、見た目に華やかな場面ではすばらしいと言っても、目立たない働きや、理解に苦しむ姿や、私たちが受け入れるのが難しい答えを示された時、同じようにつぶやくのではないのでしょうか。

一切を横に置いて、「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と言い切る信仰を願いたいと思います。金曜日に数々の病人を訪ねました。一人は病院を転院していました。一人は病院スタッフがかかりきりでお世話をしていたため、訪ねるのを断念しました。聖体拝領が難しい

病状にある人もいました。そこまで訪ねていながら、手を差し出せずに帰っていくのは、本当に辛いものです。「なぜこうなるのでしょうか」と、納得できずに病室を去っていきます。こんな時でも、司祭は揺るぎない信仰に立って、「この方のなされたことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてください。」と言えるようになりたいです。

よく考えると、司祭が病人を訪ねていくのは病人のそばまでで、病人の魂にまで訪ねてくださるのは他ならぬイエスです。ですから私は一喜一憂せず、「私はここまでしか病人に近づけなかったが、イエスは必ず慰めてくださる。この方のなされたことはすべて、すばらしい。」こう考えたいと思います。こうしたことの積み重ねが、揺るぎない信仰に結びつくのではないのでしょうか。

お一人お一人に当てはめてみましょう。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。」イエスをこのように称えたいけれども、現実の生活はそれを許さないかもしれませぬ。苦しみがあり、悲しみがあり、思うようにいかないもどかしさがあります。こうした中で、「それでも私はあなたを称えます」このように返事をしましょう。

「私たちの信仰はすばらしい」とたやすく言えることばかりではありません。それでもイエスを称える。「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と称える。その積み重ねによって、私たちの目は開かれ、耳は聞こえるようになり、信仰は鋼のように鍛えられるのです。



年間第 24 主日 (マルコ 8:27-35)

どこに行っても語るのはただ、神の教えよ

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(8・34) イエスがご自分に従おうとする者に最初に求める姿勢です。ひとまずイエスに従いながら、最終的にこうなれと仰っているのではなく、まず「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と求めるのです。

なかなか厳しい求めですが、この求めに自分を合わせて再出発してみようと思う人に、わたしは「クルシリオへの参加」をお勧めします。10月5日(金)の晩から、土日と8日(月)体育の日の午後まで、3泊4日の練成会です。場所は田平教会と信徒会館です。最終的に自分を捨て、自分の十字架を背負ってイエスに従おうという人ではなく、まず自分を捨て、自分の十字架を背負って、再出発してみたい人にお勧めします。

再出発を促したい人の例をいくつか挙げます。責任者に選ばれた人。教会の役から一旦離れ、教会との距離感が微妙になっている人。毎日の務めに振り回されて、これまで一度も再出発の機会がなかった人。こういう人たちにクルシリオを通して再出発をしてほしいと願っています。

「興味はあるけど、どんな内容なのかなあ」と思っている人もいるでしょう。クルシリオにすでに参加された方が何を体験したかの教科書です。結婚する人が、結婚生活の内容をすべて知ってから結婚を決めるわけではありません。何も知らずに結婚生活に飛び込む人すらいます。それは私が言う必要もないことでしょう。ですから内容を細かに知るよりも、「あなたが再出発を一度してみたいと思うなら、クルシリオをお勧めするよ」と言う主任司祭が信用できるなら、申し込んでほしいなあと思います。

具体的なことは言いませんが、「クルシリオの期間中はきつかった」と言う人がいます。私は大神学院で助祭に叙階された最終学年で参加しましたが、少しもきつくありませんでした。大神学院に8年暮らしている人には、きつくも何ともなかったのです。

そこからすると、クルシリオの4日間とは、「大神学院の4日間」と言っても良いかもしれません。男性女性問わず、大神学院に4日間体験入学する。そう例えても良いかもしれません。なかなか体験できないことですので、どうぞ検討してみてください。

ところで大神学院の生徒たちは、どれくらいの経費がかかっているかご存知でしょうか。長崎大司教区は、昨年度日本カトリック神学院におよそ3千万円の支出をしました。次年度からは九州管区とそれ以外で独自の体制になります。形は従来の福岡の大神学院に戻ります。経費は膨らんで、4千5百万円になりそうです。

仮に3千万円として、長崎教区の大神学生が10人いるとすると、年間1人3百万円になります。参考までにクルシリオの参加費が3万円と

記載されていますから、数字的にも大神学院での3泊4日の経費と変わらないことになります。

主任司祭が参加費のことを話したのには訳があります。大神学院と似たような4日間を過ごして、再出発を図りたい人がおられるなら、私は喜んで参加費を受け持ちましょう。クルシリオが田平で開かれると言うのに、田平教会の参加者がいないというのは私も顔向けできません。ですから費用が心配な方は、私が費用を負担しますので、大神学院のような4日間を過ごして、再出発してみてください。

クルシリオに適している人をあえて言うなら、ペトロのような人が適しています。イエスが弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」(8・27)と尋ね、弟子たちは口々に「洗礼者ヨハネだ」「エリヤだ」「預言者の一人だ」と言います。その中でペトロは「あなたは、メシアです」(8・29)と、人と違った答えをします。

ちょっと人と違っている。自分をそう思うなら、クルシリオに向いている人かもしれません。言った言葉の重さを後で気づいたり、引き受けた務めの重さを後でひしひしと感じる。最初はあれこれ考えずに入れる人、主任司祭が勧めていることなら参加してみようとする人は、きっと向いていると思います。

イエスはペトロの信仰告白を聞いて、「御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒め」(8・30)しました。大神学院の4日間に似ている生活をした人も同じです。体験した人にしか分からないこと、体験した人たちでしか分かち合えないことが、そこにはあるわけです。

ペトロはじめ使徒たちは、「あなたは、メシアです」と信仰を告白してからが再出発でした。イエスの受難と復活を受け入れなければなりません。自分を捨て、自分の十字架を背負わなければなりません。それは決して楽なものではなく、例えるならペトロが信仰告白をしてからの生活が、「くるしりお」の4日間の体験と言えると思います。

クルシリオを経験した人はこう言うでしょう。「こんなきつい体験を乗り越えられたのだから、きっと人生をやり遂げられる。」大神学院を過ごした人も同じ思いです。私たちはみなさんが4日で終わったことを8年間積み重ねて今に至っています。

ぜひ10月5日(金)の夜から体育の日の午後まで日程を工面して、大神学院の4日間体験入学のような「クルシリオ」を受けてみてください。きっとあなたのこれからの信仰生活の再出発を図る素晴らしい体験ができると思います。繰り返しますが、参加費用は誰かが私を止めない限り、私が引き受けます。



年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

イエスが子供に示す愛を学び行う

9月の第4日曜日は、「世界難民移住移動者の日」と定められています。教皇様は年に6回ある特別献金を伴う日に向けてそれぞれメッセージを出されるのですが、今年の世界難民移住移動者の日に向けて発表されたメッセージを、今週は少し取り上げたいと思います。

与えられた福音朗読でイエスは最後にこう言われます。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」(9・37) イエスが手を取って抱き上げ、弟子たちに示された「子供」は、「世界難民移住移動者の日」に当てはめて考えれば、「難民」「移住移動者」と見ることができます。

「子供」は誰か頼る者がなければ生きていけない存在です。保護者がいなければ、仮に保護者がいなくても手を差し伸べてくれる人がいなければ、その日を生きることさえ難しいか弱い存在です。「難民」「移住移動者」もまた同じです。この人たちに目を注ぐ教皇フランシスコは、「受け入れる、守る、促進する、共生する」この4つに目を向け、具体的な行動を取るように求めておられます。

ところで私たちは5月に田平教会献堂百周年を迎えましたが、それより32年前、この地に出津と黒島から、小さな家族が移住してきたことを忘れてはなりません。私はその最初の移住者たちをどのように思い起こせばよいのか考えて、田平小教区は世界難民移住移動者の日に、江里山に移住してきたとされる方々を思い起こし、ミサの中で祈っていくことにしました。来年からはできれば、江里山の記念碑の前でミサを行い、先祖のことを思い起こしたいと思っています。

イエスが抱き上げてくださった「子供」、全世界の教会が今週目を向けている「世界難民移住移動者」そして田平小教区の礎となって移住してきた出津と黒島からの移住者、どれも「受け入れる、守る、促進する、共生する」この4つが必要な人たちだと思います。

イエスの時代に、子供たちはイエスが呼び寄せ、抱き上げてくださらないと、同じことを十分に施してくれる人はいなかったのでしょうか。勇気ある決断でこの地に移住してきた私たちの先祖の家族も、「受け入れる、守る、促進する、共生する」この4つを十分に受けられなかったかもしれません。世界中に散らばっている現代の難民移住移動者も、先の4つのお世話を十分に受けていないことでしょう。

では、「受け入れる、守る、促進する、共生する」この4つは単なる理想なのでしょうか。私は、イエスだけがこの4つのお世話を十分に果たすことができるのだと思います。すでに時間が過ぎ去っていたり、目の前に難民問題を目にしないために、私たちは十分に果たせないけれども、イエスは過去においでも現代でも、4つのお世話を十分に果たす

ことができるお方です。そこで世界中からこの日に特別献金を募って、私たちのお捧げを、イエスがより良い形で活用してくださるようお願いしています。イエスの手足となって働く人々が、「受け入れる、守る、促進する、共生する」4つのお世話を理想に終わらせないよう、私たちも協力することにしましょう。

一つだけ、私たち田平小教区の先祖を思い出すために、参考になればと思って付け加えたいと思います。私たちは生活の中で、「受け入れる、守る、促進する、共生する」この4つを実践する場がどこかにないか、よく考える必要があります。

新しく家族に加わる人がいるかも知れません。新しい集合住宅ができて、地域に新しい人が入ってくるかもしれない。その人たちも言わば「移住者・移動者」です。移住者・移動者に、私たちはどのような接し方をしてきたのでしょうか。ここから、田平に移住してきた先祖をどのように思い起こしたらよいか、世界難民移住移動者の日にどのように関わることができるか、何かの気付きがあるのではないのでしょうか。

来年は、できれば江里山で、同じ頃にミサをささげて、移住した先祖を偲び、想いを寄せたいと思います。4つのお世話の最後は「共生する」ということでした。移住者である先祖に思いを向けることで、田平教会家族がより良い共生の道を切り開いていくことができるよう、恵みを願いましょう。



年間第 26 主日 (マルコ 9:38-43,45,47-48)

私たちと違って、違いを豊かさに

「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」弟子のヨハネの言葉で思い出したことがあるので、今週はこの部分を取り上げてみたいと思います。

夏休みにミサとラジオ体操に来た子供たち、賞品をあげると言っていたのはもう忘れていると思います。司祭団のソフトボール大会に五島の福江に行って、そこでホームランを含む5打数4安打の活躍をして、それから実家の鯛ノ浦に行くために上五島に移動し、そこで、上五島にしか売っていない、お目当ての賞品を買おうと思っていたのです。

ところがソフトボールに行く前日、広島カープの優勝間違いなしと思って野球観戦に行ったマツダスタジアムからの帰りにお葬式が入って、実家で一泊したあと賞品を買う予定だったのがすぐに帰らなければならなくなって、まだ買い物できていないのです。これから、実家にいる家族と連絡を取りながら必ず賞品を準備するので、もう少し待ってください。

さて私が取り上げた箇所についてですが、かつてフィリピンであずかったミサと、韓国明洞教会であずかったミサ、どちらとも同じ光景を目にしました。それは、聖体拝領のときのことです。私たちが見る聖体拝領の光景は、司祭が聖体を授けている姿、まあせいぜい大司教様と司祭たちが聖体を授ける姿を想像すると思います。ところがフィリピンと明洞大聖堂で見た光景は違っていたのです。

フィリピンで参加したミサは、今から20年も前のことですが、屋根だけ取り付けられた聖堂で、野外ミサのような場所でした。2000人はいたかもしれません。そこで聖体拝領が始まる時に、何人かの信徒がうやうやしく祭壇に近づいてきて、聖体の入ったチボリウムという容器を受け取り、所定の場所に移動していきました。「聖体奉仕者」という任務を受けた人が、聖体を授けるお手伝いをしていたわけです。

明洞では、平日の朝ミサに参加しました。そこで目にしたのはもう一步踏み込んだ光景でした。その日ミサをささげていた司祭の隣で、シスターが、聖体を授けていたのです。教会法典によると、聖体奉仕者と、修道院の院長シスターは、聖体を授けることができるとされています。ただ私の理解では、修道院の院長が授けるのは修道院内のシスターに授ける権限があると思っていました。ですから平日のミサで、一般信徒にシスターが聖体を授けている姿は、私にとってはちょっとした驚きでした。

男性の信徒で、必要な教育を受け、聖体奉仕者に任命された人が聖体を授けるのは、私の頭の中で受け入れることができましたが、正直、シスターが平日のミサで聖体拝領の手伝いをしているのはすんなり受け入れることができませんでした。弟子のヨハネのように「やめさせよう

としました」そこまでは思いませんでした、これってオッケーなのかなあというのは正直思ったのでした。

イエスが弟子のヨハネに示した答えは、今日私にも示されていると思います。「やめさせてはならない。」(9・39)「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。」(9・40)

残念ながら、私たち人間の心はイエスの広い心からすればあまりに狭すぎます。初めて見る光景を、自分たちが見たことのある光景から外れているというだけで「これはいけないことだ」と思ってしまいます。神の栄光のために使えるものは惜しみなく使うべきなのに、私たちの頑なな心が邪魔をするのです。道具にしても、人にしても、神の栄光のために使えるものに制限をかけるよりは、上手に活用すべきなのだと、今回あらためて思いました。

さて田平教会では、10月の典礼に、奉仕者がサンダルを履いて典礼奉仕してもらいたいと思っています。目的は、12月2日の平戸ザビエル祭で、私たちが典礼奉仕に用いたサンダルを奉納するためです。フランシスコ・ザビエルは質素な生活をしながら宣教活動に邁進しました。サンダルを履きつぶすほど歩いて宣教しました。私たちも、ザビエルのようにサンダルを履いて、履きつぶすまではいきませんが、宣教と奉仕活動に使われたサンダルを神様にささげたいと思っています。

ひょっとしたら、私たちの行動を違う教会から来た人は奇異に思うかもしれません。聖堂内でサンダル履きとは何事かと思うかもしれない。ですが私たちは信念を持って取り組みます。この世のものを、神への奉仕のために用い、おささげするのだと。10月の聖母行列、ミサの先唱、聖書朗読、献金集め、奉納など、できるだけたくさんの方が典礼委員会で用意したサンダルを履いてミサに参加してください。

「やめさせようとした。」「やめさせてはならない。」本当は神の栄光のために使えるものでも、私たちの凝り固まった考えでは「とんでもない」と思えるかもしれません。一歩でも二歩でもイエスの思いに近づくために、私たちが自分にかけている制約を取り払いましょう。もっとたくさんの人や物に、神の栄光のためになる場を与えてあげましょう。そうすることで私たちは、イエスの良い弟子であり続けることができます。



年間第 27 主日 (マルコ 10:2-16)

子供たちをイエスの手の届くところに

今週の福音は、2006年の説教を参考にしてまとめました。いろいろ重なって全くのゼロから練り上げるのは困難と考えたからです。取り上げたいのは後半部分、人々がイエスに触れていただくために子供たちを連れてきた場面についてです。

今日から明日にかけて、小学生2人を長崎のカトリック神学院に体験入学に送ることとなりました。よく私は「神学院に行ったら未使用の下駄箱を見つけて、自分の名札を入れてきなさい」と声をかけて送り出します。

子供たちがどのように受け止めるかはわかりませんが、子供たちにとって、「もう一度戻りたい場所」になればこれ以上のことはないと思っています。体験入学でそれぞれが呼びかけを感じ、自分の場所を見つけて帰ってきてくれればと思っています。

神学院体験入学は明らかに子供たちを変える体験です。去年体験入学に行った一人は、それまでは頭を壁にピッタリつけて、「寝てませんよ」アピールをしつつ、ぐっすり眠っていたのが、いっさい寝なくなったのです。この日は本当に寝てないのか、気になってミサに集中できませんでした。

子供たちは体験入学を経てなぜ立派に育ったのでしょうか。私の理解ですが、それは、神学院が十分練り上げたプログラムでもてなしたからではなく、イエスが、ふだんの生活、ふだんの家庭環境では得られない導きをしてくださったからではないでしょうか。

もちろん神学院側は、あれやこれやの綿密な準備を重ねて、体験入学に来た子供たちを魅了しようとするでしょう。しかし突き詰めるとそれは、「人間が準備できる最高のものということ」です。しかしイエスは、神学院の神父様や神学生を通して、それ以上の導きと、直接届く教えを施してくれていると思うのです。

朗読箇所後半部分の中で、イエスは次のようにはっきり仰いました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」(10・14)。子供たちが激しく、大胆にイエス・キリストに触れる環境が神学院にはある。私はそう思うのです。

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」。この言葉は意味深いと思います。子供たちがご自分のそば近くに来ることをイエスが強く望んでおられるのです。子供たちはイエスに近づくことで、イエスから直接教え導かれる機会を得るのです。

私たち大人は、さまざまな思惑で子供たちが作られていくと考えがちです。もし人間の思惑よりもイエスの導きがすぐれていると思うなら、イエスに触れることができる環境を作ってあげてほしい。私たちはそのことだけに心を配れば、あとはイエスがすべてを計らってくれるのでは

ないでしょうか。

神学院体験入学は、子供たちをイエスに触れさせるまたとない機会と思っています。体験入学で見たことが、今後どのように花咲くのかは予想できません。子供たちを教導いた、イエスが体験した子供たちの中で花を咲かせてくれるでしょう。「子供たちをわたしのところに來させなさい」という言葉は、イエスからの「わたしが責任を持って子供たちを教導きます」という強い決意の表れだと私は考えました。

見落とせない点があります。イエスは、「子供たちをわたしのところに來させなさい」の後に「妨げてはならない」と言っておられます。私たち大人は、いろんな障害物をそのまま放置して、知らずに子供たちがイエスのところに來るための環境を悪くしてしまっていることがあるのではないのでしょうか。

たとえば、朝のミサに子供たちが参加するためには、当然家庭で朝のミサに間に合う時間に起きなければなりません。子供たちは疲れて眠たいから、朝のミサには起こさないでそのまま寝かせてあげよう。それが親の配慮だと思っているとしたら、私たち大人はイエスに叱られるのではないのでしょうか。

むしろ、子供たちがイエスに近づくのに障害となるものを取り除いてあげることが、私たちにできるお世話なのではないのでしょうか。日曜日の朝に眠くてミサに來ることができないとすれば、それはおそらく寝る時間が遅いからです。土曜日にもっと早く子供たちを休ませるようにすれば、朝のミサは決して早い時間ではないはずです。

部活や習い事など、どうしても外せないことで子供たちがイエスに触れる機会が遠ざけられているとしたら、それを仕方がないであきらめるのではなく、ほんの少しでもいいから、子供たちがイエスに触れるチャンスを確保してあげるように大人たちが努力して欲しいと思います。

また、「妨げてはいけない」と言ったのは、単に眼の前の子供たちのことだけ考えなくてもよいと思います。「洗礼を受けた神の子供」を、イエスに近づけるようにして欲しいのです。配偶者や、自分の手を離れてしまった子供たちであっても、「子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない」という言葉は生きているのです。

今回体験入学に参加した子供たちがイエスに固く結ばれる機会を得て帰ってきてくれたらと願っています。「子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(10・14) イエスの招きは今も私たちに迫っているのだということ肝に銘じて、すべての子供たちがイエスに親しく触れることができるように、これからも努力を続けていくことにしましょう。



年間第 28 主日 (マルコ 10:17-30)

昨日の自分に死んで、イエス・キリストを選ぶ

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」
(10・17) イエスに走り寄ってきた人の問いは、誰にとっても答えを知りたい問いかけでしょう。ただ、よく考えると、答えを知っているかもしれない。ひょっとしたら答えを避けているかもしれない。

長崎市伊王島の馬込教会時代、5年間賄いをしてくれた人を久しぶりに見舞いました。黒崎教会から山奥に入った介護老人保健施設に入所していました。あれから9年経って、ずいぶん弱ってきているということで見舞いに行ったのでした。

この賄いさんは私と5年間、漫才の相方のようなやりとりを司祭館でしていました。食事の時テレビで「住宅に落雷被害」というニュースが流れると、「雷に当たると痛いんだよ。ビリビリッと来てね。」「え？当たったことがあるんですか？」「ないね～」

またある時は「お、深堀さんがテレビに映ってる。元気だったんだ～」「え？その深堀さんは知り合いですか？」「知らんね～」そのうちに私が何か言うと警戒するようになるので、一ヶ月は黙っているのですが、もうそろそろ大丈夫と思うとまたからかうのです。

ある時ネット通販で荷物が届きました。箱を開けずにいると中身が気になるのか、「箱を開けなくて大丈夫ですか？」と聞いてきます。私は手かざしをして、「私は神様の次に能力を与えられているから、手をかざすと中身がすぐに分かる」「本当ですか？」「あー、これは『キリスト教神学事典』だ。」

箱を開けると当然注文したものが入っています。それをこの賄いさんは手品を見たような顔をして驚くわけです。それに類することを5年間さんざんしました。そんな日々を過ごしたので、いよいよ弱ってきたと子供夫婦から連絡を受け、これは見舞いに行かねばと思ったのです。

見舞いに行った時間は、たまたま、ホールに集められてそれぞれが活動をする時間でした。車椅子に乗っていました。わたしが目にとまり、よほど嬉しかったのかこう切り出しました。「あ～中田神父様。本当に中田神父様ですよ。夢のようです。これでもう死んでもかまいません。」

それに対し、例えるなら漫才の相方に話すように、私は返しました。「じゃあ財産を遺贈する旨の遺言をちゃんと残してね。なくなったあとミサをするから。」周囲にいた人はギョツとしたことでしょう。けれども、「死んでもいい」というのが本心なら、「遺言を書いて旅立ってね」と言われても驚かないはず。人は核心を突くような言葉を言われたときに、自分の心構えを問われるのです。

さて福音朗読ですが、イエスから「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」(10・19)と言われた人は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」(10・20)と言ったのけました。イエス

はまだ彼の心構えを試す核心に触れていませんでした。

いよいよイエスは、彼の核心に触れる言葉を放ちます。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」(10・21) 彼が手放したくないものを手放さなければ、永遠の命を受け継ぐことはできないのです。

朗読箇所に出てきた人は「たくさんの財産を持っていた」人で、その財産を手放すことができませんでした。私たちが学びを得るためには、自分にとっての「手放すことができないもの」「手放したくなくて、目を背けているもの」が何なのかを見極め、向き合う必要があります。

では自分にとって「手放すことができないもの」「手放したくなくて、目を背けているもの」は何でしょうか。見つける方法を私は知っています。それを失うくらいなら、他のどんな苦労を背負ってもかまわなれないと感じるもの。それが「手放すことができないもの」です。

ある時私は、「そこまでして目を背けるか？」と驚いたことがあります。いちばん簡単な方法を提示したのに、それを避けて、地球を一周して別の方法を選ぶような人を見たのです。きっとその人にも、手放せないものがあるのでしょうか。手放すくらいなら、地球を一周回ってでも別の方法を選ぶと態度で表明したわけです。

なぜ、人に手放せないものがあるのでしょうか。その人が手放せないと思っているものを手放さないと、イエスの声に聞き従うことは叶わない。それなのに、手放すくらいなら世界一周してでも別の方法を探ろうとするのです。その努力たるや、ある意味尊敬に値します。

たくさんの財産を手放せないという人がいます。イエスは別のところでこう言います。「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」(ルカ 12・20) 財産以上に手放してはいけないものを見落としてはいけないでしょうか。

二重の生活をしている人がいます。表向きの生活と、裏の顔がある人です。なぜ、一方を手放せないのでしょうか。イエスの照らし、導きによって与えられた生活に背を向けて、地球一周をして二重の生活を諦めない方を選ぶのでしょうか。なんと回りくどい人生でしょうか。

時に、まるでイエスが派遣してくださったかのように、手放せずにいる姿をズバリ言い当てる人と巡り会うことがあります。先週金曜日のことです。その日は初金曜日と葬式とが重なってしまいました。説教でもそのことに触れました。

その日の夕食、家族が用意した食事の席に呼ばれたのですが、一人の人が隣に座り、こう話しかけてきました。「神父さん。葬式の説教では『初金の病人周りを朝早くからこなしつつ、葬儀のミサと説教、大変やった～』みたいなアピールをすごく強調しましたね。あの掴みの部分は、必要ですか？必要ないでしょ？」

テーブルを囲んでいた人たちが凍りついたのを感じました。私に気を遣ったのでしょう。ただ私は、「この人は非常に面白い！」と思ったのです。誰もそんな直球で私の説教の組み立てに意見する人はいませんから、「あんなこと言って」と肝を潰す思いだったのでしょうか。

「神父さんが言いたかった本当のことは何ですか？」私も言いたかったことはこうだと手短かに言いましたが、「伝わらなかったですね。最初のアピールが引っかかって。」ますます面白いと思い、名前を控えました。「どんだけ俺に食いついてるんですか？」と言われましたが、「おまえが面白いからだよ」そう言っているうちに食事は散会となりました。

「無礼者！」と切り捨てていたら、この人を記憶することはなかったでしょう。けれども私は自分の持っているものを捨てて、この人を手に入れたと思っています。その場で説教して、押さえつけることもできたでしょう。けれども私は、私を捨ててその人を得たことを今も喜んでいます。

皆さんはどうでしょうか？永遠の命を得ることに比べたら、捨てられないものなんて何もありません。永遠の命、すなわちイエス・キリストを得るために、今日もミサにあずかりましょう。悲しみながら去って行くのではなく、昨日までの自分に死んででも、イエス・キリストを選び取ることにしましょう。

年間第 29 主日(マルコ 10:35-45)



年間第 29 主日 (マルコ 10:35-45)

苦しみを苦しみとして受け取るだけで十分

今週は田平教会出身の神父様がまた一人叙階 50 周年「金祝」を迎えます。福音朗読に触れながら、これまでの道のりがどんなに大変なことか、50 年の重みはどれほどか、考えてみたいと思います。ひょっとしたらご本人は大変さや重さについて何も語らないかもしれません。私なりに、推察したいと思います。

50 年を迎える出来事の中で、いちばん大変だろうと想像するのは結婚 50 年です。2 つ理由があります。1 つは夫婦が両方とも生きている必要があるということ、もう 1 つは結婚した年齢が 30 歳を過ぎると、50 年後には 80 歳になっているということです。

その次に大変な 50 年の祝いとして、司祭叙階 50 年を取り上げたいです。たいていの人々が、75 歳を過ぎた頃に叙階 50 年となります。司祭の定年は 75 歳と言われているので、50 年過ぎるまでは特別な事情がなければ現役世代ということになります。しかし肉体的にも精神的にも、30 歳前に司祭になってから、75 歳まで変わらず現役で居続けるというのは、本当に難しいことではないでしょうか。

与えられた朗読箇所の中で、ヤコブとヨハネが「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」(10・37)と願い出ました。単に名誉が欲しかったのではないと思います。自分たちの労苦が、「報いにつながる労苦であるという保証が欲しい」そういうことだったのではないのでしょうか。

私たちは弱さを抱えた人間です。取り組んだことが記憶や記録に残ったり、何らかの報いが返ってきたりすることをどこかで期待しているわけです。苦労が苦労だけで終わることを、とても恐れているわけです。想像ですが、浜崎神父様もこの 50 年は、言葉に表せない苦労を味わってきたことでしょう。

その苦労に対して、今どのようなお気持ちなのかなあと考えるのです。イエスを間近に見て、そばで暮らした弟子達さえ、報いの保証を取り付けたかったですから、見ることも聞くこともできない現代にあってイエスのためにささげた 50 年を、どのように受け止めておられるのかなあ。とても興味があります。

報いがなくても何も不満を感じない時期もあります。司祭になって 25 年の銀祝まで、これと言って報いはありませんでした。会社に勤めると、勤続 25 年で特別表彰とか会社丸抱えの慰安旅行とかあるかもしれません。司祭も 25 年で 1 年間のリフレッシュ休暇を願うことができるのですが、同級生 3 人のうち誰もリフレッシュ休暇を願いませんでした。

特に、何かを与えられなくても、25 年は務めることができました、ですが折り返しを過ぎてみると、1 年 1 年が長く、つらく、重く感じるのです。50 歳を過ぎて急に身体の疲れが取れなくなったり、今まで苦勞せずにできていたことができなくなったり、それはもう前半 25 年までの

1年と、折り返したあとの1年は少なくとも肉体的には感じ方が違うと思います。

浜崎神父様が、そっくり同じ体験をしているかは分かりませんが生身の肉体です。似たような思いはなさっているでしょう。その上で、折り返しの25年を完走したというのは、これはすごいことだと思います。肉体的な弱さをカバーするのは精神ですから、精神面で、きっと前半の25年とは違う何かを体得したのかもしれませんが。

福音朗読に登場するヤコブとヨハネは、言ってみれば弟子としての前半戦で、報いの保証を願ったわけですが、彼ら2人も含め、次のように諭しています。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」これは、弟子たちの後半戦に向けての心構えではないでしょうか。

弟子たちは前半戦は地上のイエスと共に行動し、宣教活動にいそしみました。後半戦は、復活したイエスが遣わしてくださった聖霊と共に宣教活動です。霊が導く宣教の形に自分を合わせていきます。弟子たちに求める宣教者の姿が、「皆に仕える者」「すべての人の僕」だったわけです。

「報いがあったらいいなあ」と思います。それは本心です。前半戦のように、「報いがなくとも構わない」と正直言い切ることができません。肉体の衰えとか変調は隠しようがありません。けれどもそれらを乗り越える、少なくとも乗り切る基（もと）は、「皆に仕える者」「すべての人の僕」になりなさいというイエスの招きなのだと思います。

「僕」について、私はルカ福音書の次の箇所を思い出します。「あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなからうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。」（ルカ 17・7-9）

これに対し、僕の返事はありませんが、僕は「主人が私に具体的な感謝をしてくれない」と不平を漏らすでしょうか。そんなことはないはずです。そこから考えて、後半戦の25年を勤め上げた先輩神父様も、同じ心境に到達なさったのだと思うのです。肉体的な限界を乗り越えて忠実に務めを果たせたのは、徹底してイエスが招いておられる「皆に仕える者」「すべての人の僕」の境地に達しているからに違いありません。

私も自分のあり方を考えます。26年経過した今は、26年前の新司祭の姿よりも、24年後の金祝を迎えた先輩神父様方に近いと感じます。肉体的な部分だけでなく、精神的にも、「皆に仕える者」「すべての人の僕」ただそれだけで十分であると言える境地に達したいものです。苦しみを苦しみとして受け取る、困難を困難として受け取る。イエスの弟子はそれだけで十分である。そんな境地を、お祝いを受ける浜崎神父様から学び取りたいと思いました。



年間第 30 主日 (マルコ 10:46-52)

身近な声を耳障りに思っていないか

年間第 30 主日を迎えました。年間の主日は第 33 主日までで、その次は王であるキリスト、その次は待降節ですから、年間の主日もあと少しだなあと感じます。皆さんも典礼暦の季節感が感じられる人になってもらえると嬉しいなあとと思います。

季節感と言えば、野球もいよいよ締めくくりの日本シリーズですね。今週の説教は準備するのに苦労しました。なぜかというところ、ここ数日耳鳴りがして、説教の準備に没頭できなかつたからです。どんな耳鳴りかというところ、一日中、「がんばれカープ」という広島カープの応援歌が鳴り響いていて、どうしてもその耳鳴りを追い出せなかつたのです。

原因は、日本シリーズに広島が出ているからなのですが、どうやったら耳鳴りが解消できるのかなあと考えていたら、広島の人から連絡が来まして、「28 日試合を見に行きませんか？」と誘いを受けたのです。思い切って出かけることにしました。

花粉症の人が花粉を混ぜた米を食べて病気を治す治療法があるそうです。私の耳鳴りも、マツダスタジアムで「がんばれカープ」を歌えば、ひょっとしたら治るかもしれない。藁にもすがる思いで耳鳴りの治療に行ってきます。月曜日の朝ミサは広島司教館でささげてきます。

福音朗読はバルティマイのいやしの物語です。バルティマイはイエスが道を通られると聞いて、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」(10・47)と叫びました。人々が黙らせようとしませんが、構わず「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫びました。

それだけ叫び声を上げれば、多くの人の耳に声がこびりついたと思います。耳鳴りがするほどだったかもしれません。耳障りな音を排除したい人もいたはずですが、もうこの段階になると、バルティマイの叫びは「人の声」ではなくて「やかましい音」と受け取られていたのでしょうか。「やかましい音」であれば排除したいと思って当然です。

イエスはどうだったのでしょうか。みんなと同じくバルティマイの叫びが、耳につくと感じたでしょう。けれどもイエスはバルティマイの叫びを拾い上げてくださいました。私たちも必死に声を上げて願いを取り上げてもらう様子は想像できると思います。頭では分かっても、自分と違う人が叫びを上げた時には、邪魔に思ったり、面倒に感じたり、不必要だと切り捨てたりするわけです。

なぜ人は、自分には関係ないと思ったら「目が見えるようになりたいのです」(10・51)という切実な願いも押しえつけてしまうのでしょうか。目が不自由な人が「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んでいれば、「目が見えるようになりたいのだな」と想像できるはずですが、それなのになぜ、イエスに「この人を面倒見てあげてください」と案内することができないのでしょうか。

きっと、自分のことで頭がいっぱいだからです。イエスに群がる群

衆は、自分が何か恩恵を受けたい、自分の必要を満たしてもらいたいと、自分のことで頭がいっぱいなのです。バルティマイの叫びは、もっともだけれども、やはり自分とは関係がないので、耳に入れたくないし、耳鳴りがするほど叫ぶのが面倒で、排除しようとしたわけです。

少しでも、「この人の願いは私の願いでもある」と考えることができたなら、最初から優しく接して、イエスに取り次いでもらえるようにみんなで努力したでしょう。始めから、「あの男を呼んで来なさい」「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」と、バルティマイをイエスのところに連れて行ったでしょう。

どうしたら、「この人の願いは私の願いでもある」と考えることができるのでしょうか。そのためには、自分のことで頭がいっぱい、自分のことで精一杯、そんな生き方を少し変えることだと思います。そしてしばしば、自分のためだけの人生から生き方を変えるきっかけは、自分の努力ではなく、出会う人が与えてくれるのです。

司祭館に住まわせてもらう主任司祭が「自分のことで精一杯」という生き方を横に置くきっかけを与えてくれるのは司祭館のチャイムを鳴らす人たちです。日によって、時間によっては自分のことで頭がいっぱいの時もあります。ついこの前も、純心高等学校2年生の黙想会をお願いされました。40分くらいの話を3回分用意するとすると、何を話すか考える、どう話すか考える、話の原稿を起こしておく、準備は相当必要になります。

それでも司祭館のチャイムは鳴るわけです。玄関に行って対応します。また机に向かい、続きを考えていると別の要件でチャイムが鳴ります。たまには机に向き直ったと思ったらチャイムです。けれども一つ一つの要件は、私を必要としているわけです。

こんなことですから、心の持ち方を変えなければ続きません。「この人の願いは、私の願いでもあるのだ。」私の願いなのですから、どんなにチャイムが鳴ろうとも、応対すべきです。チャイムを鳴らす人は、一人一人、願い事があるわけです。「何をしてほしいのか」と聞いてあげること、きっと司祭という立場でイエスに従う人になれると思います。

最後に、先に行くイエスが向かう場所を確認しておきましょう。イエスが向かうところ、それは十字架です。「この人の願いは、私の願いでもある」手を差し伸べてあげること、私たちは十字架上で命をささげてくださいるイエスにより近づくのです。

イエスを見物について行くのであれば、自分のことで精一杯で行ってもよいでしょう。けれども私たちがついて行くイエスは、ご自分の罪ではなく、わたしたちの罪を背負うためにエルサレムに向かわれるのです。「この人の願いは、私の願い」ずっと同じ思いで、十字架に向かっておられるのです。私たちも、日々誰かに手を差し伸べることで、イエスの歩む道を歩くことができます。



年間第 31 主日 (マルコ 12:28b-34)

神への愛と隣人への愛は別々ではなく一体である

説教を書いている時点では、中田神父の今シーズンが終わっているのか、まだ決着がついていないのか分からずに書いています。私にとっては11月「死者の月」が今シーズンの終了の月です。12月からは新しい1年が始まります。自分で言うのも何ですが、まるで教会の典礼暦を地で行っているような生き方です。

10月28日、広島に行ってきました。博多まで車で走り、ヨドバシカメラという店に車を駐車して、新幹線で広島です。およそ4時間の行程です。広島駅に着くと恩人の方が車で迎えに来ていました。あとで知ったのですが、私が乗った車は広島の白浜司教様をお乗せする車でした。後部座席に座りましたので、司教様のシートに座ったこととなります。大変なことをしてしまったかもしれません。

まずは司教様を表敬訪問に行きました。野球観戦に来ただけなのに、司教様は私のために面会時間を1時間とってください、コーヒーまで用意してくださいました。野球観戦にも興味をお持ちのようでしたが、分刻みの大変な務めですから、明日からの聖務のために無理な誘いはしませんでした。

日曜日の第2戦は見事にカープが勝ちました。実際に見に行った試合で勝って帰ってくるのと負けて帰ってくるのでは雲泥の差です。司教館に泊めてもらう私は広島教区の神父様と司教館での反省会が大いに盛り上がりました。

翌朝は、司教様と司教館で生活する神父様方と、ご一緒にミサをしました。司教様が主司式をなさったわけですが、以前と変わらず、この日もとてもていねいにミサをささげました。真似をするのは失礼かもしれませんが、「まことにとうとく、すべての聖性の源である父よ、いま聖霊によってこの供えものをとうといものとしてください。」こんな感じでした。

前日、コーヒーをいれていただいた時にも思ったのですが、この司教様はどんな小さなことにも真心を込めて、ていねいになさっていると思いました。こんな姿を、司教館の司祭たち、小教区訪問の時に集まった教区民の皆さんは間近で見るとだなぁと思いました。

コーヒーは安いコーヒーだったかもしれません。けれども司教様が、一介の司祭にていねいにお出ししたのです。それが何よりのごちそうだと思いました。同じように、司祭の時から一切変わらないていねいなミサの所作は、ミサにあずかる人にとって最高のもてなしなのだと思えます。

これだけ素晴らしい司教様ですが、実は過去の発言で今も悔やんでおられることがあると打ち明けてくださったことがあります。かつて高校生だった時、後輩の神学生に次のように言い聞かせたことがあるそうです。「香部屋係は神様に奉仕する係だからいちばん尊い係で、ほかの

係よりも優れている。」

高校生だった時、神様に対する熱意のあまりこのように発言したそうですが、「自分は当時の発言を悔やんでいる。神学生に与えられているすべての係が、等しく尊い係なのです。」当時を振り返ってこう言われたのです。

ここには次のような思いが込められていると思います。神学校で与えられるどの係も、最終的には神様をたたえ、神様の喜びとなる係だ。表面的には香部屋係がミサという大切な礼拝を準備するので尊いように見えるけれども、神学校で与えられるすべての係が、神様を礼拝する神学生を育成するきっかけになる。そういう視点が足りなかったとおっしゃりたいのでしょうか。ご自分への戒めとして、司教様は憚ることなく、過去の失敗を話してくれるのでした。

白浜司教様から見えるのは、今週のイエスの言葉です。律法学者の質問「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」（12・28）に、イエスは答えました。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」（12・29-31）

分刻みに忙しい中で、司教様はそんな様子をちらっとも見せずにていねいにいれたコーヒーを出してくださいました。朝のミサにご一緒した時、一つ一つの所作をこれ以上ないほどていねいにこなしながらささげておられました。真剣勝負の緊張感さえ伝わりました。

ここには隣人を自分のように愛しなさいという掟の実践が十分現れています。人に、これほどていねいに接しておられる。それだけで、神を心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、愛しておられることは明らかなのです。私は司教様を通じて、イエスが語られた第一の掟と第二の掟は、優れた人の中では二つの掟ではなく一つの掟となって現れるのだと理解したのです。

私は広島司教様を遠くから眺める者に過ぎません。けれども司教様のお手本は、私の中に自分を映す鏡としていつもそばにあると思っています。一期一会の出会いでお仕えするように人を愛し、神を愛する。毎日鏡を見るかのように、戒めとして思い出し、務めを全うしたいと改めて感じております。



年間第 32 主日 (マルコ 12:38-44)

神への信頼ゼロの献金ではいけない

年間第 32 主日 B 年の福音朗読の中から、「やもめの献金」について考えてみたいと思います。「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」(12・44) 金持ちたちの献金とやもめの献金の間には、金額以上の決定的な開きがあると思います。

半年くらい前の話です。初金曜日の病人訪問をしている時に、見知らぬ青年が、これから訪ねようとしている家のそばでうろうろしていました。私はその人に用事はないので、構わず家に入ろうとしたら、その青年が「おばちゃん家にいるの？玄関から様子をうかがったけど声が聞こえなくて」と私を呼び止めました。その時私は白のスーツを着ていました。

「〇〇さんに用事ですか？これから病人の聖体拝領をするところなので、よかったら一緒に中に入りませんか？」「入っていいと？それじゃあ」と言って一緒に入りました。私はまっすぐに家庭祭壇の部屋に向かい、その青年も私にくっついて来ました。お見舞いを受ける人が家庭祭壇の前で椅子に座っています。青年が突然その人に話しかけました。

「おばちゃん！懐かしかねえ。元気しとった？おいよ。おい。」自分の名前を言って、とても親しそうに話し始めました。しかし私は聖体拝領のために訪ねてきていて、およそ 10 分刻みに訪問先で人が待っています。この青年が話している間に聖体拝領の祈りの準備を整えて、青年の話が終わったらすぐに祈りをして聖体を授けるつもりでした。

ところがこの青年のおしゃべりは一向に終わりません。明らかに祈りを始める態勢になっているにもかかわらず、「おばちゃん。俺お小遣いを持ってきたけん。使ってくれんね。こうして話すのは何年ぶりかなあ。元気そうでよかったよ。早く会いに来ればよかったのにごめんね。」

とうとう私は頭にきまして、「あんたさ、久しぶりか知らんけど、お祈りが終わるまで待てないか。どう見てもたった今お祈りしようとしているよね。それを家庭祭壇の前に仁王立ちでおばちゃんとおしゃべりして。何とも思わん？おばちゃんと一緒にお祈りしてからでも、十分話せるでしょ」

するとその青年は「おばちゃん。俺邪魔したみたいやけん、またあとでね」と言っていなくなりました。家庭祭壇でベールを被って静かに待っているおばちゃんを見て、どうして自分の用事よりも祈りが先だと考えなかったのでしょうか。どうしておばちゃんと一緒にお祈りもせず、お金だけ渡して帰るのでしょうか。青年が立ち去って、ようやく聖体拝領を済ませ、次の家庭に行くために「また来月来ます」と声をかけると、病人訪問のその人は親切にもお車代を渡してくださいました。

突然やってきた青年は、たしかにおばさんに当たるその人にポケットからお札を手渡ししていました。気持ちよく払える額のお金だったので

しょう。一方で私も、訪問して下さったお礼にと、お気持ちをいただきました。ここで今週の朗読の「やもめの献金」を考えてみたいわけです。その青年がおばさんにお小遣いと言って渡したお金は、家庭祭壇で祈りをして聖体拝領を受けようと準備しているのを遮って渡されたお金です。私がいなくなってから、いくらでも個人的に渡せるはずですが、当時のことを思い出すたびに、群衆を前にして誇らしく「大勢の金持ちがたくさん入れていた」（12・41）その場面と重なるのです。

青年は身なりもしっかりしていたので、きっと成功した人なのでしょう。おばちゃんへのお小遣いも、痛くも痒くもない額だったかも知れません。おばちゃんはどんな気持ちで受け取ったのかなあと思いました。それに比べて、この人が私にくださった気持ちは、「自分の持っているものをすべて、生活費を全部」与えてくださるほどの重みを感じたのです。

「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」（12・44）神殿で金を投げ入れた金持ちたちは、何を入れたのでしょうか。マルコ福音記者はわざと、「皆は有り余る中から入れたが」とだけ書いて、何を入れたかを書きませんでした。神殿の向こうにおられる神に有り余る中からゼロを入れたのです。ジャラジャラ音がするほど投げ入れたでしょう。けれども賽銭を投げ入れた人の神に対する信頼はゼロだったのです。

一方で、やもめの献金は、金額はゼロに等しい額でした。けれども彼女の神に対する信頼は、山より高く、海よりも深かったのです。今日まで神に信頼して生きてきた。明日も、神に信頼して生きていきます。彼女が献金箱に入れたのは、神への絶対的な信頼でした。その揺るぎない信仰が、イエスの心を打ったのです。

私たちも、ミサの礼拝に来て、献金をしています。金額はいろいろでしょう。ですが本当にささげてほしいのは一人一人の心です。「さあミサが終わった。これからしっかり働くぞ。」自分のため、家族のために、働くのでしょうか、家族を養ってくださるのは最終的には誰なのでしょう。会社が、明日も生きていく命を与えてくれるのでしょうか。

レプトン銅貨二枚を入れた女性は、「私の命を守ってくださるのは神なのです」その信仰を献金箱に入れました。私は今日のミサに、「私の命を守ってくださるのは神なのです」この信仰をおささげできているのでしょうか。「今週もこうしてミサに来ることができました。来週もお願いします。」その気持ちの入った賽銭を、神様は喜んでくれるのだと思います。



年間第 33 主日 (マルコ 13:24-32)

今この場で、救われる日を生きる

「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」(13・32) 今週の福音朗読の結びです。「だれも知らない」というのは「知る必要がない」そう考えた方がよいでしょう。報復とか、裁きであれば、備えておく必要があります、それがいつなのかを知っておくことは意味があります。しかし救いの日は、私たちがその日を知っていても知らなくても、「救われる日」なのです。

過ぎた週に、母親の兄であった繁一伯父さんの葬儀のため鯛ノ浦に出かけてきました。その間お祈りいただいた皆様には感謝申し上げます。火曜日の朝5時に息を引き取り、私の母親から連絡が入ったのは5時15分でした。火曜日は基本的に夜に修道院のミサです。水曜日の朝ミサの後の移動も考えましたが、朝の船に乗るのは時間的に難しいので、思い切って火曜日の修道院ミサの後博多に移動して、太古丸に乗りました。

火曜日夜の11時45分に博多を出た船は水曜日の朝5時40分に青方に着きました。実家で着替えを済ませ、個人的に伯父さんの家にお悔やみを伝えに行きました。通夜の祈りで出向く時は個人的な話はいかもしれないので、前もって出かけました。亡くなった当時の様子などを聞くことができ、通夜の話をする助けになりました。

実家に戻ってから、何を話すかを考えました。考えながら、10年前に父親を送った時のことを思い返していました。私は父親に申し訳ないことをしたと思っています。10年前の葬儀ミサの説教は、原稿がしっかり残っています。それもそのはずで、亡くなる前から、父親の枕元で父親の顔を眺めながら葬儀ミサの説教を書いていたからです。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」人間の死は裁きを経て救いに招かれる時なのに、私は知らなくてもよいその時を待てずに、前もって準備をしていたのです。

「父親の時は、亡くなる前から葬儀ミサの説教を書いたなあ」と思い出しながら、亡くなった伯父さんのための説教を考えました。両方を比べてみて思ったのですが、亡くなる前に考えた話と亡くなってから考える話とでは違いがあると感じます。今さらですが、父親の葬儀ミサ説教も、亡くなってから考えるべきだったかも知れません。

さて私たちの生きている時代も、「人の子が戸口に立っている」(13・29) 時代と言えます。ただし、「裁きを思ってその日を恐れながら待つ」のではありません。人の子の到来の時は、「救いの日」なので、私たちがその日を知っていても知らなくても、「救われる日」なのです。すると私たちの日々の過ごし方は、その日に備え用心深く過ごすというよりも、「毎日を着実に生きていく、今日を神様の喜ぶように生きていく」その積み重ねなのだと思えます。

今を着実に生きる中で、人の子が到来するとどう変わるのかは考えておいてよいと思います。イエスはご自分の再臨の時を悟らせるために、

「いちじくの木のとえ」という身近なものを使って話しました。できるだけ、身近なたとえを考えたいと思います。身体に注目してみました。私たちの手は、この世で生きるために「手を開いて」活動しています。それが再臨の時を迎えると「手を閉じる」ことになるでしょう。「手を閉じる」とは祈る姿ですから、神にのみ手を向けるということです。

この世では目を見開いて情報を得たり、判断したりします。それが再臨の時を迎えると「目を閉じる」ことになるでしょう。「神を顔と顔を合わせて眺める」ようになり、あちこちから情報を得る必要もなくなります。耳についても同じことです。耳を閉じて、ただ一つの声、神の呼びかけに耳を澄ますこととなります。

他にもたとえることができると思いますが、これくらいでよいでしょう。そして私がたとえたようなことを、生きている間に体験しておくことは有益だと思うのです。手を開いて活動しているだけではなく、手を閉じて、手を合わせて神にのみ心に向ける。神に心に向ける時間が退屈で窮屈であれば、救われてからの私たちの時間はどれほど退屈でしょうか。

「人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」（13・29）「天地は滅びるが、わたしの決して滅びない。」（13・31）神に心に向けるひとときが、退屈、窮屈と感ぜない人になりたいものです。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)



王であるキリスト (ヨハネ 18:33b-37)

王であるキリストのために部下は戦う

年間最後の主日「王であるキリスト」の祭日を迎えました。来週からは待降節で、新しい一年が始まります。ついでの話ですが、来週の待降節以降葬儀が入った場合、守るべき祭日・待降節・四旬節・復活節の主日はミサを伴わない「ことばの祭儀による葬儀」を行うこととなります。ご協力をお願いします。

最近太ったなあ実感する出来事がありました。バイクを動かすためにヘルメットを装着しました。するとほおがヘルメットの中で圧迫されて、非常に窮屈だったのです。顔に肉が付いて、窮屈になっていました。

ヘルメットはいちばん大きなサイズを買っているので買い換えることはできません。そこで安全の保証はできませんが、ヘルメットの内側は発泡スチロールなので、内側を金づちで均等にたたき続けます。すると発泡スチロールが潰れて、隙間ができ、少し楽になります。

ここで考えたのですが、ヘルメットの内側をたたくとヘルメットの安全性が犠牲になりますから、ヘルメットではなく、私の頬を金づちでたたいたら、ヘルメットの中で隙間ができるのではないか。そう思って金づちを手にとってみたのですが、思い直しました。一月の駅伝大会にひょっとしたらまた声がかかるかも知れないので、顔がもう少し小さくなるように、努力しようと思っています。

さて今日与えられた福音朗読の中で、「わたしの国は、この世には属していない。」(18・36)という言葉に目を留めました。この言葉だけで、イエスの御国があること、そうであれば、イエスの御国に属している人々もいることとなります。そこから考えて、では私はイエスの御国に属している人間なのだろうか、という問いもわいてきます。

ピラトの前でイエスは「わたしの国は、この世には属していない」と言い切ったので、ピラト自身もイエスの御国に属していないことを突きつけられ、態度決定を迫られています。その場ですぐにイエスの御国に属する人間となることを選べば、ピラトはイエスをユダヤ人に引き渡さなかったことでしょう。

実際イエスは、「もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。」と言っています。ですが実際には、その場でイエスがユダヤ人に引き渡されないように戦った人は現れなかったのです。

ではイエスの御国に属する人間が誰もいないということなのでしょう。そうではないと思います。イエスが十字架への道を歩む中で、イエスの元を離れなかった人々、イエスの仲間に加えられた人々がいたからです。ベロニカという女性、マグダラのマリア、イエスの愛しておられた弟子、何よりもイエスの母マリア。こうした人々は、王であるキリストがお選びになった道を最後まで離れなかったのです。

また、イエスの代わりに十字架を背負ったクレネのシモン、一緒に十字架にはりつけにされたうちの一人もまた、王であるキリストの道を共に歩んだのです。いったんはイエスから身を隠した他の弟子たちも、あとでは王であるキリストの道を自分たちの選ぶべき道と思い直し、使命を全うしました。

では、私たちは王であるイエスの御国に属する人間なのかと問うてみたいと思います。イエスの御国に属する人間は、信じない人の手にイエスを渡すまいと戦う人です。わたしはイエスが引き渡されようとしている時に、このような態度を取ることができるでしょうか。

ではイエスが引き渡されようとしている場面とは何でしょうか。私たちの周りで、あからさまに不正が実行されようとしているとしましょう。それはまさに、イエスが悪を行う者の手に引き渡されようとしている場面です。そうした場面で私はどれくらい不正と戦おうとしているでしょうか。

不正行為、悪口、嘘、いろいろな場面を見たり聞いたりしながら、戦おうとしないなら、そのたびにイエスは悪を行う者の手に引き渡されているのではないのでしょうか。私たちは時代や場所は違っても、ピラトの前に立たされている王であるイエスに、自分が御国に属している人間であると証明する必要があると思います。

私たちキリスト者が、王であるイエスを、悪意ある人々や信じない人々に引き渡さないと言葉や態度で努力する時、私たちは今の時代にあって御国に属する国民です。イエスの教えに反すると言って、イエスを引き渡さないよう努力する。弱さや力不足を認めながらも悪の力に抵抗する時、神の国は今ここに存在しているのです。



待降節第 1 主日 (ルカ 21:25-28,34-36)

主はあなたを解放するために来られる

典礼暦が改まり、新しい一年が始まりました。主日（日曜日）の朗読福音もマルコ福音書を中心に組み立てていくB年から、ルカ福音書を中心に組み立てていくC年に切り替わります。朗読箇所から「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」を取り上げて、ご降誕への準備を始めることにしましょう。

土曜日の朝ミサで少し話したのですが、皆さんは引っ越しの経験があるでしょうか。私はこれまで少なくとも6回引っ越しを繰り返してきました。学生の身分から初めて赴任した浦上教会、2度目の助任司祭として滑石教会、初めての主任司祭として太田尾教会、2度目が馬込教会、3度目が浜串教会、田平教会が4度目の引っ越しです。

6回引っ越しして痛いほど分かったことがあります。大切なことはどれだけ荷物を減らせるか、ということです。初めのうちはとにかく空っぽにして旅立つ、それだけのために荷造りをしていました。ですから最初から必要ない物まで箱に詰めて新しい任地に送っていたのです。「ひょっとしたら必要かも知れない」ならまだ分かりませんが、絶対に必要ない、そんな物まで荷物の中にあっただのです。

徐々に分かってきました。「ひょっとしたら必要かも知れない物」これも、「必要ない物」です。こうして考えられる限り物を捨てたり誰かに譲ったりして、次の任地に向かう。それでいいのだと思えるようになりました。世の中の言葉で言えば「断捨離」ということになりますが、今週の福音朗読に当てはめて考えると、「解放の 때가近づいている」この呼びかけを思い起こさせます。

厳密に、福音朗読で取り上げている「解放の時」と訳されたギリシア語は、「代価を支払って奴隷を買い戻し解放すること、贖いの業」を意味する言葉です。それはまずはキリストの十字架、「御自分の血によって、人の罪を赦してください、そこに神の恵みが示された」この出来事のことです。さらに、イエスの再臨が、すでに始まった救いの出来事を完成させるための「解放の時」なのです。

イエスによる「解放の時」は、再臨によって完成されます。再び「解放の時」を迎えることで、完成です。私たちがキリストの再臨の時をふさわしく迎えるために、自分の身の回りにある体験で準備をするとよいと思います。私にとってその大きな出来事は時々繰り返される引っ越しです。

初めのうちは必要な物ばかり考えて荷造りをしていました。司祭として奉仕するために、これは必要、これも必要。ひょっとしたらこれも必要、息抜きのためにはこれも必要。このような物への執着から、「ひょっとしてすら、必要ない」と何度も執着から解放されて、新任の時よりも10年目、10年目よりも銀祝を迎えてから、金祝を迎えた時はなお

さら、奉仕に集中できるように造り変えられるのだと思います。

あくまでこれは自分自身の体験ですが、皆さんの中にも「解放の時」を何度か繰り返して、洗礼を受けたキリスト者としてふさわしくイエスを迎える姿に造り変えられる方法はあるはずです。ぜひ見つけて欲しいと思います。今回一つだけ、例を示しますので、よりご自分に合った方法で、私たちも身近な方法で「解放の時」を知り、ふさわしくイエスを迎える生き方に自分を近づけていくことにしましょう。

おそらく皆さんの中の多くの方は、時間は大切だと言うでしょう。時間があまりに大切なために、祈りをする時間すら惜しいと思っている人もいないでしょうか。たしかに起きている間目一杯活動すれば、充実感はあるかも知れませんが、ただそれが、救い主を迎える準備にうまくつながっているでしょうか。ここが問題です。

古い話ですが、畑作業をしながらも昼になったら「お告げの祈り」を唱えている時代がありました。私は長崎滑石教会の伯父さんに沖釣りに連れて行ってもらった時、「昼になったからお告げの祈りをしようや」と言われ、私が気にも留めていなかったことを恥ずかしく思いました。

こうして、作業中に祈りを唱えることで、畑仕事を神様の喜びに変え、趣味の釣りでさえも神様に向けることを忘れなかったのです。収穫第一、超過第一という執着から解放されて、神様の喜びとなることを第一にする人に造り変えられていったのです。

身近な祈りという手段で、私たちは自己愛の強い自分から解放されて、解放の時を待つことができるようになります。私にとって、今の生活と両立する解放の時の準備の仕方は何でしょうか。利己的な自分から解放される体験を積んで、決定的な解放の時を与えてくださる主を待つことにしましょう。

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罌のようにあなたがたを襲うことになる。」(21・34) 幼子として救い主が到来するその日、準備を怠った人のように呆然として主を迎えることのないように、自分に合った準備を見つけ、準備を始めることにしましょう。



待降節第 2 主日 (ルカ 3:1-6)

すべてに始まりを与えてくださる神

待降節第 2 主日は洗礼者ヨハネが活動を始める様子を描きます。田平教会でも同じ始まり方で 3 回話しているので、そろそろ皆さんも覚えてくれていると思います。ただ今年は、洗礼者ヨハネに焦点を当てるのではなく、洗礼者ヨハネを活動へと駆り立てた「神の言葉」に注目したいと思います。

洗礼者ヨハネのおかげで、イエスの宣教活動の地ならしができたことは確かです。彼が授けていた悔い改めの洗礼は、当時ユダヤ人たちが行っていた身を洗い清める儀式と違う新しさがありました。当時のユダヤ人たちが行っていた儀式は、毎日身を洗い、清められていくと考えていました。

一方ヨハネが授けていた悔い改めの洗礼は、一度だけ受ける儀式だったようです。今の洗礼がそうであるように、一度悔い改めの洗礼を受け、繰り返す儀式とは考えていませんでした。そういう意味で彼は先駆者です。

ではヨハネは「先駆者になるぞ」と思って悔い改めの洗礼を宣べ伝えたのでしょうか。決してそうではなかったと思います。一度限りの、決定的な洗礼を授けてくださるお方に、道を整える。そのことだけを考えていました。

ヨハネは自ら意識して「私が始まりだ」とは思っていませんでした。けれども彼は先駆者です。すると彼に先駆者の役割を与え方がいるはず。それは、父なる神でした。ですから今日の場面は、神がヨハネに先駆者の役割を与えて活動させたという、新しい時代の始まりに関する父なる神の物語なのです。

今日の洗礼者ヨハネの活動のように、新しい形の始まり、新しい時代の始まりを神様が与えてくださるさまを、私たちは捉えたことがあるのでしょうか。ここにおられる皆さんはたしかに経験済みです。私たちの教会の百年を祝うために、長く一つの祈りを唱えてきました。「田平教会献堂百周年の祈り」です。祈りの第一声は何だったのでしょうか。「すべてに始まりを与えてくださる全能の神よ」でした。

この教会の建設に、中田藤吉神父様が先頭に立ってくださいました。中田神父様の呼びかけに、田平の神の民はすべて惜しまずに協力しました。ただし始まりを与えてくださったのは、父なる神、全能の神だったわけですね。

私たちはあの祈りを二百回、三百回と唱えて何を学んだのでしょうか。それは、神様が私たちの教会の始まりを与えてくださったということです。始まりを与えていただいて、百年の歴史を紡いできました。この歴史の糸をさらに紡いでいくためには何が必要でしょうか。私は百周年の記念誌に、「縄をなう働き」をたとえに話しました。縄を伸ばしていくためには、少しずつ藁を継ぎ足していく必要があるのです。

洗礼者ヨハネは、決定的な救い主、それはイエス・キリストですが、この方をふさわしく準備するように、人々を悔い改めへと導きました。彼は与えられた時間で、イエス・キリストにつながる人を少し継ぎ足したのです。決して、全世界に行ったのではありません。少し、藁を継ぎ足したのです。

これが私たちの今週の学びだと思います。父なる神は、洗礼者ヨハネを通して、当時新しい時代の始まりを与えてくださいました。父なる神の招きに答えて、ヨハネは歴史の縄をなうのに必要な人々を継ぎ足してくれました。

私たちの時代にも、歴史の縄をなう人々が必要です。一度に百人も二百人も必要なわけではありません。一人とか二人、田平教会の歴史の縄を伸ばしていく人が必要なのです。そのためには働きかけが必要で、働きかけの始まりを与えてくださるのは常に父なる神です。神が私たちに始まりを与えてくださるのですから、私たちは自分のできることで、呼びかけにこたえる必要があります。

洗礼者ヨハネは、「荒れ野で叫ぶ声」となって呼びかけに答えてくれました。では私は、どのように答えたらよいのでしょうか。私たち田平教会の歴史の縄を紡いでいく藁は、どこから手に入れたらよいのでしょうか。家族の信仰の歴史の縄を紡いでいく藁を、どのように確保したらよいのでしょうか。

「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」(3・4) 私たちの教会に始まりを与えてくださる全能の神が、呼びかけの応答を待っておられます。

待降節第3主日(ルカ 3:10-18)



待降節第 3 主日 (ルカ 3:10-18)

当たり前のことをする中に準備を織り込む

「ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。」(3・18) 今週の福音朗読の結びを読みながら、二度見したと言いますか、腑に落ちないなと私は思いました。「福音」はイエスがもたらすはずのものです。なぜイエスと出会う前に、洗礼者ヨハネは福音を告げ知らせていたと書かれているのでしょうか。

移転を控えている坊田公民館の前を通り過ぎる時に、道路反対側の小屋に面白い看板を目にしました。黒い下地に、目立つように白と黄色のペンキで、こう書いてありました。「天の国は近い。罪を悔い改めなさい。」念のため、写真を撮ってきました。

余程、私たち田平教会に対抗意識があるのでしょうか。坊田地区の人たちが悔い改めないから、強い口調で警告を発しているのでしょうか。その辺は分かりませんが、いつまでこの張り紙を貼るのか興味深いです。ご復活の頃にも貼ってあるなら傑作です。またその時期に注意して見てみたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。悔い改めは洗礼者ヨハネのほうが専門家です。彼は自分には厳しい生活を課していましたが、集まってきた群衆には、それぞれの生活の中で、当然払うべき努力の範囲で生活を神に向け直すように促しました。決して無理なことを要求しませんでした。

もしかしたら、無理難題を要求した方が、受けが良かったかも知れません。ですがヨハネは決してそんな態度に出ませんでした。当時の宗教指導者たちが平気で背負いきれない重荷を民衆に背負わせていたのとは対照的でした。「イエスは言われた。「あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ。」(ルカ 11・46)

ヨハネの示した方向に、福音があるのだと思います。来たるべき方を信じて歩く。無理難題の向こうに福音があるのではなく、徴税人も罪人も、イエスを信じて歩くなら、そこに福音があるのです。ヨハネは本能的にそれを理解していて、そのように民衆に説いたのです。

実際イエスも出会うすべての人に、ご自身を信じてついてくるようにと促しました。その中には徴税人も罪人もいました。決して受け入れようとしない宗教指導者たちにも、指導的立場に留まりながらイエスの示す方向に向き直るためあらゆる手を尽くしました。十字架の上でさえも、同時にはりつけにされている罪人に神に向き直るためのチャンスを与え、一人は回心しました。

ヨハネはまだイエスを見ないうちから、聖霊によってイエスの方向に人を向き直らせ、福音を告げ知らせたのでした。人をイエスの指し示す方向に向き直らせる時、すでにその人は福音を告げ知らせているのです。下着を二枚持っている者が一枚を分けてあげるとき。食べ物を分けてあげるとき。規定を守ってお願いするとき。自分の給料で満足し、感

謝できるとき。すでにその人の中で、福音が芽生えているのです。

私たちは福音を告げ知らせる者でなければなりません。だれもが、イエスの示す方向に人を案内する者でなければなりません。それは日常を超えた特別な使命ではなく、今日果たすべきことを果たして、その先をちょっと眺めたときにイエス・キリストがおられる。その積み重ねなのです。

「だれか失敗して私にチャンスが回ってこないだろうか。」この考えの先に、イエス・キリストが待っておられるのでしょうか。おられないと思います。「だれかに責任を負わせたら、私が責任を逃れることができる。」これまた同じことで、その先を見つめてもイエス・キリストは待っておられないでしょう。

私たちも今は、洗礼者ヨハネのように「わたしよりも優れた方」(3・16)を待っています。今の生活の積み上げの先に、イエス・キリストをお迎えする場所が用意できるのでしょうか。たとえそれが家畜小屋のような粗末な場所であっても、誠実な準備を積み重ねているなら、イエス・キリストを迎えるのにふさわしい部屋を用意できます。

「わたしたちはどうすればよいのですか。」腰が引けるような大げさな準備は必要ありません。形式張ってだれかに言ってもらう必要もありません。あなたの今の生活の中で、救い主を迎える準備は必ずできるのです。

あと少し、人に親切にするとか、あと少し、怒りたい気持ちを我慢するとか、そんな身近な努力で、イエス・キリストを迎えるための静かで暖かい部屋を整えましょう。幼子としておいでになる救い主が、私たちの心を住まいとしてくださる日が近づいています。



待降節第 4 主日 (ルカ 1:39-45)

主がおっしゃったことは必ず実現する

「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」(1・45) 私たちに、神の働きかけを心の底から信じさせる投げかけです。私たちの中に、エリサベトと同じ信仰が育っているか、ご降誕を目の前にして、確認するひとときとしましょう。

今年、何回か釣りに行った中で、11月でしたか、3年目にして初めてイトヨリを釣りました。賄いさんにあげたので食べていませんが、「こういう場所で、こういう魚がいるのではないか」そんな推理を立てて、その通りに釣り上げた一匹でした。

釣りが好きな人は大抵せっかちな人なので、釣れないと場所を変えます。散々場所を変えてそれでも釣果がなければ、釣った経験のある場所に戻ります。いろんな試行錯誤を繰り返しながら、最終的には実績のある場所に望みをかけるわけです。

今年一年で数えるほどしか行ってないので、あれこれ言えた義理ではありませんが、自分が釣った場所の中で、今回のイトヨリを釣った場所は、「そうだろうよ。ここで釣れないはずがない。やっぱりいたか！」とブツブツ独り言を言いながら帰った忘れられない思い出です。

福音朗読に戻りますが、エリサベトの言葉は、マリアをたたえる言葉であると同時に、自らに対する言い聞かせでもあったのだと思います。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」エリサベトの夫ザカリアは、主の使いの言葉を全面的に信じることができませんでした。神の使いに「あなたの妻から男の子が生まれる」と告げられた時、信じることができなかつたのです。

エリサベトはどうだったのでしょうか。「私は信じたいと思います」と夫に答えたのでしょうか。むしろ、「冗談言わないでください。私がいくつだと思っているんですか？本気で言っているのですか？」そう答えたのではないのでしょうか。

けれども、神の計画は人が信じるかどうかで始まるわけではありません。最初は信じていない人の中でも神様は計画を始めることができます。マリアがエリサベトを訪ねた頃には、立派な妊婦になっていたでしょう。ようやくエリサベトは、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」このように賛美できる心境になったわけです。

人が思い描いたとおりではないかも知れませんが、神の描いた計画は必ず結果が返ってくる。その体験を積んだ人は、ますます同じ体験を深めようとします。どんな人も、結果が返ってくる場所に答えを探すからです。エリサベトにとってそれは、神の計画でした。人間のどのような業も、エリサベトを「これは必ず実現する」と納得させることはできなかつたのです。

マリアも同じ気持ちでした。神の救いを待ち望んでいたマリアは、

人間のどのような働きにも自分を委ねることはせず、ただひたすら、神のなさる業に信頼を置いたのです。たとえそれが人間の理解を超えることでも、神のなさり方よりも信頼できる方法をマリアは知らなかったのです。そしてマリアが持っていた神への信頼を分かち合える人、分かち合える女性は、現時点ではエリサベトの他にはいませんでした。だから急いでエリサベトに挨拶に行ったのです。

私は、趣味の釣りで迷ったら実績のある場所に戻ります。場所探しは、それはそれで楽しいですが、どうしても結果につながらないと、「あの場所だったら」という場所に行きます。たとえとしては比べものになりませんが、マリアとエリサベトが「主がおっしゃったことは必ず実現する」この体験に信頼を置いていたことを話すきっかけになればと思います。

最後に教皇様来日のニュースを取り上げて終わりたいと思います。すでに皆さんの中でも話題になっているかと思います。来年末に、教皇フランシスコは日本を訪問したいと願っております。

教皇様は、先に前田大司教様を枢機卿に親任しました。世界で120人しか選ばれない職責で、80歳以下の枢機卿はいざという時には教皇選挙に召集される身分です。日本に枢機卿が与えられたことを見ても、いかに教皇様が日本に心をかけてくださっているかが分かりますが、今回はさらに、ご自身が日本を訪れることを表明されたわけです。

「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。」(1・43) 教皇様が日本においでになる大切なわけを、私たちも来年末まで思い巡らしたいと思います。教皇聖ヨハネ・パウロ二世が来日した時にまかれた種が、今たくさんの実を結んでいるように、今回の訪問で、次の時代に必要なものを教皇様の言葉と行いから学ぶことにしましょう。

主の降誕（夜半）(ルカ 2:1-14)



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

すべての人の救いのために来られた

主の降誕、おめでとうございます。「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。」（2・10）夫婦にとって、一人の人の誕生は大きな喜びです。しかしながら主の天使は、この一人の人の誕生を、「民全体に与えられる大きな喜び」と表現しました。

今日のミサの始まりは、照明を落とした暗い中で始まりました。人は暗闇に置かれると、光を探し求めるものです。探し求める光が、今日この世界に与えられたのです。ヨセフとマリアにとっての光、羊飼い、これから訪ねてくる占星術の学者たち、もっと言うと、暗闇に置かれている民全体、すべての人にとっての光が、今日与えられたのです。

今日のミサの中で、私たち皆が暗闇の中に置かれました。「私は暗闇の中に住んではいない。私は十分光の中に暮らしている。」そう考える人もいるかも知れませんが。しかしながら私たちの毎日の生活は、希望を失いそうになる出来事がたくさんあります。

私自身には生じていなくても、家族や親戚、親しい友人が、悲しい思いをして落ち込んでいたりしないでしょうか。あなたはそれを知って、共に悲しんであげるのではないのでしょうか。

慰めの言葉も浮かばないような悲しい出来事を体験した時、「しかたがないよ」「あきらめようよ」ではなく、「どんな悲しみの中でも希望を与えてくれる方がいるよ」と声をかける人でありたい。その希望の光として、イエスはこの世に生まれてきてくださったのです。

イエスは、一組の夫婦の希望として生まれてきたものではありません。周囲の人々という限られた範囲の希望として生まれたのでもありません。今何かの形で闇の中に置かれている人、何らかの影を背負って生きている人、そうしたすべての人を照らす光として、お生まれになったのです。

考えてみると、何も暗闇を抱えていない人など一人もいません。理解してもらえないことを抱えていたり、取り返しのつかない過去を抱えていたり、心や体の不調に苦しんでいたり、何かしら塞ぎ込みそうになるものを抱えて生きているわけです。イエスはその一つ一つに耳を傾け、癒やしと慰めを与えてくださいます。

イエスが今置かれている姿が、すでに光を与えようとしています。お産の環境がない中で生まれたこと、イエスの誕生に不安を抱いたヘロデに命を狙われていること。どんなに過酷な未来にも、イエスはご自分の命をかけて、私たちのために手を差し伸べてくださるのです。

この夜半のミサを終えたなら、どうか馬小屋の近くに来て、しばらく祈って帰ってください。そして「私の抱えている闇に、あなたは答えてくださいますか？」と問いかけてみてください。救い主は今、すぐに答えてくださいます。



主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

すべてに始まりを与えてくださる神

あらためて主の降誕おめでとうございます。夜半のミサ、日中のミサ、両方あずかったださっているのでしょうか。両方参加できる人は、どちらかだけ参加ではなく、両方参加してください。

「万物は言によって成った。」（1・3）ヨハネ福音書は、キリスト教が誕生して、ペトロやパウロがローマで殉教し、迫害が一層激しくなり、ユダヤ人が用いていた会堂からキリスト者が追放され、敵意の目で見られていた時代に書かれた書物です。その雰囲気の中で一つ一つの言葉が紡ぎ出されていることを意識して読み込むとより理解が進みます。

そのような時代の中でヨハネ福音記者が語った先の言葉は、神の言葉が万物に始まりを与えたという絶対の確信に満ちています。どの集会からも追い出され、日々命を狙われているその時に、「万物は言によって成った」と語ることは、どれだけ勇気のいることでしょうか。

それでも福音記者の確信は揺らぎませんでした。すべてのものが、神の言葉によって始まりを与えてもらっているというのです。そうであるなら、私たちもあらゆるものを眺める時、この出来事は、神の言葉によって始まったのだと考えるべきだと思います。

家族の形、教会家族の形、大切な人との出会い、旅立ちや別れも、出来事はすべて、神の言葉によって始まったのです。一日が無事に始まり、無事に終わりました。今日も、自分の務めを全うしました。どんなことも、始まりが神の言葉であるなら、私たちはもっと神に感謝する必要があるのではないのでしょうか。

今日の福音朗読は、ヨハネ福音の冒頭の箇所です。真っ先に、「万物は言によって成った」と述べて、福音記者の流儀で神に感謝を述べているのだと思います。どんな困難の中でも、始まりに神の言葉があったのだから恐れない。信頼は揺るがない。神は必ず手を差し伸べてくださる。私たちにそのように教えているのです。

特に教会生活は、神の言葉によって成り立っています。「父と子と聖霊のみ名によってあなたに洗礼を授けます」との言葉で私たちの神の子としての生活が始まりました。堅信の時には「父のたまものである聖霊の印を受けなさい」という言葉でした。最後の晩餐の言葉を唱えて、小さなパンが聖体となります。「わたしはあなたの罪を赦します」と宣言する時、実際に罪が赦されます。他にも、どの秘跡をとっても、神の言葉によって成り立っているのです。

私たちの身の回り、私たちの生活、あらゆるものが神の言葉によって始まりを与えられました。私たちがそう理解するだけで終わってははいけません。私たちが信じたこと理解したことを、幼子イエスに変わってだれかに語りかけなければなりません。今こそその時だと思います。

聖家族 (ルカ 2:41-52)

神様の時間割に合わせる



私たちが今日お祝いしている「聖家族」では、養父ヨセフの声は聞くことができません。その代わりに、心配して肝を冷やした母マリアの次の言葉を聞きました。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」(2・48) イエスの行動と、マリアの心の変化を学び、私たちの教会共同体に活かす道を確認し、新たな2019年に備えましょう。

「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」(2・48) イエスの行動を簡単に言うと、どういう行動を取ったのでしょうか。結論から先に言ってもいいですが、もう少し状況を確認してみましょう。「イエスが道連れの中にいるものと思い」とありますから、どうやら両親は懸命に探し回ったようです。

結果イエスは、両親が考えもしなかった神殿に留まっていました。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」(2・48) ではイエスはどうすればよかったのでしょうか。前もって、「わたしは神殿に留まりたいです。よろしいでしょうか？」と相談すればよかったのでしょうか。

もうそろそろ、イエスの行動を一言で言ってもよいと思います。イエスはいきなり行動に出たのです。両親にも相談せず、両親が心配するかも知れないのに、いきなり行動に出たのです。

「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」(2・49) イエスはいたって落ち着いています。イエスの答えから考えると、両親ヨセフとマリアの見ているものとは違う何かを、イエスは見ていたのでしょう。

ときおり、両親が「子供の行動や考えを理解できない」と感じることもあると思います。当の本人は、なぜそうしたのか分かっているのです。親は理解できずにうろたえますが、子供は平然としています。私はこのような場合、必ず次のように話してあげることにはしています。

つまり、子供の成長には前もって時間割があるということです。どのような時間割で子供は成長していくのか。それは神様が計画している時間割に沿ってです。ふだんは子供のそばに両親がいて、子供の成長を両親が託されています。ただし、すべての子供には神が計画された成長の時間割があって、神がその時間割に沿って成長するように導いているのです。

もちろん、両親も我が子の成長に対して時間割を描いているでしょう。何歳になったらこんなことを体験させよう覚えさせよう。これくらいの年頃になったら、こんなことにも触れさせよう。しかし子供は、必ずしもその通りに成長するわけではありません。両親の期待よりも歩み

が遅かったり、もっと後で生じてくると思っていたことが思いがけなく早くやってきたりするのです。

これに対して、両親は心配したり、驚いたりするのです。こんな場合でも私は、子供の取った態度が両親の思い描いている時間割から外れているだけであって、本当は、もっと違う時間割の中で子供は成長しているのですよ。そのように話してあげます。子供一人一人に備わっている神様の計画した時間割、その中で確実に歩み続けているのです。

「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」イエスの言葉を聞いて、マリアはもう一度考えました。「イエスははっきり考えを持っている。私はイエスの考えに自分を合わせよう。」マリアはイエスの中にある父なる神の計画を感じ取り、今はイエスに備わった時間割を理解できないけれども、理解できる時が来るまで待とう。それが遠回りのようで近道になると判断したのだと思います。

「母はこれらのことをすべて心に納めていた。」(2・51) 父なる神がイエスに用意された計画を、ヨセフとマリアでも十分理解することはできません。いつもイエスの行動の方が先を行くので、両親の考える時間割の枠に当てはまらず、困惑することばかりです。けれどもマリアが示した態度は、彼女を必ず御父がイエスに用意した計画を理解できるところまで成長させるでしょう。

なぜそのような行動に出たのだろうか。イエスのいきなりとも思える行動を前にして、両親という立場上「謝りなさい」と言う権利を持っていたかも知れません。けれどもヨセフとマリアは、どうやったら今回イエスが取った行動を理解できるだろうか、そのために思いを巡らすことにしたのです。

イエスにしてみれば、「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と言っているのですから、「父上母上とは違う捉え方です」ときっぱり言っているのです。ヨセフとマリアは、イエスが今回取った行動をもっと確かめようと、両親がよりどころにしていた考えを横に置いて、父なる神の計画を知ろうとしたのです。ルカはこの場面で、イエスが何者であるかを書き記そうとしただけではなく、神がイエスに用意した計画を思い巡らし始めた両親ヨセフとマリアも描こうとしたわけです。

イエスが何をしようとしていたのか、それを本当に知るためには父なる神の計画に完全に従おうとするイエスを見いだす必要がありました。ヨセフとマリアに倣い、父なる神の計画を、私たちも思い巡らす人になりましょう。思い通りに行かない時、その出来事のどこかに神が用意した時間割、神が用意した計画と少しずれがあるかも知れません。